

鳩になって

鳩になって

江戸川被爆者の証言

第6集

江戸川
被爆者の証言 第6集

江戸川原爆犠牲者追悼碑の会・編



江戸川原爆犠牲者追悼碑



原爆の図第5部「少年少女」(部分) 原爆の図丸木美術館提供

※画像、内容の無断利用はかたくお断りします



※画像、内容の無断利用はかたくお断りします

突然降り始めた「黒い雨」にはしゃぐ子供たち ～それが放射性物質を含んだ危険な雨とは知らず～

1945年、あの8月6日の朝、当時7歳だった私は爆心地から北西に約19kmの安佐郡小河内村(現安佐北区安佐町小河内地区)の山の中の集落で私達子供8人は「ムショウ」という植物を刈り取り、その茎を蒸す作業をしていた。一緒に作業をしていた先輩はこれを被服支敵で兵隊さんの服や帽子の材料にするのだ、と言っていた。(午前11時頃)、突然広島市の方向の空が黒い雲で真っ暗になり、大粒の黒い雨が土砂降りになった。汗をかいていた私たちは、この雨が放射性物質を含んだ危険な雨だとは知らずはしゃいだ。その黒い雨で頭や顔がずぶぬれになり、白いシャツに黒い斑点が染み渡り汚れた。

被爆体験証言者

迫田 勲

制作・76回生 3年次

持田 杏樹

所蔵・提供

広島平和記念資料館

令和5(2023)年度制作



※画像、内容の無断利用はかたくお断りします

被爆前の産業奨励館

1915年(大正4年)8月「広島県物産陳列館」として開館し、物産の展示、即売、美術展覧会や博覧会などが行われていた。この建物は1933年(昭和8年)には「広島県産業奨励館」と改称され、戦時中は官公庁などの事務所として使用された。優雅な姿が広島の誇りとして存在していた。

被爆体験証言者

岸田 弘子

制作・美術科教員

福本 弥生

所蔵・提供

広島平和記念資料館

平成27(2015)年度制作

※本作品は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの生徒たちが、被爆者の方々に聞き取りしながら共同で制作したものです。被爆の実相を絵画として後世に残し、制作を通して高校生が平和の尊さについて考えることを目的としています。

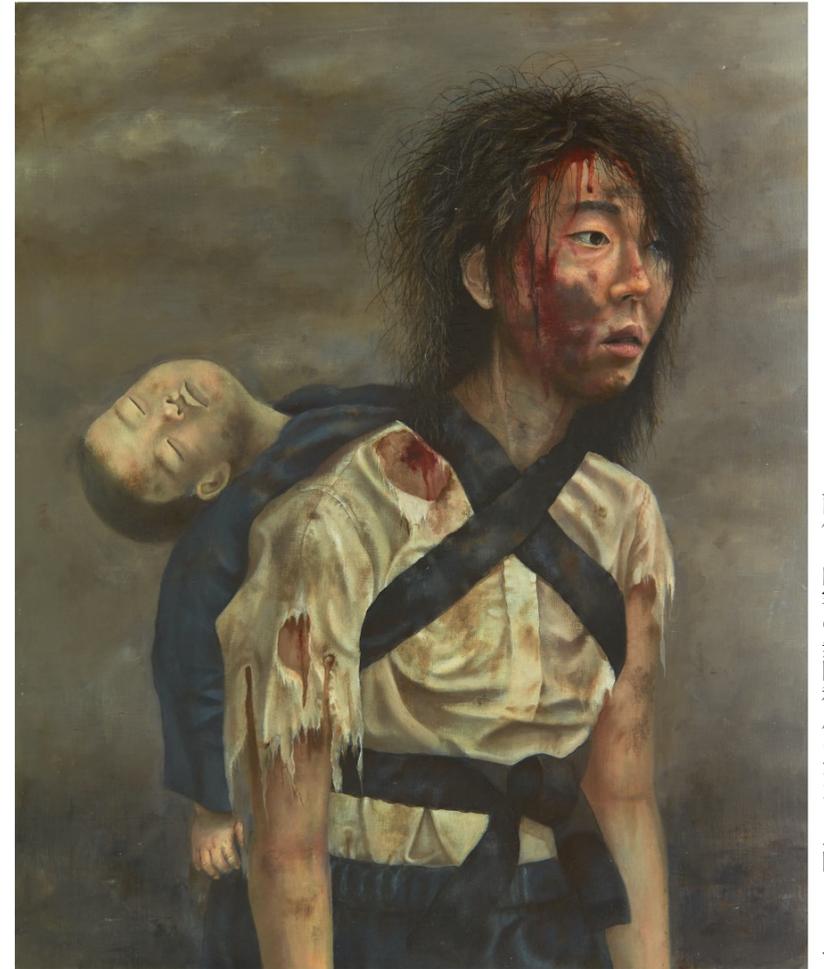


※画像、内容の無断利用はかたくお断りします

母の背中 大火傷にウジ虫が動く

8月6日に白島北町で被爆し、その3日後にリヤカーで広島駅まで行き広島駅から山陽本線(蒸気機関車)で母の実家である松永に到着しました。母は原爆の熱線で首筋から背中にかけてと、ふくらはぎから足首までを大火傷をしていました。実家のお婆ちゃんが母の背中を見て「まるで魚のはらわた(腸)を割ったような感じだ」と言っていたそうです。その背中を腐った肉と勘違いしたのか、ハエが卵を産み付け、成長しウジ虫になる。ウジがわくとそれが背中の上で動くので、強いかゆみを感じた母が(ウジを)「取ってくれ」と訴えると、祖母やその場にいた親族たちがウジ虫を割ばしでつまんで取ってくれました。

被爆体験証言者 瀧口 秀隆 所蔵・提供 広島平和記念資料館
制作・74回生 2年次 山下 聡美 令和2(2020)年度制作



※画像、内容の無断利用はかたくお断りします

死んだ我が子を背負う若いお母さん

避難の列の中に、若いお母さんがおられました。血まみれの顔で、誰が見ても既に死んでいる子どもを背負っているのです。「誰か、この子にママ(ご飯)食べさせてください。水を飲ませてやって下さい」と一人ひとりにすがります。でも誰にもどうしてあげることもできません。自分のことを守ることで精一杯だったのです。

被爆体験証言者 岸田 弘子 所蔵・提供 広島平和記念資料館
制作・68回生 3年次 津村 果奈 平成27(2015)年度制作

鳩になつて



江戸川
被爆者の証言 第6集

目次

原爆の凶第5部「少年少女」(部分) 2
 広島市立基町高校高校生の絵
 被爆前の産業奨励館 4
 突然降り始めた「黒い雨」にはしやぐ子供たち 5
 死んだ我が子を背負う若いお母さん 6
 母の背中 大火傷にウジ虫が動く 7

『鳩になって』第6集に寄せて 山本 宏 親江会会長 . . . 14
 齊藤 猛 江戸川区長 16
 発刊によせて

証言

野村 洋子 弟を失った 20
 園田 太助 壕の奥で助かった 22
 広崎 隆 暑く辛い一日 26
 三宅 千里 原爆と結婚した 28
 坂 美也子 原爆の悲惨さを伝えて 32

藤内 義雄 原爆にすべてを焼かれて 34
 徳能 一馬 母を亡くした償いの70年 36
 絵資料
 平目紀久子 もし、いつもの電車に 40
 山本 宏 今話しておかないと 46
 山本 和子 地獄絵 50
 山崎 秀雄 生死を分けた日 52
 田部 和彦 呉で焼け出され、広島で被爆した 56
 穴戸 昌秀 母・兄・妹をなくす 62
 橋本 春美 なにも見えない 70
 上里 勇吉 見るも無惨な光景 72
 絵資料 「悲しき別れ―茶毘」 76
 宮川 武志 一日一日を楽しく正しく 78
 山口 正 つきまとう「生」への後ろめたさ 80
 齊藤ヤス子 家族を引き裂く残酷な戦い 84
 齊藤 玉子 胎内被爆者として 88
 當 京子 その日の朝は暑かった 92
 佐藤 鈴子 特異な地形に命救われ 96



◆二世、三世の平和への思い

石井乃婦子 両親への思い（感謝）と今後の抱負 102
 山下 秀則 繋ぐことの大切さ 106
 関口 寿義 繰り返してはいけない過ち 108
 古今亭菊太楼 母の死で気付かされたこと 114
 上里ドラムアリーシャ美帆 祖父の人生を振り返り核爆弾、戦争に関して思うこと 118
 高比良怜花 被爆三世として受け取ったものつないでいくもの 121
 コラム1 古今亭菊太楼 121

◆若い世代のメッセージ

瑞江第三中学校 小川 美空 原爆症について調べたこと 124
 葛西南高校 高橋 瑞穂・篠塚 清花 戦争体験を引き継ぐ責任 128
 瑞江第三中学校 森本 涼太 核兵器廃絶を目指して 132
 春江中学校 高橋 莉子 私たちが知ったこと 136
 平井西小学校 瀬野 凜咲 世界が平和であるために 138
 清新第二中学校 渡邊 実有・渡邊 麻央 毎日当たり前前のものではない 142
 松江第二中学校 樋口 柚奈 江戸川区原爆犠牲者追悼式 144
 都立小岩高校 細矢 昇生 江戸川区原爆犠牲者追悼式にあたって 146

春江中学校 馬場 葵 広島修学旅行で学んだこと 148
 瑞江第三中学校 直井 愛佳 命を大切に 152
 北小岩小学校 片山 悠那 互いを脅かさない世界へ 156
 コラム2 古今亭菊太楼 159

◆寄稿

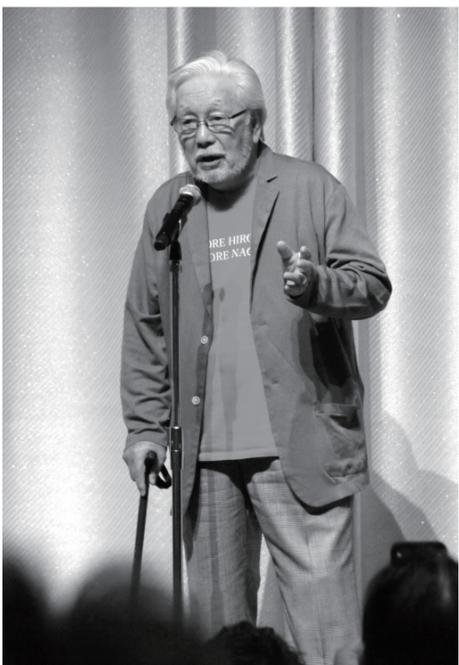
鳩になつて第6集発刊に寄せて 日本被団協・東友会 濱住 治郎 160
 ノーベル平和賞受賞 日本被団協 田中 熙巳 164
 被爆80年 核兵器禁止条約に参加する政府の実現を 丸 宗市 170
 福島第一原発である時、何が起きていたのか？ 小田 美智子 172
 富岡町応急仮設住宅慰問、激励、取材訪問 高比良 毅 180
 江戸川平和コンサートへの歩み 藤居 阿紀子 194
 「江戸川原爆犠牲者追悼碑の会」10年の歩み（再録） 岡田弘隆 199
 原爆行と文画 山本会長の詩吟を聴いて 曾我 篤 222

あとがき 226

『鳩になって』第6集に寄せて

江戸川区原爆被害者の会・親江会 会長

山本 宏



『鳩になって』の発行が14年間もできていなかったことを、非常に残念に思っていました。しかし今回、立派な冊子となり、DVDも加えられ、従来のものに勝るとも劣らぬ『鳩になって』に仕上がりました。編集実行委員会の真摯に取り組む努力と、そのエネルギーに敬意を表します。今年、被爆一世が全国で10万人を下回り、江戸川区でも100人弱と

なりました。被爆インタビューの動画も話せる人が年々少なくなっております。今が原爆被害の実相を伝える最後のときとなっています。ですが、話したくないという方、家族に反対される方などいろいろして、文章や動画に記録して残そうとする人は減少の傾向です。被爆時の年齢や場所、被害の大小、その後の人生など人それぞれで、致し方ないことと承知しています。

そして戦争を知らない子供たち、原爆を知らない人たちへ。
真剣に、読んでいただきたい。聴いていただきたい。

原爆は、核兵器は、悪魔の兵器です。地球上から消えることを望んでいます。



江戸川区長

斉藤 猛



広島・長崎に原爆が投下されてから八十年の節目の年に、証言集「鳩になつて」第六集が発刊されますことは、私を含め戦争を経験したことのない世代が大半を占める今、原爆の悲惨さや戦争の惨禍を自らの証言によって語り継ぐもので、私たちの平和への誓いを呼び起こす非常に意義深いことです。

本区においても、今年には平和都市宣言三十年の節目の年にあたります。本区には、戦争の焼け跡から汗にまみれて復興を果たし、区民が共に手を携えて、良い環境と豊かな人間関係を築き上げ、安心して暮らせる「ふるさと江戸川」を創りあげてきた歴史があります。宣言は、このことを互いに確かめ合い、私たちの理想の地域社会がいつまでも後世に

受け継がれることを願って行われたものです。そして、宣言の中では、水と緑に囲まれた、この素晴らしい郷土を次の世代に守り伝え、生命の尊さと平和の大切さを深く心に銘じ、恒久の平和と繁栄を希求することを謳っております。

昭和五十六年、江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会（現江戸川原爆犠牲者追悼碑の会）の寄贈により、区立滝野公園に原爆犠牲者追悼碑が建立されました。そして、同年七月に第一回原爆犠牲者追悼式が執り行われて以来、毎年七月には、私も含めた参列者が追悼碑に献花を行い、また、幹部職員も毎年八月に参拝を続けています。

この追悼碑には原爆の犠牲となった母と子が鳩となり、世界中に平和を訴え飛ぶ姿が「平和の図」として描かれております。この冊子が、まさに「鳩になつて」多くの人々のもとへ羽ばたき、平和なふるさと、平和な世界を築くために、大きな役割を果たすものと確信しております。



証言

被爆から八十年を経て

題字 高比良毅



弟を失った

広島

野村 洋子

原爆が投下された8月6日8時15分、私は広島北部、牛田町のおじいちゃんの官舎の家に、母と弟と一緒に寄宿していました。

おじいちゃんは出勤のため、家の玄関で丁度靴を履いていました。母は裏庭で洗い物をし、私と弟の健太郎は家の中にいるとき原爆が落ちました。

おじいちゃんはすぐに私たちを助け出してくれ、牛田の北、牛田山の工兵隊の壕に避難しました。農家であった家は、被爆直後に火災により焼失してしまいました。

私は障子の棧のようなものが目に刺さって右目をケガし、弟は後頭部から出血していました。その日は牛田山で一夜を明かしました。

翌日の夕方、弥生おばが勤労働員から帰ってきて、私たちを白島の通信病院に連れて行ってくれ、

治療を受けさせてくれました。その後、弟は衰弱のためか8月14日に死去し、川原で荼毘に付しました。

母の妹・水野三千枝は、市女の2年生で勤労働員県庁庁舎の疎開跡地の整地作業中に被爆し、行先不明の死去でした。

父の寛一は、四国赤岡市(現高知県香南市赤岡町?)で護士師団に勤務しており留守でした。

その後私たちは、尾道のお婆の家の近くに間借りし、ようやく人間らしい暮らしができるようになりました。

終戦を迎え、父も軍務を終えて故郷の兵庫県但馬に帰ることになり、尾道を引き上げました。

父の故郷での生活も間借りの生活でしたが、家族団らんの日が過ぎてゆき、毎日が楽しく、友人もでき、思い出の多くが今も頭にうかんできます。

今日こうして筆を走らせているのが本当に不思議に思われ、私の人生の大切な一ページとして残してまいります。

(2011年 第31回追悼式にて)



全焼した路面電車 中田左都男／撮影 広島平和記念資料館／提供

※画像、内容の無断利用はかたくお断りします



壕の奥で助かった

長崎

園田 太助



私は1939年11月生まれ、歳は73歳になります。戦前の記憶に基づき語りたく足を運びました。本籍地は長崎県の雲仙市です。原爆の投下ひと月前の頃、当時はよく敵の空襲を目のあたりにしていました。約30機くらい編隊で、三菱造船陸軍病院の裏などにボカボカ爆弾を投下して、何十名かは犠牲になり、死人も出た事を覚えていますが。

飛行機の音を聞くたび防空頭巾を被って暗闇に逃げ込んだこともありましたが、周りに友達も多く、物のない時代にしては裕福な生まれで何ひとつ困ってはいませんでした。

父は鹿児島県徳之島生まれの資産家の長男で、窪時祐と名乗っていました。ところがどういう訳か樺山徳武と名乗り、私を連れて方々に行ったり

来たりしていました。兵隊の位の高い人もよく父に敬礼していました。

昭和20年8月9日、原爆投下の1時間ほど前でしたが、私は高熱でぐったりして近所の人に、「この子は早く病院へ連れて行ったほうがよい」と言われていました。

新しい母は朝早く織物工場に出かけており、やむなく父に背負われ家を離れ、浜口より電車に乗り兵器工場近くで下車。父は私を兵隊に預け、香焼町（こうやぎちよう）へ行くからと言いつつ立ち去りました。

高熱がありましたが、防空壕の奥の方はひんやりと冷たく、そこにひび割れた高さ90センチの水瓶があり、その水で頭を冷やしてもらいました。

ちょうどその時、「パッ」と壕の中が明るくなり、鏡が飛び散ると同時に「ガッ」と頭が割れる感じがしたことまで覚えていますが、どれくらい経ったか記憶はありませんが、しばらくして我に返ったときは、何か馬に乗せられて走っているような感じでした。

実は兵隊に襟巻き状態で担がれて避難のため

走って逃げていたのです。30分ほど走ったところで「おい待て」と2名の警察官に捕まり取調べられました。

建物に強引に引き連れられ何だか大声で罵られ、背負っていた兵隊と喧嘩が始まりましたが、位の高い人が降りてきて治まり、特別に棧橋で待機している船で稲佐の家に帰ってきました。

まだ煙は30メートルの高さで山一面覆い被さっていました。その後、煙の少ない稲佐の反対側の鮑の浦の知り合いのところで一夜を明かし、浦上方面で母を探す途中、自分の家のあったところに縄を張った記憶があります。学校の近くで運動場に白骨化した人の骨もたくさん目にしています。

住んでいた家の近くの実弾射撃場の地下3メートルのところにカマス、ムシヨロで作った骨の山がバンク（足継ぎ）の上に無造作に積み重ねてありました（原文ママ）。父に何の骨か聞いたところ「人の骨じゃ、近寄るな」と怒られた記憶があります。

その前日はおぼさん連中がたくさん集まって、大八車とリヤカーで大勢の負傷者を病院に運んでいましたが入りきれず、テントをあちこちに張っ

て一般の方が注射や薬を恵んでいる光景を目にしました。

臭くて我慢ができず、父は伝染病が発生するからと直ぐさま茂木の山を越えて熊本県八代郡の文政村に疎開し、一難を乗り越えました。

しかし私はその頃また具合が悪くなり、リンパ腺が腫れ、髪の毛がボロボロ抜け始め、八代駅の有名な病院で右足リンパ手術を行ったがなかなか治りませんでした。

病名が分からず死んでも構わないからサルバサン606（抗生物質）注射を打ってくれと父が病院に頼みました。身体全体が白人のように真っ白くなったこともあります。

その後、「お前は悪霊を背負わされている」といわれ、熊本の山奥の滝のあるところに連れて行かれ、身体中の吹き出ものを牛の小便で洗い流され、お寺の線香の灰で染められるなど一ヶ月修行を強いられ、なんとか元の身体に戻りました。涙が枯れる程辛かったです。その苦しみは体験した者には分からないと、大人になった自分に言いかけ、語っています。

熊本、福岡、佐賀県内を転々とし、6年後にまた長崎市に入市しました。原爆に遭った防空壕に行ってみると入口も大きく、以前の形とは大きく変わり、天理教信者の経営する一宿30円の宿屋に変わっていました。

当時は軍用トラックを改造し運転席の前部分にはヤンマー発動機を載せ、その回転力を利用して、銭座町の職業安定所専用道路工事者として長崎駅方面から浦上復興工事に力を注ぎました。

以前縄を張った所に、ゼノ神父(ゼノ・ゼブロフスキー)さんのおかげで掘って建て小屋を建てることできました。100坪以上あった余分な土地はゼノ神父に寄付し、その土地へ小さなバタ屋部落の人たちが住んでいると当時の新聞に掲載されました。

振り返れば、随分たくさんの経験をしたものです。生活もどんどん変わりました。よく生きてきたと思います。今は信仰とともに生きています。

(2012年 第32回追悼式にて)



暑く辛い一日

広島

広崎 隆



私は1942年生まれの現在70歳です。当時3歳になったばかりなので、はっきりした記憶はありません。これは母が生前に私に話してくれたことを思い出しながら、初めてお話しするものです。

記憶をたどりますと、67年前、私は呉市に住んで居り、父は軍属として南方にいました。

当日の朝、「ピカ！」と空が光り、しばらくすると、強風がきて縁側にいた私は何か叫んで、家の中に入ったそうです。広島に新型爆弾が落ちたと聞いた母は、翌日、私とふたりで広島市内にある母の実家(天満町)に、母の両親を探しに行きました。結局、両親はおろか、焼け野原の中何も見つからず、暑い辛い一日を過ごし、暗くなつてから親戚の家を目指して歩きました。母の両親は今も行方不明

で、この間、何時間市内に滞在していたのかも不明です。

当時、町角にコンクリート製の防火用水があり、母によると私はその水を飲んだり、水で遊んだりしていたそうです。それが原因かどうか、その後髪の毛が抜けたり、「この子は無事生きられるか？」などと言われていたそうです。高校生までは朝礼でぶつ倒れることが何度ありました。同級生からも「青びょうたん」と言われておりました。高校時代、自分で薬メーカーに増血剤のカタログを送ってもらったことを覚えております。

20歳くらいまでは両親の傍におりましたが、その後家を飛び出し、いろいろな職業を経験し、上京して結婚。人並な人生を送れる様になり、家内には感謝し頭が上がリません。

原子爆弾は地球上からすべて廃棄、無くしてしまわなければなりません。原発もそうです。今、日本は原発再稼働で大騒ぎしておりますが、原子力利用はこの地上に太陽を作ろうとしているのと同じことだと思えます。人間の英知で自然エネルギー、再生可能なエネルギーを利用することは十

分可能と考えます。ただし金と時間が必要ではありませんが…。

次回、機会あればさらにいろいろなことをお話したいと思えます。人前で話をするのは苦手でしたが70歳に成つたのを機に、これからも日本を背負う人々、特に若い人にわずかな体験でもお伝えできるものならばと考え、今日を迎えました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(2012年 第32回追悼式にて)



8月6日夕方、原爆ドームと広島平和記念公園の間を流れる元安川で犠牲者の追悼と平和の祈りをこめた灯籠流しが行われる

原爆と結婚した

広島

三宅 千里



その頃は22歳で、川崎重工の系列会社に勤務していました。家族は母と3歳下の妹の3人で、広島市皆実町に住んでいました。父は私が3歳のときに亡くなり、3人姉妹の長女の姉はすでに嫁いでいました。

原爆投下の日、私は朝7時半頃、隣の奥さんと爆心地から1.7キロの距離の比治山橋東詰の建物疎開の場所に薪拾いに行っていました。

よく燃える廃材を束ねている時、「ピカ！ドン！」とききました。気が付いたら目の前に風呂桶が飛んできていました。土煙で何が何だかわかりませんでした。

当日の私の服装は、上着は白の半袖ブラウスに黒色のモンペ、作業用の白手袋をして運動靴を履

き、帽子をかぶっていました。

熱線を真正面から受けていたため、肌の露出部分、顔、首、腕は大やけどでした。頭は帽子のお蔭で助かり、今も90才にしては髪の毛はフサフサです。首から下は、白のブラウスが幸いし、反射して熱線を跳ね返してくれたようです。しかし、左の乳房は熱線に向いていたせいか、やけどをしました。後年、乳癌を患いましたが、被爆が原因なのではと思っています。

下半身は黒色のモンペのため熱線を吸収し、モンペの前面は焼け落ちて裸でした。今も、モンペの縫い目の太い線は肌に残っています。シミーズ(スリップ)をたくし上げていましたので、膝から上は左乳房以外は軽く、ヒザから下は素足であつたため、今もケロイドが残っています。

痛みよりもあふれ出る出血のひどさには困りました。母方の祖父が医者だったため、私は処方については知識を持っていました。やけどにはチンク油がよく効くとわかっていましたので、たまたま落ちていたガーゼを拾い、電信隊の兵隊さんに充分塗ってもらいました。

右ヒジは上腕と前腕がくっついたままで、2年後に右太腿部から皮膚を移植し、手術をしました。顎と首もくっつきそうになり、ムチ打ち症のギブスのように、首長族のように包帯を何重にもグルグル巻きにしました。隣の奥さんは、私とは逆に背中をやられていました。

自分のことより、前夜、胆石で苦しんでいた母のことが気になり、急いで皆実町の家に戻りました。母は鴨居がおちてきて、鼻を切って意識がもうろうとしていました。背後から母の両脇を抱え、カッを入れました。母は意識がはつきりしましたので、モンペをはき替え、医務室を求めて1.2キロの距離の広陵中学に行くことにしました。

途中、兵隊さんと出会い、兵隊さんが戸板で担架を作ってくれて、私に乗れと言いました。それほど私の出血が激しかったのでしょうか。戸板を兵隊さん4人がかついでくれ、広陵中学にたどり着きました。

広陵中学で応急手当ををし、3〜4時ころ帰宅しました。家は傾き、家の中は目茶苦茶でとても住める状態ではなく、隣の人の好意で、とりあえず隣

の家に入りました。その後、陸軍の兵器廠に勤務する3歳下の妹の勧めで母とともに兵器廠に移りました。

翌日、兵器廠に五日市に住む叔父が迎えに来てくれてしばらく滞在、その後は3歳の時に亡くなった父の故郷・吉田で過ごしました。

被爆後は、自分の傷ついた身体を見て、普通の女性が大どる道をキツパリ諦めました。大手石油会社の水産関係の仕事に打ち込みました。水産会社が遠洋漁業に出航する際、重油をはじめ各種の油を積み込みます。油を選定し、積み込み指示をする仕事を、55才の定年まで、そのスペシャリストとして携わりました。

定年後は皮肉にも、もつとも女性らしいことに夢中になっています。料理にも打ち込み、回りの人たちをもてなし、編み物にも興味を持ち、今は教室も開いています。陶器・食器類のコレクションもやっています。

70歳過ぎてから、原爆が原因と思われる数々の病と付き合っています。乳癌で左乳房を失い、甲状腺、狭心症、骨に癌の疑いのある多発性骨髄腫も。



動員学徒慰霊塔(広島平和記念公園内)
 勤労奉仕に動員され、原爆や戦禍にたお
 れた学徒たちの霊を弔う

80歳で胃癌をわずらい、その後、頸椎十二骨折、左足くるぶし骨折と病み、85歳のとき、骨髄異形成症候群と診断され、2年前から2週間に1度、輸血をしています。すでに135回の輸血を行っています。

私はすぐに医者に行き、疑わしい段階でもメスを入れることを厭いません。そのお陰か、凄まじい病歴でも、90歳まで生きてこられたと思っっています。

一般の女性は、亭主と子どもに寄り添い一生を終えます。私は、90年のうち69年間は原爆に寄り添い、不本意ながら、原爆と結婚したようなものです。放射能という得体のしれない怪物と立ち向かって69年、これからの人生も乙女の気持ちで、天真爛漫に過ごして生きます。今は、ケア付き老人ホームで、毎日わがままに振る舞っています。

(2013年 第33回追悼式にて)



原爆の悲惨さを伝えて

広島

坂 美也子



母は昭和20年、東京大空襲の厳戒体制が敷かれた3月に、私を連れて故郷の広島に帰りました。広島に原爆が落とされた8月6日当時、私は1歳10ヶ月でした。後に母から何度も聞いた原爆の話を書きます。

8月6日早朝、可部町に住んでいる会社員や自営業の魚屋さん、八百屋さん達が仕事や店の仕入れのために、広島市内へと出かけて行きました。そして：8時15分、広島に原爆が落とされたのです。それから刻々と時間が過ぎ、全身火傷を負った人達が足を引きずり、ぞろぞろと帰ってきました。

腕から足から皮膚がだらりとぶら下がり、一步踏みしめるように歩いていました。町の至る背中とか、足や顔に受けたケロイドを見せられ、子ども心に「ひどい火傷の跡だなあ」とびつくりしました。

小学生の頃、毎週日曜日の午後、原爆ドームの傍を通ってNHK放送児童合唱団の歌の練習に行っていました。緑の多い中にある原爆ドームの姿を見上げては「ここに原爆が落とされたんだ」と、廃墟と化した原爆ドームに「ぞーつ」とする恐怖心でいっぱいになったことを覚えています。

高校の修学旅行で東京、日光方面に行った時、現地の人から「皆さん、どこから来たの?」と聞かれて「広島からです」というと「何だ、原爆乙女か!」と言われ、嫌な気分になったこともありまます。東京に嫁いでから勤め先の友人から、「広島から嫁いで来たって言わない方がいいよ」と言われ、「どうして? 原爆が落とされた都市だからなの?」と心ない言葉に悲しい想いをしたこともありまます。

私は子どもたちが小さい頃、広島に里帰りしたときは必ず、原爆資料館に連れていきました。現在は里帰りした時は孫たちも連れていきます。孫たちは必ず「行きたい!」というので、何度も見学に

ところに水をいっぱい入れたドラム缶が置いてあり、被爆した人達が、「熱いよ」「痛いよ」と叫びながら、そのドラム缶に頭から突っ込んで、火傷からの熱さを癒していました。壮絶な光景でした。

このような状況から、広島市に大変な事態が発生したということが分かったのです。ただ1発の原子爆弾の仕わざとは、当時は誰ひとり気づく者はいなかったそうです。

避難者は翌7日の午後9時頃まで続き、それぞれ隔離病舎や寺院、民家、学校などに搬送されましたが、その約3分の2の方々は死んでいったそうです。

私の母は町内の婦人会の救護班として、8月7日から2週間、幼い私を負い、品窮寺(ほんぐうじ)に収容された負傷者の救護活動や治療を行いました。とても大変で、凄い光景だったそうです。

母は原爆を落としたアメリカという国を、当時はとても憎んでいました。私は小学生の頃には「原爆の子」「ひめゆりの塔」等の映画を学校から集団で何度も見に行った記憶があります。小、中、高等学校と、被爆した先生が数人いらっしゃいました。

行きました。

「原爆の悲惨さを後世に伝えていかなければならない!」と強く思っています。国民の約8割が戦後生まれとなつて、戦争の悲惨な記憶も薄らいできています。でも、被爆者の苦しみと核兵器の恐ろしさを次世代に強く訴え継承してゆきたいと思っております。

(2014年 第34回追悼式にて)



原爆の子の像(広島平和記念公園内)

原爆にすべてを焼かれて

長崎

藤内 義雄



私は、昭和20年8月9日、5歳のとき、長崎市旭町で被爆しました。

その日はよく晴れた夏の暑い日でした。私は町内会で作られた防空壕の中にいました。近所の人達が守ってくれて、ひとつのオニギリを戴きました。やっとな手に入れたこのオニギリのありがたい思いは一生忘れることはできません。

夕方になってひとりて恐る恐る防空壕の外に出てみると、一面の焼け野原で真っ黒になっていました。祖母と母が親類の家族のことを心配して帰ってききました。

心優しい兄は長崎造船所で働いていました。母は、兄の上半身の姿を見つけ、気が狂わんばかりに

泣き叫んでいました。翌10日、祖母と母に手を惹かれ親類の家がある野母崎へ歩いて避難しました。

途中、墨のように真っ黒になって亡くなった遺体の山を何度も見ました。硫黄のような強い匂いで立っていられません。眼鏡橋のたもとで水を求めて人々が幾重にも重なって亡くなっていました。川の水は干からびてありません。形もなく、ただ黄色い色のみ残した石もありました。座っていた人の影すらありません。

私の両親も原爆を受け、30代で病に倒れ、次々に亡くなりひとりになりました。

長崎の地獄絵そのままを、幼い私は体験してはなりません。若い世代に語り継いで行かなくしく幸せに生きることのできる社会になるように、毎日祈っています。

最後に私のつたない話をお聞き頂いてありがとうございます。ありがとうございました。

(2014年 第34回追悼式にて)



稲佐警察署／小川虎彦(撮影、寄贈)／長崎原爆資料館所蔵

母を亡くした償いの70年

広島

徳能 一馬



私の体験を話させていただきます。私はこの年になるまでこの場所に立つことが出来ませんでした。70年かかりました。84歳と7ヶ月です。徳能一馬と申します。償いの70年です。

たぶん私は、あの日、母を亡くしました。あの時もう少し捜していたなら、もう少し本気で捜していたら…。自宅の居間で向い合って座っていたその時の事だったので。それから母とは逢っておりません。以来、親不孝を詫びる70年です。

私の住んでいた水主町(かこまち、現在の加古町・住吉町)の自宅は広島県庁の近くで、爆心地より1300メートルぐらいの所でした。

8月6日、その日は勤労奉仕の為、いっしょに行く同級生の友人を母と待っていました。

くの住吉橋の方へ歩きだしました。気付くとハダシでした。不思議と足は熱くなかった様です。

住吉橋の下の筏(いかだ)に降り、とにかく喉が渴いていたので川の水を飲みながら夕方までそこに居ました。後から聞いた話ですが、このあたりは川上からたくさんさんの遺体が流れて来て、岸に折り重なったそうです。

午前中だったと思いますが、世に言う黒い雨が降ったので涼しくなり、道路も冷えて歩けそうなので住吉橋を離れました。

どのあたりだったか、覚えていませんが前の家の木村君と出会い、「日赤に薬があると思うので行く」と伝え、又、ただ歩きました。途中履物を見つけ履いていた様です。

やつと日赤に着いたのですが、建物の内も外もいっぱいの被災者であふれていました。薬など何もありません。中に居ても喉の渴きは取れないと、玄関の近くで蛇口が壊れて水が噴き出している所の草むらに落ち着きました。

水を飲んでホッとしました。気が付くと、私の体の右側は、頭、顔、肩、脇腹、足と半身、傷だらけで、

「いつもより遅れているなあ。今日休むのかなあ」など思っていたその時、「ドーン!! ガシャン!」と大音響がして、驚く間もなく気を失ってしまいました。

それからどれだけの時間が経ったのか、気が付くと家は壊れ、柱や梁や壁などの重り合った中に居ました。何も見える状態ではありませんでした。母が、母が見えませんか。今、目の前に居た母が…。驚いてガレキをかき分けて探しました。幸い、私の体は動く様です。声にならない声で「お母さん、お母さん」と、ガレキの中を一生懸命捜しました。今、そこに座って居たのですから…。

どれだけの時間が経ったのか、通りがかった警防団の人が、

「早く逃げなさい。お母さんは私が探してあげる。とにかく早く逃げなさい、火が廻って来るから」

と言われ、母を思いながらも警防団の人の様子と火に迫り立てられる様に家をはなれてしまいました。

もうあちこちから火の手はあがっていました。火はどこから来るかわからない。まずは川へと近

左半身はやけどでした。顔は腫れ上がり、下唇ははづれていた様です。傷口をふいたり冷やしたりして、そこに横になりました。

暑さ、痛み、疲れで眠っているのか目覚めているのか、暗くなったので寝ていたのかわからない、そんな様子で3日経ち、4日目に父に探し出されるのですが、今でもその間ははつきりとしていません。ただ、近くに共に横になっていた人が、気が付くと居なかったり、「水を飲みたい、水を飲みたい」と訴えていた近くの女学生に、水を入れる容器もないので手ですくった水を3回ほど飲ませてあげましたが、翌日、その女学生も亡くなっていました。少しの水でも飲んで逝けて良かったのかなあと思いましたが、被爆すると、ほんとうに喉が渇くものです。やけどですから。

あくる日だったと思います、広島市の電「ヒロデン」の女性の車掌さんが来て、「食べられるの?」と声をかけてくれました。そして私の腫れあがった口に金平糖を一粒入れてくれました。

おいしい、甘くて、ほんとうにおいしく、痛い口でそつと溶かして食べました。生きかえった気が

しました。手に3、4粒と乾パンをにぎらせてくれました。そして、あくる日も、同じ様に金平糖と乾パンをいただき、「そんなに元気だったら明日はおにぎり持って来てあげるね」と帰って行かれました。

うれしかった、ほんとうにうれしかった。ヒロデンの車掌さんと言う事だけで名前も聞かず終わりました。私は生きられたのです。ほんとうに感謝しております。

食料不足の配給でおにぎりなんて大変なごちそうの時代です。楽しみにして草むらに横になり明日になったのか、まだ今日なのかもはつきりしない状態で、ただ、じつと横になって居た時でした。

「あきこー、あきこー」

と、独特のアクセントで呼ぶあのなつかしい父の声が、すぐそばで聞こえました。父は大きい声の出る人で、ここも居ないから次へ行こうと、5歳年上の姉を呼んでいる声でした。

木村君に言付けた「日赤へ行く」の立札を自宅跡で見つけ、3ヶ日間日赤の中を探し廻っていたそうです。父は朝早く仕事場の宇品に出かけ無事です。

した。とにかく私は助かりました。それが4日目だったのです。

それから父に背負われて被服廠へと行きまし。3〜4キロはあります。ガレキの散乱した道のりは大変だったと思います。感謝しております。

被服廠には軍医がおり、薬もあり、化膿した下唇の手術や傷口の手あてが出来、12月頃には動ける様になり郷里である高知に帰る事になりました。

思い出すと苦しくなる事なのですが、私が目の前に居た母を、居るはずだからと、きつと居ると必死で探した様に、母はもつともつと強く思い、私を探しつづけ逃げ遅れたのだろう、後に母を知っている人から家の近くで亡くなったと聞きま。どうしてもう少し探さなかったのか、胸のかきむしられる思いです。

配給で食料のとぼしい中でも、育ち盛りだからと自分の分まで、私に食べさせた…。そんなことも甦って来ます。

70年経っても消えないこの悔恨の念は、これからも一生消えないでしょう。

全焼した中学校は、10月には授業を再開したそ

うですが、私は療養中で12月には高知に帰ったので、そこから人生が大きく変わる事になりました。

海と山のある自然豊かなふる里に帰ったわけですが、喀血と貧血、ぜんそくをくり返し、どうせ長生きは出来ないだろうからと自由にさせてもらいました。

自由と言っても、かわいいからとウサギを飼うと、増えすぎて餌の草刈りが大へんになったり、池を埋めて家を建てようと、父と小さな車で毎日毎日土運びをし、家が出来ると、「売ったぞー」で終わり。そのかわりに好きなものを買ってやると言うので、「馬を買え」と言ったのですが、これにはさすがの父も困った様でした。

そんな事をしながら、癒されながら、いつの間にか体は少しずつ楽になっていった様に思います。今思えば、父の深い考えだったのでしようか。その父も2003年に母の元に旅立ちました。

長生き出来ないだろうと言われた体も酒、タバコはやらない。よく食べよく寝て体に悪いと言われることはしない様に…。薬はたくさん飲んでいますが、なんとかこの歳まで生きられました。

私は幸せだったと言うか、怪我をした為あまり動けず、悲惨な残酷な光景はあまり目にしてはおりませんし覚えてもおりません。皆様に被爆者の体験として何をお伝えするべきかわかりませんが、一瞬にして、あんなに大勢の人々の命を、いや人生を奪い、人生を狂わせ、70年経っても消えない傷を、一生消えない深い心の傷をつくる様なことは決してあつてはいけないと思います。世界平和の実現を祈つてやみません。ありがとうございます。

(2015年 第35回追悼式にて)



※画像、内容の無断利用はかたくお断りします

倒壊した校舎の下敷きになった子どもを助けることができず、ただ手を握り、声をかけるだけだった。

作者 加藤 義典
情景年月日 1945年8月6日
所蔵 広島平和記念資料館

もし、いつもの電車に

広島

平目 紀久子



当時、私は4歳4ヶ月と幼く、8月6日の記憶はあまりにも頼りないので、後に母や祖母から聞かされた話等を思い起こしながらお話出来たらと思います。

私たちは現在広島平和公園になっている場所の一部、昔は猿楽町と呼ばれた町に住んでいました。その地はまさに爆心地のすぐ近くです。

当日、母と1歳半の弟と3人で、爆心地から3キロちよつと離れた江波町の母の実家にいました。

毎日、午後からそこに泊まりに行き、翌朝8時過ぎの市内電車に乗って自宅に帰るのが日課でした。

8月6日のその日は江波町のお祭りがあり、祖母が食料不足の中、「何とかおいしいものを作って

てくれました。私も母が絵を描いた事は聞いていましたが、実物は見ていませんでした。

その掲載された絵は、市内電車の中で座席に座っている姿のまま黒焦げになった人達を描いた物でした。

もしあの日、私たち親子がいつもの様に朝8時過ぎに帰宅のための電車に乗っていたら、私たちの命もなかった事でしょう。

翌日から母は母の姉と一緒に、その日勤労奉仕に出掛けていた姉の中学生の息子2人を探して、毎日焼け跡を歩いて回ったそうです。

あちらこちら行方を尋ねて歩いていると、火傷や傷ついた人々から、「水を下さい」と懇願されたそうです。が、あまりに大勢の方達なので、その人たちに水を飲ませてあげられなくて、本当に申し訳なかったと心から悔やんでいました。今でも中学生の2人は行方不明のまま平和公園の土の下に眠っていると思います。

近所のお宅の女学生さんが大火傷を負いながら帰宅された時も、薬も何もない中、じやがいもやきゅうり等野菜を持ち寄り、すりおろしたその汁

あげるからゆつくりしていけば」と言ってくれ、自宅には帰らずにいました。

夜祭りを楽しみにしながら、祖母の家の近くの漁船がたくさん舫(もや)つてある漁港まで船を見に行きました。

そうしたら「ブーン」と音が聞こえて来たので青空を見上げると、飛行機が1機、何故かゆつくりと通り過ぎて行くのが見えました。

すぐに走って家に帰り、祖母に「飛行機が飛んでいるよ」と伝えた瞬間、物凄い爆風と黒っぽいほこりか何かと一緒に物の壊れるような音がしました。何が起きたのか分からないまま、みんな呆然としていました。

この被爆の話を読むことについて広島にいる妹に、母から何か別に聞いていないか、私の覚えている事に間違いはないか問い合わせてみました。すると、十数年前にNHK広島放送局から被爆体験者に原爆の絵の依頼があり、母が3枚の絵を提出していたと教えてくれました。

そして、その内の1枚が採用され、『ヒロシマの記憶』という本に掲載されたそうで、その本を送つ

て冷やしてあげる事しか出来なかったそうです。

私が中学生になると、上級生にはケロイドがある方もいましたが、その方を何か特別な目で見ている自分が嫌でした。同じ被爆者なのにです。

また高校生の頃、平和公園に『原爆の子の像』が出来、禎子さんの話に胸がふさがる思いで、友達と折り鶴を供えにも行きました。

それと、授業中にもかかわらずABC(原爆の被爆者に関する調査研究を行った機関)という所へ、クラスの数人と何かの検査を受けに行った事も思い出されます。被爆後の影響などを調査されていたのでしょうか。私が被爆者だと言う事を自覚したのはまさにその時でした。

成人して同窓会等で数人の方が原爆症で亡くなったという話も聞きました。いつか自分もそうなるのではないかと不安な日々を送ったこともあります。

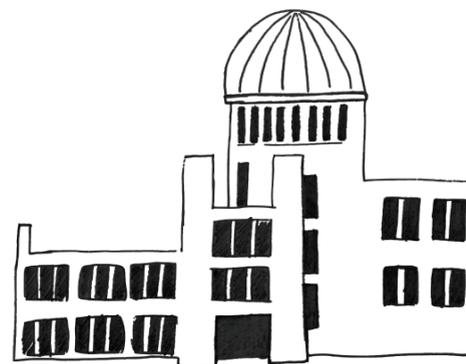
後に結婚をして東京で会社勤めをしていた夫と共に関東に住まいする事になり、いつしか広島を離れて50数年が経ちました。子どもたちが小さいときには、毎年お墓参りと原爆資料館に連れて行



原爆の子の像（広島平和記念公園内）
佐々木禎子さんが亡くなって3年後の1958年5月5日建立。
毎年全国の学校から1千万羽の折り鶴が寄せられる

きました。低学年だったため、ただ怖かったという
思いしかなかった様です。
今年の5月にオバマ大統領の広島訪問が実現し
ました。これからも各国の要人の方々が、一人でも
多く広島、長崎を訪問して下さる事が心からの願
いです。原爆の悲惨な状況をこれからの世に伝え
ていく事が、私たち被爆者の残された大切な役目
だと思えました。1日も早く世界に平和が訪れま
す様心から願っています。

（2016年 第36回追悼式にて）



今話しておかないと

広島

山本 宏



私は満州の金州小学校に入学していました。1年生の終わりに、軍人の父に内地への転勤命令が出て、父は大阪の司令部へ、私たち家族は広島県己斐(こい)町に帰国しました。己斐小学校へは2年生の4月に転入しました。

帰国して4ヶ月が経った8月6日、朝の登校前もののどかな光景です。その時、警戒警報のサイレンが鳴りました。

空襲警報が鳴ると登校は中止ですが、警戒警報の場合は、班長が学校に行くか近所の空き家の、温室を借りた青空教室に行くかを決めるのです。

登校時には班長の号令のもと、「歩調を取れ、前へ進め!」と、軍隊調の行進です。我が班は20人ほどで道路上に輪になり、今日は学校に行くかどうか

するか相談していました。

その時、

「ピカッ!!」

閃光に目をやられたからか、数秒後には世の中は真つ暗になっていました。

何があったのだ。さつき警戒警報が鳴っていたからか? だが、道路や近所の家の様子が違う。朝なのに、埃や煙で夜のようなのだ。

このままでは危ないと、近所の大きな家に飛び込むが、あれ? 裏の道に出た。爆風で屋根瓦、土壁、建具が飛び、柱の骨組だけになった家を素通りしたのだ。

首や腕がヒリヒリ痛い。急いで家に帰るが、家も爆風によつて見る影もない。母が居た。授乳中だったらしく、倒れた水屋の陰の斜めの隙間から、乳飲み子の弟を抱え這い出てきた。血まみれだが生きていた。

妹が帰ってきた。友達の家に行っていたが、大きなケガはない。祖父や祖母は家の家具の下敷きになつていて、皆で引つ張りだした。全員血まみれで我が家の防空壕に避難しました。当時、山の中に防

空壕を掘り、入り口付近に小屋を建てて非常食も備蓄して、いつでも疎開出来る様準備していたのです。

避難する途中、市中から逃れてくる人々とすれ違ふと、生きた人間の様には到底見えないのです。爆弾が光つてからあまり時間は経っていないのに、全身ほとんど裸の状態で、皆、幽霊の様に両手を前に出し、手や腰からポロをぶら下げています。今になって思えば、焼きただれた皮膚が手や腰からぶら下がっていたのでしょうか…。ゾロゾロ歩いて、小学校へ避難していったのです。

山小屋へ避難した時、自分が後ろからの光線を受け、火傷を負っていることに初めて気が付きました。後頭部が水膨れで腫れあがり、頭が二つ在るかのように。また、腕にもかなり火傷を受けていました。薬が何も無いため、大人たちの話で、火傷には小便だと言われ、小便薬を付けていました。

3、4日すると、タダレて膿み始め、ハエが卵を産んだらしく、首や後頭部からウジ虫が動き出しました。その痛いこと。筆舌に表せない痛さです。包帯を巻く事も出来ず、ガーゼを当てるだけなの

で、ハエの攻撃が続きました。

それでも、光線を受けた時、自分の後ろには旧国道の松並木の大木があつたため、火傷は少なく済みました。こちら向きの上級生たちは、正面全身を火傷したので、ほとんど助かりませんでした。

10日位経って、大阪の司令部にいた父が、広島が全滅したとの事で転勤で帰ってきました。顔を見た途端、大泣きをして止まらなかつたことを、今でも鮮明に覚えています。

頭の火傷が治つても、髪の毛が生えて来たのは、4年後の小学校を卒業する頃でした。首の皮膚も弱く、高校で柔道をやりましたが、いつも襟の摩擦で擦られ、首から出血していました。

先日、70年振りに被爆した場所に行つてみました。バイパス道路が出来ていて、あれ程鮮明な記憶だったのに、場所の特定が出来ませんでした。

この事がきっかけでトラウマとなっていました。が、

「今話しておかないと、総て消えてしまう」

そう思い、被爆体験を発表することにしました。しかし、当時通っていた小学校の校庭を訪ねる勇

気は、未だありません。夢に何度も出てくる光景です。大きな穴が5つも6つも掘ってあり、うずたかく遺体と薪を積み上げて焼いていた。白い煙が漂い、吐き気をもよおすあの臭い。来る日も来る日も、町中から臭っていました。

防空壕の近くでも遺体を焼いているのだろう、山の中からも強烈な臭いが流れて来ていました。70数年経った今でも、行きたくないし、思い出したくありません。

この度、私の被爆体験をお話する機会を得て、原稿の準備をする中で、自分の子供達にもこの体験を伝える事が出来ました。

(2017年 第37回追悼式にて)



地獄絵

広島

山本 和子

語り手

山本 宏



今年亡くなりました最愛の妻・和子の被爆体験を、本人の手記と聞き及んだ事柄で記します。妻は昭和18年、広島で生を受け、2歳6ヶ月のとき被爆しました。

自宅の窓ガラスの破片が突き刺さり、家族が血まみれになった記憶がかすかにありました。その際、刺さったガラスの破片が、何十年か経って皮膚に潜んでいた事がわかり、とても驚きました。

被爆の翌日には、叔母たちの安否を心配した両親と共に、叔母たちの嫁ぎ先であった堀川町へ向かいました。

妻は母親に背負われて、爆心地近くを通り、幾つもの橋を渡って行きました。その道のりは幼心にも強烈な印象を刻み、「まるで地獄絵そのもの」で、

何年経っても思い出せば鳥肌が立つと、あまり話したがりませんでした。

何度かの市中への往来のあと高熱を出し、全身が赤く腫れ、痛くて泣いてばかりいました。

自宅は小学校のそばにあり、当時、どの小学校でもそうであったように、多くの被爆死された方の遺体を火葬していました。

大勢の町内会や婦人会の大人たちが出入りする様は、まだ幼かった妻にはとても恐ろしく、また、遺体を火葬する臭いが家に染み付いて、何年経ってもなかなか消えませんでした。

その後、中学、高校、短大へと進みましたが貧血が酷く、体育の時間の時などよく倒れていました。しかし、生涯の友との出会いもあり、充実した学生時代を過ごすことが出来ました。

妻が22歳、私が27歳の時結婚しました。被爆者同志の結婚でしたので、生まれてくる子供の事が心配でした。

出産時には出血もひどく、五体満足な子供が生まれてくるよう祈っていました。幸いにも、元気な子供たちに恵まれることができました。

妻は、朗らかで積極的で友達も多く、いつも何か子供たちのレクリエーションを企画しては、大勢で楽しく過ごすことが大好きでした。工作や手芸も得意で、子供たちの持ち物や細々としたものもいつも作っていました。

妻が亡くなってから40代、50代の娘たちが、思い出の品だと思わせてくれたのは、彼女たちがまだ子供の頃に妻に作ってもらったブタのぬいぐるみだったり、ネコの刺繍の小さな手提げ袋だったりです。

明るく何でもチャレンジしていく妻でしたが、一方でとても疲れやすく、近所の内科医院で20数年お世話になっていました。貧血と虚血心性疾患で、通院と往診を繰り返し、ニトログリセリンを持ち歩いていました。

東京に来てからも、いろいろな新しいことにチャレンジしていました。様々なサークルや外国語の勉強、初めてのパートではOL気分を満喫していました。どれも楽しそうでした。

平成15年、最初のガンが見つかりました。家族皆がショックを受け、どう受け止めていいかわから

ないでいると、妻は手術後、髪を短髪にして家に戻って来ました。治療に備えて前を向いていたのです。数年して再発し、2度目の治療のあと、原爆症の認定を受けました。

その後、数年毎に再発、手術を5回繰り返ししました。何度も何度も、前向きに治療を受ける妻の姿に、私たち家族は、

「必ずまた私たちのもとに戻ってきてくれる」

そう信じて手術室に送り出してきましたが、本年1月26日、永眠致しました。

辛さに耐え、頑張る妻を応援し、完治を願って子供や孫たちが作ってくれた千羽鶴を、本日ここに献納し、名前を記されたすべての皆様のご冥福をお祈りしたいと思います。

(2017年 第37回追悼式にて)

生死を分けた日

広島

山崎 秀雄



広島駅の近くで爆心地から2・3キロのところにある荒神町で被爆したのは、私が中学1年生、12歳の時でした。あれから早や73年が過ぎました。あの8月6日は、夏の日差しが明るく、良い天気の朝でした。

敵機接近中という「空襲警報」から「警戒警報」に変わり、これも解除されて安心したところでした。前日まで学徒動員という勤労奉仕で、広島市役所裏の建物疎開の後片付けに行っていました。この日は1年生から2年生に交代した日で、我々1年生は休みの日でした。

これが私の生死を分けました。代わって作業に行った2年生は、ほぼ全員が亡くなったからです。もし休みでなければ、私も犠牲になっており、今こ

こにはいないわけです。

この日、私は窓際の勉強机の前に立っていました。8時15分、その時です、窓の向こうの景色が一瞬にして全てが真っ白になりました。いわゆる「ピカドン」の閃光でした。

その瞬間は一体何が起こったのかわからず、突然の異様な光景に仰天して、反射的に家の奥に後ずさりをしました。次の瞬間、今度はものすごい轟音と風圧の中に巻き込まれ、身体が押しつぶされてしまいました。

何も見えない暗闇の中で身動きが取れず、これはきつと我が家に大型爆弾が直撃して、自分は一瞬にして既に死んでしまっており、今は死後の意識だけが残っているのだという不思議な感覚の中にいました。

それからしばらくして、時間はよくわかりませんが、急にあたりが静かになり、少しずつ明るさが見え始め、土や瓦などに埋まっていた自分の身体が少し動かされたのです。ぼんやりと、「自分はまだ生きている」と感じました。そしてゆっくりと立ち上がることができて、初めて我に返りました。

あたりが一変した被害に驚き、ここでまず頭に浮かんだのは、いつも訓練していたことですが、早く近所の防空壕に避難することでした。防空壕の中に入ってから、一体何が起こったのか、爆弾がどこに落ちたのかなど誰もわからず、不安でいっぱいでした。

そんな状況にいるとき、突然、顔全体にガラスの破片が刺さり、血を流した女の人が入ってきました。その恐ろしい形相に皆が驚き、息を飲みました。

それから間もなくですが、今度は町内会の役員らしき人が、「今のうちに早く逃げてください」と叫んでいました。

すぐに防空壕を出て、とにかく逃げることになりました。かねてから頼んであった郊外の中山村の知人の家に避難するため、広い道路に出ました。するとすぐに、背の高い男の人が頭から血に染まった大きな白いシーツをかぶり、血走った眼をして大股で歩く異様な姿に出会いました。そのただならぬ様子に恐ろしさを感じました。

避難する通りではすでに火災が発生していたた

め、広島駅の裏側にある広い練兵場の中を通り抜けることにしました。

その途中、空が急に暗くなり、黒い入道雲が、「ごおー、ごおー」と不気味な音を立てながら、もくもくと湧き上がり、その不気味さは例えようもないものでした。(いわゆる黒い雨が降ったといわれる異常気象の空だったので)ですが、私は雨にはありませんでした)

ようやく中山峠にさしかかると、避難する人で溢れていました。道端には瀕死の状態で動けない人や怪我をした人、火傷をした人が。ある若い女の人、顔が丸い風船のように膨らみ、目は潰れてなくなっており、唇は大きく反り返り、息も絶え絶えでした。

峠越えの沿道はこうした被害の人たちが、倒れたり座り込んだりして連なっていました。

暑い日差しは容赦なく照りつけており、何とも悲惨な、残酷な光景を忘れることはできません。避難先にたどり着いたその夜は、一晩中、西の夜空が赤々と染まっていました。

翌日、自宅に戻ってみると、火災は免れていまし

たが家は傾き、壁は崩れかかり、屋根の一部は抜け落ちておりました。その日の夕方だったと思いますが、爆心地からほぼ500メートルの大手町にいた伯父が帰ってきたのに驚き、お互いの無事を抱き合って喜びました。

その二日後、これも爆心地から500メートル少しの袋町近く(現在の繁華街の「お好み村」付近)に住んでいた叔母を探しに、市内中心部に向かいました。

見渡す限り焼け野原となった町を歩きながら、稲荷町の京橋川のそばの道を通りかかったときに、ことです、焼け跡に黒焦げの柱が倒れているように見えていたものが、近くに来てよく見ると、それは炭化した黒焦げの遺体でした。しかも、そばにそれに抱かれるように並んで小さい子供の黒焦げの遺体が見えたときの驚きは、今も目に焼き付いています。

その後、焼け跡の福屋百貨店の前を通るとき中を見ると、瓦礫やあるいは遺体らしきものを暗闇の中で兵隊らしき人たちが、大きな音を立てながら片付けをしていました。子供の頃によく来てい

た懐かしい百貨店でしたが、見る影もなく変わりました姿になっていました。

叔母の家に行くためその百貨店を左折すると、繁華街の本通りまでは道がありました。左折する道は瓦礫に埋まり全く無くなっていました。仕方なく一面の瓦礫砂漠を見当をつけて探し回り、ようやく叔母の家にあった井戸を見つけました。

その周辺一帯をあちこち掘り返し、遺骨の一部でもないかと探しましたが見つかりませんでした。(何もわからないため、強い放射能の残る焼け跡で、まさに二次被爆をしていたことになりました)

帰る途中、警察署の前の道路に机を出し、「罹災証明書」を発行していました。少し並んで万年筆の太い字で証明書を書いてもらいました。

その後、4週間ほど過ぎた頃です、叔父の髪の毛が急に抜け始め、不思議に思っていると続いて高熱が出て、喉の腫れがひどくなりました。

主治医に往診に来てもらいましたが治らず、ついに最後の手段として輸血が必要となりました。血液型が同じO型ということで私の血を取り、それを輸血しました。いわゆる原爆症が発病してい

たのですが、輸血の効果があつたのか、その後次第に快復し、叔父は元氣を取り戻しました。

一方私は、中学校が9月に一部再開されることになり、南千田町の中学校まで約4キロを歩いて通学を始めました。当時、広島では今後70年間は草木も生えないと言われており、不安に思いながらの通学でした。

私は被爆して1年後には広島を離れ、転校しましたので卒業はしなかったのですが、今年の春、思い出の中学校を訪ねてみました。

学校で最も犠牲者の多かった2年生のことを調べました。やはり、市役所裏での作業に行かれた136名全員が罹災死亡されていました。私の身代わりになり、若くして亡くなった人たちへの鎮魂の思いを新たにしたところでした。

戦争は最も悲惨な非人間的行為であることは申すまでもありません。核兵器はその中でも最も許されざる「狂気の兵器」です。これを二度と使用することがあつてはなりません。

最後に祈りを込めて申し上げます。これまで戦後三代平和が続きました。

「これからも平和よ続け三代代」

親から子へ、そして孫まで、いつまでも平和が守られ続くことを願ってやみません。

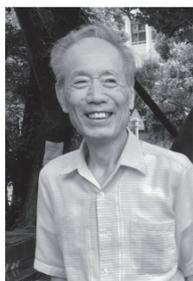
(2018年 第38回追悼式にて)



呉で焼け出され、広島で被爆した

広島

田部 和彦



1945年7月1日の出来事です。

夜の9時頃、いきなり母が大きな声で「起きなさい！」と叫んで、私たちを叩き起こしました。起きたら「すぐに逃げる」と言い、私は寝巻きのままで、当時1歳の妹は母親が抱いて、2歳下の妹と私は手を取り合って、防空壕に逃げました。その途中で焼夷弾がどンドン落ちてきました。その度にバーツと周囲が明るくなって、ドカン、ドカンと爆発の音が聞こえました。

一目散に逃げ込んだ防空壕も爆撃の振動で、いつ崩れるかわからないから、「とにかく防空壕を出なさい」と、周りの大人たちから言われました。防空壕から飛び出すとあたり一面火の海で、火の海の中、今度は山の方に逃げました。

逃げる途中に火の粉が飛んできて、その中を親子4人が必死に山の中に逃げました。逃げた先は山の中腹にある墓場でした。墓場で一夜を過ごし、朝、山を降りると一面焼け野原で、もう何もなし。高台にあった私たちの家は、家財道具も何もかも一切焼けてしまいました。

呉は軍港の街で、造船所、兵器工場や海軍兵学校など多くの軍の施設がありました。始めは港に泊まっていた軍艦や軍の施設が空襲の標的になっていきましたが、この時ばかりは違いました。

米軍は山の上から焼夷弾を落としてきたので山火事が起きていた。高台から市内の方を見るとまだ電信柱が燃えているのがわかりました。夜は墓場に寝泊まり、朝は下に降りてきて炊き出しの食事をいただく、そういう生活が3日ぐらい続きました。

父はすでに出征して上海にいました。海軍工廠に勤めていて武器を作る仕事をしていました。国民学校に通う2人の姉は学童疎開のため、田舎に行っていたので、この時、母と私、妹2人の4人が焼け出されてしまったのです。

父の故郷が広島で、行くあてもないから広島に行くことになりました。ところが、母は姑(祖母)との仲があまりよくなかったみたいで、結局、祖母には軽くあしらわれ、近くに住む叔母の家に間借りすることにしました。

叔母の家は金屋町(爆心地から約1.6キロ)にあり、国民学校一年生の私は段原国民学校に転入しました。

草鞋を履いて府中町まで逃げた

そして、一ヶ月後、8月6日の朝が来ました。

その日は前の晩から空襲警報が鳴っていて、朝方にも警戒警報が鳴ってちようど解除された。妹を抱いた母は土間で叔母と立ち話をしていた時に、いきなり「ガッ」と光ったかと思うと、「ドカン」と大きな音がした。そうしたらあたり一面が真っ暗になって、何がなんだかわからなくなりました。何分ぐらい経ったのかわかりませんが、あたりが少しづつ明るくなって、見渡してみると土壁が崩れて身動きが取れなくなっていました。私は

母の側にいましたが、ドカンと音がした時にとつさに家の奥に逃げ込み、そこで動けなくなってしまうのです。

しばらくすると、そこへ18歳になる父の妹(叔母)がズロース1枚の姿で、家の前の道路をふらふらと歩いてきたのです。駅前の郵便局に出勤途中に被爆した。衣服に火が着いて通りがかりの人に消してもらって帰ってきたようで大火傷を負っていました。これは後から聞いた話ですが、その叔母を母が呼び止めて、負傷しているのに手伝ってもらい、崩れた土壁から救い出してくれたそうです。

そのうち「なんまいだ、なんまいだ」という声が聞こえるから井戸を見に行くと、母と土間で話していた叔母が井戸に落ちていました。畳ごと吹き飛ばされて井戸に落ちた。母と2人で叔母を助け出しました。

叔母は乾物屋のような店を営み、天井から草履が吊るされていた。私は裸足だったので、その草履を履いて家の外に出ました。私の家は倒壊していませんでしたが、土壁が崩れて足の踏み場はない状態。立ちすくんでいると近所から火の手が上

がつていました。

「お母ちゃん、お母ちゃん」と、2階の窓から声が聞こえてきました。すぐ下の妹が蚊帳を吊った部屋で寝ていたのです。

母は私に一番下の妹を預けて、崩れた階段をよじ上ってなんとか妹を抱えて出てきました。蚊帳にガラスの破片が一面、突き刺さっていたそうで、妹は唇を怪我していました。

ちようど家の前にお寺があり、当時は子どもが多いので、本堂が小学校の分校になっていました。その本堂が爆風でつぶれて中にいた子どもたちが下敷きになってしまったと聞きました。お寺の梁は重いので動かせなかったのでしょうか。火がまわってきて多くの児童が命を落としたそうです。私は分校に通っていたら今、ここにいないでしょう。

火の手があちこちあがつてきているから、「ここには危ないからお前は先に逃げなさい」と、母に言われました。

母は近くに住む姑の家に向かおうとして、私と別れました。当時は親のいっつけに逆らうことはできません。母の言う通りに電車道に出ると、大勢の人が広島

ら、多くのガラスの破片が刺さっていたでしょう。大きな怪我をしなかったのは幸運でした。

東練兵場で一週間ぐらい野宿をしている時の出来事です。人の声とは思えないくらいすごいうめき声が聞こえてきました。20歳ぐらいの娘さんが全身大火傷を負って寝かされていると母から聞きました。朝昼晩うめき声が聞こえてきて、それが今も耳にこびりついています。また、最初は何をしているのかわかりませんが、油をかけて死体を焼いていた。

東練兵場を出てからは、焼け跡で突っ張り棒の上にトタンを乗せて、一坪ぐらいの敷地にバラックを建てて、親子4人で寝泊まりしました。母は朝早くバラックを出て夜帰ってきます。妹を置いておくわけには行かないので私はずっと世話をしていました。

9月に枕崎台風が来てそのバラックも吹き飛ばされてしまいました。衰弱した一番下の妹が10月3日に亡くなりました。母と空き地で残り木を拾い集めて茶毘に伏しました。火の中、妹の手と足が動くのです。焼けてから、みんなで骨を取って近く

駅のほうにぞろぞろと避難していました。私も一番下の妹を抱えて、その後について行きました。近所の人を見かけて後を追っていたら見失ってしまい、人の流れに沿ってそのまま3、4時間ぐらい歩きました。たどり着いたところが府中という所でした。

木切れを集めて妹を焼いた

妹と二人きりでどうしたらいいのかわからず、周囲をうろろろしていたら、消防団の人が私たちを見つけてくれて、救護所になっていたお寺に連れて行ってくれました。炊き出しをしていて、そこで10日ぐらい寝泊まりをしました。

お寺に出入りしている人が「私がなんとかお母さんを探してきてあげるから、ここで待っていて」と言つて、広島市内の避難所を探し回ってくれました。10日目に東練兵場にいた母たちを見つけてくれて、私たちはようやく再開できました。

母は顔や腕にガラスの破片が刺さって何年もそのままでした。私は身長差なのか、額の一方所しか傷はなかった。もう少し背丈が伸びていた

のお寺さんに置いてもらいました。

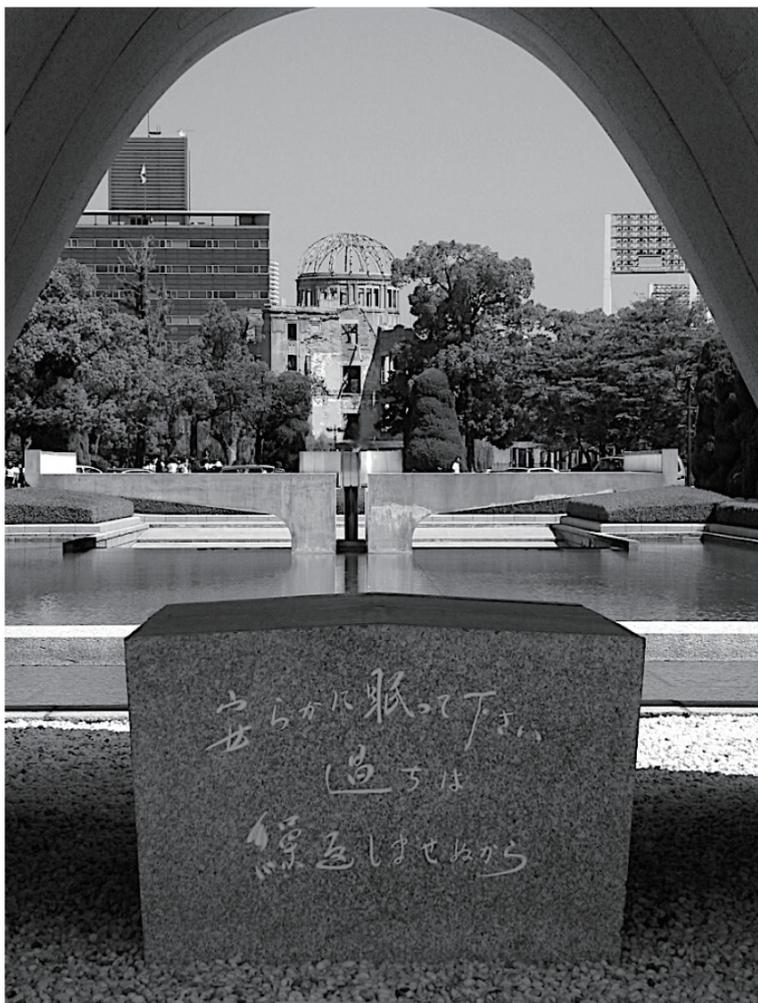
「ふみちゃん(一番下の妹の名前)のように死にたくない」と、言いつづけた2歳年下の妹も、弱つていき血便を出して後を追うようにして、10月18日に亡くなりました。

私の体にも異変が現れてきました。髪の毛が抜けて倦怠感があつて毎日だるい。「下から順番に亡くなつていくのかな」と、覚悟していました。

母はあちこちの医者を探して、郊外の医者に連れて行ってもらい、普段はめつたに手に入らない注射を特別に打ってもらいました。何の薬かはわかりませんが、それから少しずつ体調が回復してきたのです。

このままでは冬は越せない、呉市の広に家を見つけて10月末頃に引っ越しました。学童疎開先から帰ってきた2人の姉と、復員してきた父と4人での生活がはじまりました。

母は腎臓結核、肋膜炎、膀胱炎など病気が続き、10年ぐらい寝たきりになってしまいました。姉たちが疎開先から帰ってくるまで、私がおさんどん(食事の世話)をするしかありません。遊びたい盛



原爆死没者慰霊碑 (広島平和記念公園内)
 碑文は「安らかに眠って下さい 過ちは繰返
 しませぬから」と綴られている

りでしょう。近所の友達と遊んでいても夕方4時
 ぐらいになると一人輪を抜けて帰ります。ご飯は
 かまどで炊いて、魚を買って焼いたり煮付けたり
 して食べました。そのせいか家事はだいぶ得意に
 なりました。

私は19歳で上京しました。その後、父が他界して
 ひとりになった母も東京に出て同居するようにな
 りました。

世界は過ちを二度と繰り返してはいけません。

(2018年江戸川原爆語り部

カフェ伊太利庵にて)



母・兄・妹をなくす

広島

穴戸 昌秀



原爆の話をすると泣けてくる。肉親の死を人に知られたくない。思い出したくない。やはりこれが真実です。

広島市元柳町で親兄弟を亡くした8月6日の原爆、そして15日の終戦までの10日間は、14歳の私には3年にも4年にも匹敵する長くて辛い日々でした。

満員電車で揺られて舟入川口町電停に着く。朝7時、この頃の私は、「花も蕾の若桜、五尺の命ひっさげて」の学徒動員として、桐原容器工場で仕事についていました。

一瞬、青白い異様な光線が窓から目をかすめとつた。

「電気がショートしたのかな…」

散した瓦、木片、垂れ下がった電線など、道路上のあらゆる障害物を排除しながら電車道を舟入本町、仲町と進んでくると、この辺から悲惨な格好の人がぞろぞろと見え出した。

土橋まで来ると更に多くなり、今朝電車に乗った時とは何という変転ぶりだ。まるで地獄絵を見えるような状態の中、ようやく新大橋(現・平和大橋)に辿り着く。

そこで後ろを振り返ってみると、倒壊家屋が燃えている。今まで歩いてきた道中は燃えていなかったのに驚きである。不安と恐怖で頭が一杯に。

ふと足元を見ると、息絶えている人、横倒れの電柱や電線。焼けただれて身体が赤むけになり、あちこち血だらけの赤黒い顔。皮膚が手足に垂れ下がって、お化けの様相をした人達が、「水、水」と叫びながら、ヨロヨロと歩いている。橋の上には十数人の瀕死の人々。はや息も絶え絶えの断末魔のうめき声を発する人々。その中を交差して何とか橋を渡っていく。

橋の横の雁木(がんぎ)や、石段や土手には、火傷の人が大勢うずくまっている。川瀬、川の中には赤

それにしても未だ一度も見なかったことのない大きな火花だ。そう思った瞬間、「ドォーン」と底力のある音響と同時に四辺はうす暗くなり、工場の建物は倒壊した。

土煙とともに私は建物の下敷きになった。機械のシャフトに足を挟まれ、衝撃によってしばし気を失ってしまった。しかし、その後すぐ起き上がった。障害物を取り払い、何とか外へ這い出ることができた。

倒壊した建物の付近は煙でもうもうとしていた。建物の下敷きになったことで、灼熱の閃光から救われたことがあとで判明した。

さあ大変だ、どうしたらいいのか。足の負傷で血がどんだん流れてくる。しかし、こんなことを苦慮してはおれない。家族や家はもうなっているのか、怪我よりその方が心配である。学友、工員、挺身隊の人、みんな這い出してきた。それぞれ自分は助かったが、家族や家がどうなっているのやらが心配なので、帰宅することになった。

電車道に沿って自宅(元柳町)へむかう程に被害の凄まじさに驚いた。建物は全部倒壊している。飛

茶けた身体を胸まで水につかっている人、天を仰いで真っ黒になっている人、老若男女の人々の無数の死体が点々と散在している。

この生き地獄をずっと見てきて頭の中がすっかり狂い、何がなんだか分からなくなってきた。この辺は朝通ってきたばかりで、どうにも考えられない出来事でした。

前方にある瀬川倉庫、坪井産婦人科医院も、ものすごい音を立てて燃えている。私の家はその前だ。もうこれから先は火の海。どうしようもない。この辺にいる負傷者は今朝、建物疎開の整理作業に来ていた学生や挺身隊の人々だという。

ここで隣家の兼本さん、福田さん達と遭遇する。彼らは三菱の祇園工場に徴用され出勤していて助かり、やはり家と家族を案じ、ここへ駆け付けたそうだ。

彼らは途中、市内横川に入ったが、それから十日町にかけてはそれは大変で、全部家屋は倒れ、それが道路まで散乱して歩くところもない。そのうえ火災となり、煙が辺りを包んでいる。負傷者も多くその程度もひどいもので、殆どが火傷の人。顔面を

やられている人は、人相、男女の見分けが付けられない程だったそうだ。

顔面がおかつば頭の様になっているのは、帽子をかむつていて、光を受けなかった所の髪だけが焼け残ったからだ。何も被つていなかった女性の頭は丸坊主で髪が無くなっていった。

屋外にいた人は光と熱で大火傷となり、屋内にいた人は「ドカーン」といった時のすごい爆風で、一瞬のうちに倒壊家屋の下敷きになって負傷したり、そのまま逃げられなくなったのだった。

飛び散ったガラスの破片が体にさきり、出血してそれが乾燥してこびりついて黒くなっている人もいる。負傷して助けを求める人ばかりだから、倒壊家屋が火を出しても消火活動の出来る人は誰もいない。家屋の下敷きになり助け出してもらえなかった人々は、無残にも迫り来る業火に、生きながらにして焼死してしまったのだ。

残虐の極み。修羅場だ。

顔も腫れあがったというか膨れてしまい、目もあかなくなつた人もいれば、目と口の周囲だけ涙と汗でマンガに描かれている土人のように白く緑

く平良村に到着した。

そして村役場、小学校と母の消息を尋ねて廻つた。学校の講堂やグラウンドは負傷者で一杯だったが母はいないし、私の知つた人もいなかった。再び母たちを尋ねて焼け跡へ戻らねばと思い、昼過ぎに出発の救援トラックに乗車する。

どこをどう通つて広島市内に着いたか分からないう。余燼(よじん)くすぶる瓦礫の中を、市役所付近で下車した。

灰燼(かいじん)と化した市中は四方八方見渡せた。その中にポツーンと灰色に焼け残つた鉄筋コンクリート建て市役所が非常に印象的だった。

太陽は無心に照りつけている。避難所の人は少なくなつてはいるが、死骸はずいぶん増している。革屋町を通つて元安橋を渡り、中島に入る。

火災で全て焼き尽くされて、ブスブスと僅かに燃えくすぶっている人も相当いた。黒こげの死体。水槽に入らんとしたのか、片足を入れたまま孤立して息絶えている人。腹部が裂けて内蔵が露出し、「ジブジブ」と泡の輪をつくつてはいる哀れな馬の死体も転がっていた。

取られている人もいる。これでは誰だか全く見分けがつかない。

私達の前まで火焰は迫り、風を呼び炎は狂い、煙を巻き上げ地上をなめていく。ぐずぐずしている自分達も煙に巻かれ、焰に吞まれてしまう。集まつた人達で状況分析を試みた。

「家族に会いんさつたか?」

「会わなかったんじゃ」

「集合(避難)場所が平良村(へらむら)となつていたので、中島の人たちは直行したんじやろ」

心を鬼にして去るほかないのだ。これ以上この場所においても仕方ない。一刻も早く避難場所の平良村へ行こうということになる。一部の人は何とか火がおさまるまでここにいて、家族を探し続けるというので残留した。

ここで自分の足の痛みに気付いたが、今はそれほどころではない。母が、「いざという時は平良村に避難して、そこで集まるんだよ」と言っていたのが無性に気にかかった。

途中、天満橋鉄橋を渡るとき黒い雨に見舞われたが、夜通しかけて歩き、7日午前4時頃、ようやく

焼けただけれた人がヨロヨロと家族に支えられて、破れた水道管の水を手ですくって飲んでるのが目についた。破れた水道管からは水がチョロチョロ流れている。焼け跡に何故水が出ているのか不思議に思った。

川土手の死体は悪臭を放散している。収容作業が始まっているが、やはり生きている人が優先で、まだ沢山の焼死体には手もつけられずに捨ててある。黒こげになつた死体も手も付けられず捨ててある。黒こげの死体にも、遠慮なく8月の真夏の太陽が照り付けている。川中には膨れあがつた死体が浮かんでいる。

木陰の無い死体だけの砂漠のような中で、木片で死体をひっくり返して側にある骨をバケツに納めている二人連れに出会った。ここでも眼球が鼻の辺りまで飛び出している負傷者に会い驚いた。一面灰と屍体と骨ばかり。

わが家の瓦礫の中から、真っ白に焼けた兄(16歳・旧山陽中学校卒業後、引き続き呉工廠に動員中で当日は自宅にいた)の骨を探し出して、持ってきた袋に入れた。まだ生温かった。

ここで、「お母さんが傷ついて雁木のところでうずくまっていたが、兵隊さんにどこかの救護所に運ばれていったよ」と言う証言を得た。母は生きているのだ。勇気づいた。

昨日からずっとここで家族を探していた人が、「土手の下で出会ったよ。きつと貴方のお母さんだった」という。何度も確かめてみる。これで母の生存は確認できた。

小学校1年生の妹(7歳)の分教場(中島国民学校低学年の生徒は、家の近くの誓願寺で学習をしていた)に行ってみた。

誓願寺にはたくさんさんの死体があり、大人と違って少し小さめのお骨が重なり合うように散乱していて、どれが妹の骨か、皆目見当がつかなかった。その場にたまたま居合わせた方に尋ねると、

「私の子供も同じく1年生でここで亡くなりました。母親は自宅で、子どもはここに、まったく別れになっただけです。さみしかったです」と泣いていた。

その男の人に教わって、そこにあつたお骨を少しずつ拾って持ち帰った。おそらく授業中のまま、

して会うことができたものだ。

早速、一番知りたかったこと。あの時どうであったのか。兄や妹のことも聞いてみた。

母は炊事場で朝ご飯の後片付けの時に下敷きになり、何とか這い出した。兄は二階におり、家の梁の下になり、這い出すことが出来なかったのか、その時即死してしまつたのか、とにかく声はしなかった。何度も兄を呼んだが応答がなくて、そのうちすぐに家に火がついたように思う。

妹は7時40分頃、鞆を背負っていつものように元気よく「行つてきます」と出発したので、あの時間は授業が始まつたころと思う。1年生であんなに小さな子が本当にかわいそうであつたらない、そう話しながら母は泣いた。

母は前の道路まで這い出したが、周囲で「川へ」という声を聴いたので、土手から雁木へ走つたような気がするが、その時にはもう燃え上がつていた。

川に入つたりして、その晩は雁木のところで一夜を明かし、次の日、兵隊さんにここへ連れてきてもらった。

みんな抱き合つて死んでいったのだろう。その男の人は放心状態でいつまでも突つ立っていた。

それからは、「元柳町の怪我人が運ばれた収容所は何処でしょうか」と、毎日聞きながら各国民学校、救護所、収容所を歩き廻つた。苦しそうなわめき声、泣声、唸り声の中を一人ずつのぞき込んで確認して回つたが、探せど探せど母を見つけることは出来なかつた。

瓦礫の中を足を棒のようにして歩き続けて4日目の8月10日、神崎国民学校でやっと母を見つけることができた。

そこは臨時の治療所になっていて、校庭にワラムシロが敷いてあり、その上に寝ていた。どこの救護所も同じで、異様な臭気が満ち溢れて痛ましい姿の人が多かつた。なんとか生きてくれた母の姿を見た時、我ながらよく探すことができたと思ふ量であつた。

「お母さんです。ね。そうです。ね。」

と声を掛けたところ、微かにふるえるような声で小さくうなずき、起き上がろうとしたので慌てて制止し、再び寝かせた。本当に、よくまあ探し出

「あの日は土手のあたりで何となくウロウロしていて、家族のことが心配であつた。なかつた。」

と、母は手振りを加えてボソボソ話してくれた。私はこれであの日のことがようやくわかつてきた。

その夜は一睡もしなかつた。電気はつかず真っ暗闇の中で、口元を水で浸してやろうと思ひ、口ウソクや懐中電灯を借りて身体とともに冷やしてやつた。それから熱が下がらなくなり下痢も続いた。

隣に寝ていた女学生は、母と同じく本川の土手で収容されたが、傷口にハエが卵を生みつけ、ウジが沸いていた。彼女は意識朦朧としていて、時々手を挙げてハエを追つ払っていた。

時々「お母ちゃん!! 痛いよ」と泣き叫んだ。母と同じ本川から運ばれてきたので、他人ではないような気がして看護してあげたが、母より一日早く亡くなつた。

火傷のひどい人は、毎日のように死んでいった。小さな泣き声で、微かに母を呼ぶ声、妻の名を呼ぶ人、夫を呼ぶ人等々、実に哀れな情景であつた。

12日朝、母もとうとう眠るように静かに息を引き取った。たとえ3日間でも母と一緒に、精一杯看病できたことを感謝している。どこで死んだかわからない人が大勢いるのだからと、自分に言い聞かせて母をあの世に送り出した。

それからは大変な苦労の連続でした。弟(9歳)は、中島国民学校4年生で、学童疎開で双三郡三良坂町にいて生き残りました。私も弟も、とうとう元柳町に帰ることは出来なくなり、共に育った家があった場所は、今では平和公園として多くの人に愛されています。

数年前までは、毎年8月6日にはこの消えた町・元柳町を訪れ、あの日、あの頃を偲びました。ノーモア原爆・ヒロシマ・ナガサキを祈っています。

(2020年 第40回追悼式にて)



下敷になった娘をかべをやぶって助け出そうとする母
香川千代江／作者 広島平和記念資料館／所蔵

※画像、内容の無断利用はかたくお断りします

なにも見えない

長崎

橋本 春美



と、叱ったそうです。

ものすごい爆風で、周囲の家屋の瓦や木々が飛び、土ぼこりも舞って辺り一面が粉塵だらけで一寸先も見えませんが、爆風が終わると道中に瓦が散乱していました。

被爆後、急遽借りた本河内から一山越えた日見（ひみ）の疎開地に、父が連日リヤカーで壊れた自宅から何往復もして家財を運びました。

それに兄もついでに行きましたが、ある日、元の家横にある伊良林小学校の校庭で、たくさんの死体を茶毘に付している光景を見たそうです。その光景と臭いが強烈で、それからは二度とついでいかなかったと言います。

2、被爆後浦上へ

夏休みの間は日見の疎開地にいましたが、その後、元の新中川に戻りました。そして終戦から4年後の昭和24年、浦上に移り住むことになりました。新しい街は山里町でした。

被爆の中心地から250メートルしか離れていない浦上天主堂からも250メートルの場所です。私は山里小学校の2年生になりました。

1、母と兄の記憶

被爆のとき私はまだ2歳8ヶ月でした。母の話によれば1945年の8月9日には伊良林小学校の道を隔ててすぐそば、新中川町3丁目に住んでいました。

私は家の庭に出ていて母に抱っこされていました。5歳の兄は少し離れて庭で遊んでいました。

飛行機の爆音が空に聞こえましたが、そのとき空がものすごく明るく光り、母は私をしつかり抱いて伏せました。直後、爆風が来て兄はいちめんの白っぽいホコリのため母を見つけられず、「真っ白で何も見えんよー!!」

と、大声で泣き叫びました。母は、「動かんよ！ じつとしとかんぼ!!」

浦上は、カソリック教徒が多い町です。いろいろな催し物があり、皆よくお参りしていました。学校の活動はカソリックの行事が重ならないように計画されていました。浦上のこのあたり中心に1万2000人の信者が住んでいて、原爆で約7割の8500人が即死したと聞きました。また、山里国民学校在籍児童数1581人(昭和20年現在)のうち、およそ1300人が死亡しました。

みんなと「被爆」について話したことは一度もありませんし聞いたこともありません。被爆後わずか4年のことで、怖くて話したくなかったからだと思いますし、思い出さなくなりました。近所に3軒親しくしていたお店がありました。が、住んでいた方は大きな建物の影か防空壕の奥に隠れていて助かったようです。しかし、そんな人は他にほとんどいません。ほとんどの人が亡くなっていました。

家の庭を掘ると溶けたガラスの破片や、焼け焦げた瓦がたくさん出てきました。東友会には鬼瓦を、親江会にはかまぼこ型瓦を2枚寄贈しました。今でも深く掘ると昔の遺留品が出てきます。

3、現在の考え

私は昭和41年に結婚し福岡へ。平成2年に東京に移り住みました。原爆について考えるようになったのは2013年に親江会からの要請で長崎で行われた原爆追悼式に出席してからです。

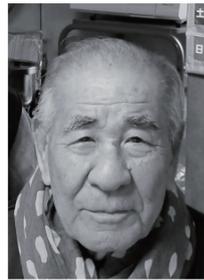
そのとき振り返って、64年前から爆心地に極めて近い所に住んでいたことを新たに思い出したことと、それまでいかに原爆に無関心だったかということをしみじみ実感しました。新中川町での被爆体験や、被爆の中心地に近い浦上・山里町での生活体験を継承しなければと痛感しています。自身あらためて誓っています。

(2021年 第41回追悼式にて)

見るも無惨な光景

長崎

上里 勇吉



私は沖縄県宮古島出身で、当時満14歳。学徒動員で長崎に入りました。

宮古島の港から2〜300名ほどの生徒が、4隻の船に乗って出発する際、海軍の船が3隻護衛に付いていました。しかし途中で米軍の攻撃に遭い、3隻の船は沈められてしまい、残ったのは私たちの乗った1隻だけでした。宮古の学生は34名、沖縄本島の学生は100名でした。

1ヶ月と1日掛けて、ようやく長崎県の川南(かわなみ)深掘造船所に作業養成工として入所しました。仕事はエンジンの組み立てでした。

1945年8月6日、広島に新型爆弾が落ちたことを聞いていたので、軍港である長崎も「ひよつとしたら」と心配はしていました。長崎市内も警戒

中でした。

8月9日午前、警戒警報のあと空襲警報が鳴り響き、飛行機が3機飛んできましたがそのまま帰って行き、警報が解除されました。

しかし、その後11時2分、いきなり、「ドーン!!」ともものすごい音が響きました。

私たちは学校で合同体操をしていましたが、その音とショックでみんな地面に倒れてしまいました。

爆心地から7里(約28キロ)も離れているのに、寮の窓ガラスは爆風で全部割れ、残ったのは病院の手術室にある、紙を貼ったすりガラスの窓だけでした。長崎の原爆の方が広島より威力が強かったのかもしれないと、あとになって感じました。

その後、班長さん(16歳)が、入隊するための手続きに行く途中で被爆したことが分かりました。急遽、皆で探しに行くと、なんと彼は被爆した電車の中で、吊革に掴まったままの姿で亡くなっていたのです。電車の中には兵隊になろうとする人々が20人余り乗っていました。私たちは班長さんを連れて帰りました。

途中、浦上近くの国民学校の校庭で、児童全員が並んだまま倒れているのが見えました。焼け野原と無数の死体、ひどい火傷で見るとも無惨な光景が、今でも目に焼き付いています。

被爆後、8月11日より造船所の人たちと一緒に、被爆された人たちの救援活動に入りました。防毒マスクにヘルメット、担架などを持って私も手伝



爆心地標識

石田 禎/寄贈 石田 寿/撮影
長崎原爆資料館/所蔵

いました。そこで入市被爆しました。

佐世保から海軍の兵隊さんたちが船に乗ってやってきました。わたしたち養成工4人くらいと、大人5〜6人に分かれて、川沿いで救援を行いました。

素手で焦土や死体に触れることはできないので、鋤(すき)や鍬(くわ)ですくい起こすしかありません。「予防注射」を打たれたのは、宮古島に帰ってからでしたが、果たしてなんの注射だったのか。

8月15日、玉音放送で終戦が伝えられると、8月下旬に米軍が上陸してきました。

私の仕事は、軍艦島から手漕ぎボートで部品や石炭、石油を運んだりしました。さらに、落下傘の生地でシャツなどを縫ったり、農家の手伝いもしました。

暫くして、沖縄本島から13人の女性が来て、われわれ学徒動員生34人と共に刑務宿舎(旧刑務所)で生活しました。

女性たちは食事、宿舍管理を担当しました。ほかに寮長、世話約が3〜4人いました。ご飯は麦ごはんか芋ご飯で、仕事はあまりありませんでした。

その女性たちは残ったのか帰ったのかはわかりませんが、私たち男性が宮古島に帰れたのは、戦後2年経ってからでした。

未だ生き残っていた駆逐艦に乗って、やっと宮古島に帰ることができました。その時の学徒は33名でした。1人亡くなっていました。

いろいろな想いの中、戦後70年の節目の年(2015年)に、夫婦で長崎の慰霊式典に参列したのが心に残る思い出となっています。沖繩の人々は、内地の人に比べると、相当多くの障害があつたように思います。

疾病も多かったのではないかと感じています。椎間板ヘルニア、大腸がん、左肩手術、心筋梗塞、大腿骨折、頭皮がんなど。8ヶ月前まで骨折による電動車椅子生活をしていました。現在、満93歳になりました。(2022年 第42回追悼式にて報告)



松山町の高台から浦上天主堂方面を望む
撮影者不明 長崎原爆資料館/所蔵



上里さんと奥様 長崎平和公園内
江戸川区の木の前にて



「悲しき別れ — 茶毘」

原爆投下40周年を迎え、被爆体験が風化しつつある中、絵で実相を伝え核兵器の脅威が少しでもわかってもらえればとの思いから制作したもの。絵の横には「今から焼かれようとしている少女(姉妹)の顔は化粧してあり美しかった」とある。

寄贈者	松添 博
寄贈年月日	1985年10月3日
所 蔵	長崎原爆資料館

一日一日を楽しく正しく

広島

宮川 武志



私は広島市観音本町で生まれました。爆心地から1.7キロの場所で、家族は、憲兵の父親と母、ふたつ上の兄と、4つ下の妹の5人家族です。私は当時、4歳と10ヶ月くらいでした。

母親たちがもんぺに割烹着を着て、防火訓練をやっていました。それと、竹槍持つて、藁人形に向かって戦う姿も頭に残っている、そんな時代です。

8月6日のあの日の朝、父は当直で、家にはいませんでした。そして、なぜか兄が私の履物を履いて防空壕に入って行ったんです。それを怒って私が後を追いかけて行き、防空壕の中で喧嘩してる時、母親が妹を連れて入ってきました。

「兄弟喧嘩するんじゃない」と叱られたんですが、ちようどそのとき外で変な音がして、それが原爆

の音だった気がします。

防空壕の中だったので、それほど大きくありませんでしたが、母親は「今、すごい音がしたよ」と言い、しばらくしてから表を見にいきました。すると、「表に出ちゃだめよ」と言うんです。

しばらくは防空壕の中にいたんですが、母親の目を盗んで表に出てみると、あたりは死体がいっぱいでした。人も自転車も倒れている。

「坊や、水をちようだい」

「おじいちゃん、水をちようだいよ」

という声があちこちから聞こえてきて、子供ながらに怖くなり、防空壕に戻ってしまいました。

「ピカドン」と言われる割には、音も変でしたし、私は光も見えていません。

「爆心地から1.7キロで、よく生きてるな」

と、冗談を言う人もいましたが、防空壕が守ってくれたのでしよう。

その後、憲兵の小使いさんが父が亡くなったことを伝えるにきました。その人も被爆していました。その後、父親の実家のある山口県の秋吉で生活することになりました。

兄と私は父親の実家でしたけど、妹は生まれてまだ1年経たない乳飲み子でしたので、母親の実家の山口県下松市にいたおばあちゃんに預けられ、離れ離れの生活になりました。兄妹が行き来できるようにになったのは、昭和26、27年頃になってからでした。

今、残念なことにくつかの戦争が起きていますが、スポーツにはルールがあるけれど、戦争にはルールがない。国はそれを頭に置いて国民を守ってもらいたいです。

そして、たまたま原爆に遭ってしまった私たちは国によって優遇されていますが、戦争孤児は数多くいて、その人たちも援助してほしいと思います。

ある日新聞見たら、8月15日を、「戦争記念日」と書かれている。「記念日」というのは、嬉しいことや楽しいことの意味です。新聞社に抗議の電話をすると、「日本が負けて喜んでる人たちもいるんじゃないですか」と言うんです。「だったら、広島とか長崎の原爆の日も記念日にしろ」と言うのと、「それはできません」と。そんな考え方の人もいるのが現状

です。

若い人たちには元気でこれからの日本を豊かにしてほしいです。人間はひとりでは生きていけないので、周りの人と共に、正直でまともに生きてほしいです。1日1日を楽しく正しく生きてほしいです。

(2024年 第44回追悼式にて)



つきまとう「生」への後ろめたさ

長崎

山口 正



あの瞬間、相当数の友だちが亡くなったのでしよう。一方で、疎開先にいた私は、今も元気に過ごしています。8月9日を思い出すたびに長崎の友人たちが頭をよぎり、生きていることが何だか申し訳ないと思ってしまうのです。

当時、私は小学校3年生で9歳。両親は爆心地からほど近い、長崎市内にある大学病院（長崎医大付属病院）の前で、おすし屋さんを営んでいました。お店のそばに自宅があり、両親、兄、妹、弟と一緒に暮らしていました。

長崎に原爆が投下される前からB-29がたびたび来襲し、焼夷弾による被害を受けていたのを覚えています。そこで、柔道家だった父親のつてをたどり、原爆が投下される数カ月前に喜々津村（現在

の諫早市多良見地域）へ家族全員で疎開。疎開先の家は海が見える高台に建ち、小さな島に臨んでいました。

喜々津の小学校でも友だちがたくさんできました。田舎の生活を知らなかった私に、同級生が釣りや泳ぎ、草履の作り方など、何から何まで教えてくれて、本当に助けられました。海で遊ぶのが特に楽しくて、大切な思い出です。

原爆が投下された8月9日の朝、両親はいつものように疎開先からお店へ出かけました。けれども、虫の知らせなのでしようか、たまたま原爆投下の30分ほど前の列車に乗り、長崎から戻ってくる途中だったのです。おかげで無事に帰宅してきました。もし、長崎へ向かう列車に乗っていたなら、助からなかったでしょう。

留守番していた私たちは、米軍機が飛んでいる空を見ていました。足もとを走っていた列車は米軍機から避難するため、トンネルに入っていきましたが、上空からその様子を見ていたB-29は、バリバリバリと機銃掃射を行いました。

兄や妹弟と「大丈夫かな」と話していると、強烈

な閃光と爆音が。

「ヒカーツ、ダダダダダ…」

機銃掃射と原爆投下のタイミングはほぼ同時だった記憶があります。閃光と爆音の後には、黒い塵が降ってきました。家の裏側にあったやや高い山が爆風をさえぎってはくれましたが、光と音は半端じゃない。あの衝撃的な光景は、今でも忘れることができません。

私は妹の手を引き、弟を抱いて、近くの防空壕に逃げ込みました。「非常時は防空壕に入れ」というのが、親の教えでしたから。兄は一週間ほど前に爆弾の衝撃波で吹き飛ばされた経験があり、閃光と爆音のすごさに「あっ！」と恐怖を覚えた瞬間には、すでに逃げ出していました。

防空壕に入ると近隣の方々もいて、みんな仲良しです。まさか長崎の街があのように悲惨な状態になっているとは、考えもしませんでした。

原爆投下から数日が経ち、長崎の実家へ行ってみました。父は「長崎に来て何もないよ」と言うのですが、私は「何かしらあるだろう」と、父の言葉を信じていませんでした。

ところが現地に着くと、本当に何もないのです。

幼い頃、門番の目を盗んで遊びに行っていた強固なはずの大学病院は破壊され、子どもたちの相撲大会が開かれていた山王神社の鳥居（一本柱鳥居）は半分が吹き飛ばされ、疎開前に通っていた市立城山小学校（旧城山国民学校）もほとんどが崩壊。同級生の席がなくなっているのです。鉄筋コンクリートのしつかりとした建物があれほどまでに変わってしまうとは、とにかく驚くばかりでした。

自宅跡には金庫が一つだけコロリと落ちていました。中を開けてみると、すべて燃えていて何もありません。まさか自分が住んでいた地域、遊んでいた場所が一瞬のうちに消滅するなど、誰が想像するでしょう。友だちの多くが死んでしまったのだから、目の前の惨状を見て理解するとともに、同時に湧き出た感情は、自分が生きていることへの後ろめたさでした。この気持ちは今でも続いています。

終戦後もしばらくは疎開先で生活しました。戦後はGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）がしばらく武道を禁止していたのですが、高校1年生の

夏に柔道部ができ、私は柔道の道を歩み始めました。卒業後は上京し、日本の伝統的な柔道塾「講道館」などで修業。一度、長崎に戻って就職したものの、25歳で再び上京。江戸川区に住むことになりました。

柔道が忘れられず、区内に移り住んでからも柔道の修行を続け、接骨医の資格を取得。接骨院の仕事と並行して、中学校の体育館などで区内の子どもたちに柔道を教えてきました。現在、柔道の段位は8段。接骨院は息子が継ぎ、柔道の指導のみを続けています。「俊敏」「思考」「静寂」「豪胆」――これは試合の肝となる、私から教え子たちへの教訓です。

今でも夏になると、柔道の練習場で子どもを座らせ、原爆の話聞かせています。我々は生まれたときから、戦争に行くのが当然のように教え込まれてきました。そういう教育でした。私も軍国少年で、幼少期から友だちと「陸軍の戦車に乗るんだ」「海軍がかっこいい」など、憧れの気持ちで会話を交わし、「戦争に行つて戦うぞ!」と、当たり前のように思っていました。しかし、戦時中に聞かされていた「どこどこで日本軍が勝つた!」などという戦

果の大本営発表は、嘘ばかりでした。

昨年、弟が亡くなりました。生きていたのは、妹と私だけ。親友も昨年8月に逝去しました。彼とは疎開先で知り合い、亡くなるまでずっと楽しく、いろいろな昔話をしてきました。本当にいいヤツだった。私の体ももうボロボロ。被爆者ということですが、手が伸びずに箸を扱うことができません。10年くらい前には、言葉が出なくなりました。

知り合いの接骨医の娘は長崎で生まれた被爆二世で、体のあちこちが痛いそうです。治療を続けているものの、やはり原因は分かりません。

以前、私の娘が子どもたちを連れ、長崎原爆資料館に行きました。元気に暴れていたチビたちが、資料館に入ると黙り込んで展示物を見ていたそうです。皆さんもぜひ、長崎や広島原爆資料館に足を運んでいただきたい。そして、戦争や原爆について、もつと話をするべきだと思います。戦争は絶対にダメ。ましてや原子爆弾は、二度と使用してはいけません。

(2024年 DVDインタビューより)



山王神社

林 重男／撮影 長崎原爆資料館／所蔵

家族を引き裂く残酷な戦い

長崎

斉藤 ヤス子



長崎に原爆が投下された時、私ははまだお母さんのお腹の中にいました。爆心地から2.5キロの西山町にあった自宅での胎内被爆でした。これはその時の様子を、当時14歳だった一番上の姉が書き綴った手記です。

★

昭和20年8月9日午前11時2分、長崎に原爆が投下されました。学校は夏休みでした。

その朝、私たち姉弟4人は、自転車に乗って仕事に出かける父を見えなくなるまで手を振って見送りました。父は重要な電気の仕事に携わっていたので、兵隊さんには召集されなかつたようです。

★

スポーツ万能で、電力会社で毎年行われる運動大会では、どの種目に出場しても1番。父にかなう

り出してくれました。

私はお腹の大きい母を案じながら、1番下の弟を背負い、妹の手を引いて母が出してくれた布団をみんなでかぶって防空壕の中へ逃げました。

それから4、5時間、怖さに震えながら身体を寄せ合っていると、父の会社の伝達係の方が避難している防空壕の中へ来られて、

「お母さん気をしっかり持つてください。お父さんが今日仕事に行かれた浦上兵器工場は、爆弾でやられて全滅です。たぶんお父さんもダメではないかと思いません」

と伝達して帰られました。

母と私は、幼い弟妹をしっかりと抱きしめて、溢れる涙を止めることができませんでした。

それからどれくらいの間が経過したのでしようか、防空壕の前で私の名前を叫ぶ父の大きな声が。慌てて防空壕を飛び出してみると、ボロボロに焼けちぢれたズボンをまとい、顔も身体も真っ黒くなっている父が立っていました。

「みんな生きてるか。お母さんも大丈夫だったか」

人は誰もいないほどの力の持ち主でした。特に相撲や走る競技には抜群の父で、右に出る人はありませんでした。この父がこの日も、原爆の中心地である浦上兵器工場に行きました。

ちょうど原爆が投下された時刻には、空襲警報が解除され、警戒警報に変わっていました。母と私たち姉弟は防空壕を出て家に帰り、お昼の用意をしようとしていた時、かすかに飛行機の音が聞こえてきました。

私は日本の遊軍機だと思い、外へ出て空を見上げました。それと同時に、「パチッ！」という異様な音と、目もくらむ光に襲われました。

「あつ、直撃弾だ！」

と直感し、すぐその場に伏せました。

それからしばらくして顔を上げると、身体に痛みもなく生きている。手も足もついている。起き上がって急いで家の中へ入ると、微塵に碎け散った窓ガラスや転げ落ちたラジオ、時計が散乱し、その中で幼い弟や妹が泣き叫んでいました。

一瞬のことで、何があつたのかわからず、呆然と立ち尽くす母も我に返り、押し入れから布団を取

領く私に、「みんな助かって良かった」と安堵した父の目には涙が光っていました。

「お前たちが生きているのか死んでいるのか確かめるまでは死ねない」と、長崎全市が燃え盛る大火の中を探り、川の中を這いながら帰ってきたよと、話してくれた父でした。

日が暮れかかる頃、浦上で被災して焼けただけ裸同然の身体をさらし、夢遊病者のようにフラフラと歩いていかれる人々の行列が、夜になっても途絶えませんでした。

我が家も爆風で飛ばされ跡形もなく、無残に折れた柱が3、4本残っているだけでした。そして、全市を焼き尽くした灰が積もつたのだから、辺り一面見渡す限り雲の中のように薄暗く、山も野原も道路も灰色の砂漠と化していました。

夜になつて、どこから運ばれてきたのか、白いおにぎりが1個ずつ配布されたけど、一面に漂う異様な鼻をつく悪臭に吐き気が止まらず、おにぎりは食べられませんでした。

夜になつて黒い雲の間から覗くお月様も、全市が焼き尽くされた灼熱の炎で焼けてしまったの

か、血が滲んだような赤色でした。手に握っている白いご飯も、その月の光で赤く染まっていたことを忘れません。

また、何日過ぎても、この強い異臭は消えず、一日一日衰弱していく家族を案じた父は、「これではみんな死んでしまう。長崎を出よう」と、母の実家がある鳥栖（佐賀県）のおじいちゃんの家へ行くことに決めました。

一週間後、家族6人、焼き尽くされた焦げ臭い町の中を歩いて長崎駅へ向かいました。途中、黒焦げになって死んでいる人の積まれた山が何ヶ所もありました。戦争の恐ろしさと悲しみに、溢れ出る涙で何度も倒れそうになりながら長崎駅へたどり着きました。

長崎駅も被爆でめちゃめちゃに破壊されています。鳥栖の方へ行く汽車の時間を尋ねる父に、駅員の方が、

「汽車は道ノ尾駅まで行かないと出ていません」と言われ、途方にくれました。でも、道ノ尾駅まで行くしかありません。お腹の大きい母と14歳の長女の私を頭に、幼い弟妹を案じる父でしたが、戻

る家も泊まる場所もないのです。「頑張って歩こう」父は幼い弟妹を、時には2人一緒に背負って線路の中を歩き始めました。

歩いて行く道の両側には、畑の中や田んぼの中で馬や牛の手綱を握ったまま一緒に倒れ死んで硬直している人を何人も見ました。人の世の中で起きた光景とは思えぬ地獄を見る悲惨な街の有様でした。

そして、長い長い道のりで、弱音を吐けない苦しみに、力を絞って6キロ以上の道のりを歩き続けた親子でした。

夏休みが終わって長崎へ帰り、どうなっているのかわからない学校へ行ってみました。女学校では上級生全員が兵器工場へ働きに行っていたのですが、ほとんどの生徒たちが亡くなっていました。

私のクラスも47名のうち生き残っていた生徒は14〜15名でした。大好きだった先生も、みんな亡くなっていました。生き残った数人の友と、在りし日の思い出を語り合いながら、戦争の無常さ、悲惨さを恨みました。

それから7年後、誰よりも強かった父の身体も

果は敗血症でしたが、常に病気の恐怖が付きまといつていきます。

絶対に戦争はやめていただきたい。原子力発電も考え直してほしい。議員の考え方と市民の考え方は全然違います。国同士に争いが起きないためには、笑顔と思いやりが大切ではないか、今はその思いやりが欠けているように感じます。

（2024年 第44回追悼式にて）

当時、病院の先生にもわからなかった病名が、何年も経ってから分かりました。「原爆症」でした。戦争は地獄です。残酷な戦いです。2度と原爆など作ったり落としたりしない世界であることを祈ります。

★

★

私は、小学4年生の時に観た『千羽鶴』という映画で、「禎子さん」の名前と「原爆」を初めて意識しました。禎子さんが血を吐くシーンが強烈な印象です。寝たら死んでしまうのではないかと怯えていました。それを姉に話すと、手記にあるおにぎりの話など聞かせてくれました。

私は38歳の時に体調が悪くなり、「ひよつとしたら白血病かもしれない」と、恐怖を感じました。結



胎内被爆者として

広島

齊藤 玉子



広島に原爆が投下された8月6日、私はお母さんのお腹の中。爆心地から約7キロ離れた広島県佐伯郡石内村、現在の広島市佐伯区五日市町石内で、胎内被爆しました。私の証言は母や姉に聞いた話と、主に地元石内公民館や五日市町役場に残されている、当時の記録に基づくものです。

被爆直後、母は婦人会に呼び出され、爆心地から多くの被爆者が避難、収容された『浄土寺』というお寺で、救助活動を行いました。火災で燃えている己斐(こい)町(爆心地から2.5キロあたり)から被爆した人々が、約1時間半も歩いて己斐(こい)峠を越え、どんどんどんどん石内村に逃げてきました。

命からがら逃げ出てきた人々の着物は焼けち

ぎれ、裸同然の姿。頭髮は焼け落ちてちぢれ、男女の区別もつかない状態です。中には全身が火傷で膨れ上がり、顔の皮がぐるりと剥け、目だけが光っている人や、皮膚が垂れ下がった両手を前に突き出したまま、放心したようによろめいて歩いている人、峠を越える途中で見かけた家に立ち寄り、「水をください」と求める人、力尽きて道端に座り込んでいる人……。この世の地獄とはまさにこのことかと思うほど、恐ろしい光景が広がっていました。

浄土寺は1000人を超える被爆者で溢れかかり、重傷者は次々に亡くなっていきます。遺体は近くの火葬場で焼いていました。あまりに多くの被爆者が避難してくるものですから、闇雲にお寺へ行くのではなく、地区ごとの当番制で救助に当たるようになりました。

当時5歳だった姉(次女)に被爆直後の話を聞きました。姉が覚えているのは、空が真っ暗になり、爆発で微塵になった木の端や、紙切れが大量に飛んできたこと。私が読んだ原爆の記録資料にも、石内小学校(旧石内国民学校)の窓ガラスが飛び散

り、山には紙幣などの紙切れが飛んできていたと書いてあり、爆風で相当なものが広範囲に吹き飛ばされたのは間違いないでしょう。その後、石内全域にも「黒い雨」が降りました。

姉の夫は、爆心地から約2キロ離れた三篠町にて13歳で被爆。当日は建物疎開で十日市町に出かけていましたが、朝8時頃、学校へ行くため帰ろうとした際、「ピカッ!!」と激しい閃光に襲われました。それからどのようにして帰宅したのかは覚えていないようですが、自宅にいる弟と妹をリヤカーに乗せ、十数キロ離れた母親の実家、伴村へ避難したと聞いています。

建物疎開は、空襲による延焼防止を目的に、建物を強制的に間引きして防空空地をつくる政策で、主に中学生が動員され、建物を解体する作業に従事させられていました。その建物疎開のため、広島市内に動員されていた学生たちの多くが被爆しました。また、学童疎開で田舎に避難していた小学生は被爆で両親を亡くし、5、6千人の子どもたちが孤児になったそうです。

資料によると、石内よりもっと奥に位置する湯

来町(爆心地から約20キロあたり)で被爆した8歳の女性も黒い雨を浴びました。後日、髪の毛が抜け始め、丸坊主のようになり、体中につぶつぶが出てのたうち回る状態だったそうです。当時は黒い雨の存在や降雨の原因・影響など、誰も知りません。彼女は「どうしてこんな体に生んだのか」と、母親を責めたそうです。後に、黒い雨の有害性が明らかになると、女性は母親に対してのしつたことを反省したそうです。彼女は今でも皮膚がとても弱いと記録されています。

黒い雨は石内全域において、午前9時頃から午後2時頃まで、夕立のように移動して降りました。気象学者・増田善信さんの独自調査「増田雨域」によると、黒い雨の降雨域は従来考えられていたよりも4倍ほどの広さに及ぶことが判明。広い範囲では島根県境近くにまで至っています。爆心地北西部の己斐地区から安佐南区の沼田町にかけてもっとも雨量が多く、100〜120ミリの集中豪雨に見舞われたそうです。

私が原爆に関する文献などを調べ始めたのは約

5年前。それ以前は広島の間でありながら、幸いにも自分の体に胎内被爆の大きな影響がないことから、原爆について関心がありませんでした。

しかし、2017年に先輩からすすめられ、江戸川区の被爆者の会「親江会」と出会い、役員に選出されました。翌年には親江会を代表して、東京の被爆者団体「一般法人東友会」の役員に。東友会には「原爆被爆者相談所」という事業や、原爆の実相を証言する「実相普及委員会」があります。それらに携わるようになり、「私は胎内被爆だから分らない」と思っていました。周囲から「分かることがありますよ」と助言をいただき、資料を探して当時の歴史を学び、被爆の証言活動に取り組み続けています。

親江会の山本宏会長の話聞き、親江会が発行している被爆証言集『鳩になって』の既出5冊を読み、証言活動の大切さに気付かされました。また、葛西区民館で毎年行われている東友会主催の「原爆犠牲者追悼式典」では、小・中・高校生の代表が広島や長崎へ行き、原爆について学んだことを発表するプログラムがあります。それを初めて聞

してくれる子に出会うことができ、とてもうれしい瞬間です。

核兵器禁止条約に世界約70カ国が批准(2024年4月時点)していますが、いまだに日本政府は何もしていません。国のトップの決断こそが今、求められています。

(2024年 DVDインタビューより)

いたとき、自身が果たすべき役割を改めて認識しました。被爆者は本当に大変な思いをしています。先輩たちが粘り強く続けてきた核廃絶運動を、次世代につないでいくことこそ、私に課せられた大きな使命です。

現在、親江会の副会長、そして、東友会の役員として、日本政府に核兵器禁止条約に署名・批准をしてもらうための署名活動「6・9行動」を、毎月行っています。世界ではロシアによるウクライナ侵略や、イスラエルのパレスチナ・ガザ地区侵攻をめぐり、痛ましい情勢が続く、小さな子どもが骸骨のようになり、若者が戦争に駆り出され、ウクライナやガザのように悲惨な状況に陥ります。

しかし、無関心の方があまりにも多い。私は、「ざわつく」という言葉に近い心情を抱えています。特に子どもを連れてくる人、ベビーカーを押して歩いている人たちには、もつと興味を持っていただきたいです。

そのような中でも、自ら署名してくれる高校生など、若い方がいます。私が胎内で被爆した話をする、毎回ひとりくらいは「私たちも頑張ります！」と共感



その日の朝は暑かった

広島

あたり
當 京子 母

証言補助

喜美子 娘



な大好きでした。

船舶関係の仕事をしていた父親の事情により、広島県の横川町(爆心地から約2キロ)に引越したの、原爆が投下される2、3カ月前、当時12歳でした。両親と私、幼い弟2人で横川町に転居してから、すぐのできごとでした。

―喜美子さん

母の被爆体験は、これまでに1、2度しか聞いたことがありません。原爆が投下されたとき、母は幼い弟2人と、私の祖母にあたる母親の4人で家にいたそうです。母は爆風で倒れた家の柱の下敷きになり、身動きが取れない状況。祖母は弟(叔父)2人を近所の人に頼んで避難所へ連れて行ってもらい、火事場の馬鹿力というのでしようか、1人で必死に柱をどけて、母を助け出したと聞いています。

周囲に救助を求めたのでしようけれども、混乱の中で手を差し伸べてくれる人はいなかったのだと思います。命からがら柱から抜け出せた母たちは、叔父らが待っている避難所へ向かったそうです。

2人が避難所を目指している途中、倒壊した柱

―京子さん

当時のことを考えるのは本当に嫌ですね。絶対に忘れない。死ぬまで覚えていると思います。

私は福岡県北九州市門司区で生まれました。自宅の裏には古城山があり、和布刈(めかり)公園のすぐ近く。家から石段を下りると海で、自宅の2階からは関門海峡と、対岸に広がる下関の街が一望できる美しい景観に恵まれ、家族と楽しく暮らしていました。学校は古城小学校(現在の港が丘小学校)に通学しておりまして、友だちも先生も、みんな

から助けしてくれた祖母の背中を見ると、大ケガをしていたと言っていました。

職場にいた祖父は家族を探しに自宅へ急ぎ、母たちとすれ違ったそうですが、2人は認識できないほどボロボロの状態で、近所の人からの助言で祖父は引き返し、家族全員、無事に再会できたと聞いています。

当時、19歳になる母の姉(叔母)は、仕事で北九州市の小倉に住んでいました。叔母は広島が新型爆弾の被害にあつたという話を聞き、電車が止まっている中、漁師さんの「べか船」みたいなものに乗って広島まで渡つて来ました。家族を必死で探し出し、どこかで見つけてきたりヤカーに妹(母)と弟(叔父)2人を乗せて運び、広島を離れたそうです。叔母はそのとき入市被爆しました。

―京子さん

原爆にあつたのに死に損なつたんです。今でも生きているから不思議で仕様がなです。原爆で家を失つた私たちは、その後、再び門司区の和布刈に戻りました。戦争が終わり、兄が戦地から無事に帰つてきたときはうれしかったです。

―喜美子さん

母は毎年夏が来るたびに「原爆の日の朝はすごく暑かった」と話しますから、被爆したという事実は知っていました。でも、それ以上のことは語らないし、私からも聞きませんでした。

被爆時の状況を私が知つたのは、約20年前。入市被爆した叔母の家に、親戚が10人くらい集まつたときでした。叔母、母、叔父の1人がその場にいて、たまたま叔母が被爆の話が始めたのです。母も思い出したように語り出し、私は初めて聞く体験談でしたから、黙つて耳を傾けていました。

叔母は、「よく19歳の娘ひとりで、家族を探しに行くことができたものだ」と言い、叔父は小学校の低学年でしたから、「ただ逃げたことしか覚えていない」と話していたのを記憶しています。母たちが大変な経験をしていたことを知り、ショックでした。

―京子さん

本当に戦争は怖いんです。戦時中、母親はとてもよく働いてくれていました。広島に移る前に住んでいた門司の家では、小さな畑に野菜を少し植えて

いて、限りあるものでいろいろな食事を作ってくれました。

―喜美子さん

母の話によると、戦時中、祖母は門司の近くにあつた製粉所に勤めていたそうです。製造工程でこぼれ出た粉を集めて丸め、工場の塀の向こう側に叔父を立てせて、捨てるふりをして投げ渡していたそうです。丸めた粉を叔父に持ち帰らせ、家で食べていたと話していました。

戦後はアメリカ軍にチーズをもらつたらしいのですが、どのようにして食べたらいいか分からず、味噌汁に入れたという思い出話を聞いたことがあります。

―京子さん

戦後、学校を卒業してから幼稚園に勤めました。先生たちが優しくとてもよい職場でしたが、何しろ食べ物がない。小さな子どもたちに「辛抱なさい」としか言えない。毎日がみじめな生活でした。子どもたちがかわいそうで、かわいそうで、思いつくたびに涙が流れます。哀れな人が多かったです。

幼稚園で働いているとき、被爆者という証明書(被爆者手帳)をもらいました。それが嫌で嫌でたまらなかつた。被爆者だということは周りに話さず、自分の胸におさめていましたから、自分の子どもたちにも「こんなこと(被爆者であること)、人に話しちゃダメだよ」と口止めしていました。

―喜美子さん

戦後に来日したヘレン・ケラーを見たという話も母から聞きました。みんなで駅に立ち、ヘレン・ケラーの歌「幸福の青い鳥」を歌つたそうです。今でもたまに歌います。

―京子さん

みんな一所懸命に歌を覚えました。ヘレン・ケラーに会つたときは感激しました。

―喜美子さん

母の戦争体験談はそれくらいしか知りません。そのまましばらく門司で暮らし、競輪場のアナウンスをやつていたと聞いています。27歳か28歳で結婚して私が生まれ、約60年前に父の転勤で千葉県浦安市に移住。その後、現在の江戸川区に移り住みました。

「親江会」に入ったのは、東京に来て10年ほど経つた頃でしょうか。どなたかに会の存在を聞いたようです。元気な頃は原爆被害者追悼式などにも参加していました。

―京子さん

今でも被爆者手帳は持っていますが、あまり人には見せたくありませんし、自分からは言いません。本当に戦争なんか二度とやってほしくない。悲劇ばかりでした。

―喜美子さん

今の私たちには想像が及ばない体験だっと思えます。世界中の核兵器を廃棄していただきたいと強く願います。

編集部注：当京子さんは記憶に曖昧なところがあるため、娘さんの喜美子さんに補足していただきました。

(2025年5月 DVDインタビューより)



特異な地形に命救われ

長崎

佐藤 鈴子



今年の9月で82歳になります。長崎県の水の浦町で被爆したのは2歳になる少し前で、当時の状況はまったく記憶にありません。

今から10年ほど前、江戸川区の原爆被害者の会「親江会」に参加するようになりました。それまでは被爆した両親も、近所の方々も、原爆についても話さず、また語る機会もなく、まるで他人事のように感じていました。

親江会の一員になってから、どうしても被爆時の様子を知りたくなり、10歳ほど離れた妹（長崎在住、被爆二世）に「何か知らない？」と連絡してみました。

妹が母親に聞いた話によると、原爆が投下された8月9日、私は母親と2人で自宅にいたそうでした。親江会の一員になってから、どうしても被爆時の様子を知りたくなり、10歳ほど離れた妹（長崎在住、被爆二世）に「何か知らない？」と連絡してみました。どもの話題にも出なかつたんです。

小学校6年生のときに、長崎市松山町にある平和公園に、平和祈念像ができました。子ども会で歩いて見に行きましたが、「像の形がすごいな」と漠然と感じた記憶しかありません。本当に、普通の生活を送り、自分自身が被爆者だと意識することなく育ちました。

学校卒業後は地方公務員として、長崎駅前の観光課で働き始めました。そのせいか私にとって長崎は、被爆地というより観光の街という印象でした。当時は修学旅行生が毎日のように訪れていたこともあり、「被爆地」ではなく「観光地」としてのイメージが優先されていたようです。

私は20歳まで長崎で暮らしていましたが、市民は被爆の実相を隠しているというよりは、まるで原爆の被害などなかつたかのように、普通の日常生活を過ごしているように私には感じられました。親戚でもない限り、爆心地の方へ行く機会はありません。

す。被爆の瞬間、その衝撃で家の畳が「ふわっ」と浮き上がり、母親が急いで私を抱っこして、近所の防空壕に逃げ込んだという事実を知りました。

私が生まれた水の浦町は、爆心地の浦上から見ると、稲佐山を背にした谷あいには位置します。その特異な地形により、爆心地から約3キロにも関わらず、爆風がさえぎられ、家の瓦も吹き飛ばさず、大きな被害から免れたようです。

爆風は海側に向かったもので、水の浦町から見て長崎湾の向こう側は、惨状だったのではと思いません。親江会に入ってから原爆投下直後の写真を見たことがあるのですが、港の対岸が真っ白になっていて何も見えず、それが、爆風で吹き飛ばされた様子だったことを知りました。

水の浦町は三菱重工業長崎造船所が近く、住民の約8割は造船所に勤務していました。父親も造船所で働いていてそこで被爆したのですが、被爆に関しての話はしませんでした。

長崎はキリスト教の街でもあり、子どもの頃、キリスト教徒は日曜学校へ、仏教徒は土曜学校へ通っていました。さらに子ども会など、子どもたちもありませんでしたので、被爆の惨状を知る機会がなかつたのではと思います。水の浦町に住んでいた人々は、爆心地では地獄絵図のような光景が広がっていたことも知らなかつたのではないでしょう。

20歳で上京し数年が過ぎた頃、長崎の母から被爆者手帳が送られてきました。それで自分は被爆者なんだと認識しましたが、実際のところはあまりピンときていませんでした。

東京で北海道出身の夫と結婚し、私が長崎出身ということはもちろん話していましたが、原爆や被爆について聞かれたことはありませんでした。その夫も、くも膜下出血で倒れ、57歳で他界しました。

私が70歳を過ぎて親江会に入ろうと思ったのは、自分の被爆体験や記憶はとぼしくて、その実相を語る継承活動を熱心に行っている方々と出会ったからです。「核兵器廃絶のため、私たちが原爆の恐ろしさを伝えていかなければならない。自分も頑張ってみよう」と思ったことがきっかけでした。

プライベートでは長崎に帰っているのですが、東友会(東京都の被爆者団体)と、親江会を代表して、平和活動の一環で、長崎に一度ずつ訪れる機会に恵まれました。親江会の派遣で長崎に帰った際、妹の協力で被爆当時、爆心地近くに住んでいたという女性を紹介してもらいました。

その方は、「人間を焼くにおいがきつかった」と、語ってくれたことを覚えています。それから3、4年後に亡くなられたそうですが、体験談をメモしていなかったことを、今でも後悔しています。両親にも、生きていくうちにもっと詳しく被爆時の状況を聞いておくべきだったと思うと、残念でなりません。

私は長崎の被爆者なのに、原爆の怖さを知らず、語ることもできず、親江会に出会うまではそれを疑問にも思わなかった。出会う人によって、これほどまでにも運命は大きく変わるのだと実感しています。

今は学校で平和授業があり、小学生や中学生は積極的に被爆者や語り部の人たちの話に耳を傾け、自分事として原爆の怖さを語ってくれます。本

当に偉いと思います。

「戦争をやつてはいけない」と、誰もが言います。しかし世界では、平和信仰が厚い人たちがさえも戦争をしている。私は、日本の政府には「言葉の力」が足りないのだと思います。だからだと通り一遍のことだけを言い続けても、戦争は収まりません。私は親江会に入り、言葉の力の大切さをすごく感じています。言葉に力があるのです。

以前までの私は、会の集まりでも黙って話を聞き、人任せにしていました。しかし役員として、残りの人生は力のある人の言葉を借り、メンバーと共に平和活動を頑張っていきたい。これまでは現実から逃げている自分でしたが、できる限りのことをやっつけていきたいと思っています。

戦争や原爆の怖さ、悲惨さ、恐ろしさは、まだまだ世界には十分に伝わっていません。昨年、日本原水爆被害者団体協議会(被団協)がノーベル平和賞を受賞しましたが、日本政府は「おめでとう」としか言わない。原爆被害者に対する援護施策もまだまだ課題があります。私たちが生きていくうちに改善を実現してほしいと願っています。

被爆者として、原爆の非人道性を世界に訴えるチャ

ンスはまだまだあります。核兵器を廃絶しなければ、地球がなくなる。私たちはこのことを、もっと強く伝えていけるはずですよ。

私は被爆者ですが、幸い元気で今でも清掃の仕事を続けています。90歳まで働きますよ。元気の秘訣は仕事と「平和活動」です。

(2025年5月 DVDインタビューより)

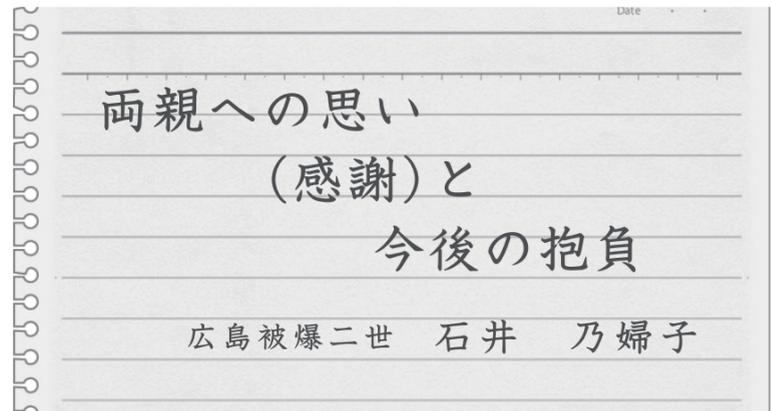


きのこ雲

松田 弘道／撮影 長崎原爆資料館／所蔵

二世・三世の平和への思い





私(77才)は被爆二世ですが、現在、江戸川区に一人で住んでいます。私の母は、大正12年10月、広島市己斐地区(現在の西区小河内町)で、爆心地から約1.7Kの所で生まれ、看護婦専門学校を卒業後、直ぐに同地区の医院で働き始め、昭和20年8月6日(22才の時)、職場で被爆しました。母の話によりますと、自分自身もガラスの破片で背中から出血していたようですが、入院患者さんや外来患者さん(主に火傷)で、足の踏み場もない状況で、泊り込みで患者さんの治療にあたつたと聞いており、そんな状況が数ヶ月続いたようです。

ので、詳細は不明です。勿論、自宅も廃墟になって、生活の続行が不可能でしたので、翌年、両親は東京に住んでいた伯父を頼りに上京し、伯父の会社の社宅で新たな生活を始めたようです。

そして、翌年の昭和22年8月15日に私(乃婦子)が生まれ、東京での生活が始まりましたが、父親も被爆の影響もあつてか病弱で入院を繰り返していたこともあり、母は看護師として、直ぐに近くの病院で働き、一家の生活を支



白衣で頑張る母

えてくれました。

このような環境でしたので、私の小学校時代は、いわゆる「鍵っ子」で、寂しい思いをしました。その割には元気で明るい活発な女の子でした。

その後、私も大人になり、23才で結婚し翌年長男が生まれ、新たな生活をスタートしましたが、私が28才の時、その時父は既に自宅療養中で、母の介護を受けながら、57才の若さで他界しました。

ある程度は予期していましたが、その時は本当に母も私も悲しく辛かったです。

父の想い出としては、私の幼少時代、父は病弱ではありましたが、スポーツ好きなので、元気な時には時間を作つてよく私と遊んでくれました。お父さん子供だったこともあり、今でも優し

かつた父をよく思い出します。

父も原爆では、妹をはじめ家族を失い、本当に辛かつたと思いますが、そんな父にも感謝の気持ちでいっぱいです。

急に父が亡くなったことにより、母は一人になり、加えて広島にいる祖母も一人暮らしたこともあつて、母が52才の時、急きよ広島に戻ることになりました。そして、母は広島に着くなり、直ぐに病院勤めし、祖母と同居しながら、祖母が亡くなるまで約28年間一緒に過ごしました。

母は、広島での病院でも働き者として有名で、医師や看護婦さんからも慕われ、祖母が亡くなった後も看護師長(婦長)として、働き続けました。本当に、私には自慢の母であり、感謝しかありません。そのような母ですが、祖母が亡

くなつた後も広島に一人で残り、引き続き働くと言いつづけていたが、年齢も80才になつていたこともあり、私が強く説得し、やつとの思いで東京に連れて来た状況でした。

それで、母と私の二人の新たな生活がスタートしましたが、東京での約9年間は、母に余生を楽しんでもらうべく、母中心の生活を考えましたので、少しは親孝行できたのではないかと思つています。

例えば、私がカラオケ講師をやつていた関係もありますが、歌好きの母は、毎年、東京江戸博物館の大ホールでの発表会で、一人で歌つたり、孫と二人でデュエットしたりして、楽しんでいました。でも、最後は骨折をきっかけに、約2年の闘病生活の後、89才で他

界しました。

今改めて思えば、両親は原爆投下により、生活が一変し、家族(子供や親兄弟)を守るため、特に母は「看護師」として一生働き続けた白衣の天使のような生涯だったと思います。

そのような母の生き様(文句を



言わず前向きに一生懸命働いてくれたこと)に、改めて感謝すると共に、親ではありますが尊敬の念でいっぱいです。

最後になりましたが、被爆した両親をもつた二世の一人として、また、今回初めて親江会の役員(運営事務局)を仰せつかった者として、今後、親江会を通じて、少しでも皆さんの活動のお役に立てますよう、努めたいと思います。特に私が生まれたのが、「8月15日(終戦記念日)」ということもあり、戦争の悲惨さ・愚かさ、そして平和の重要性を訴える義務があるのではないかと、勝手に感じています。具体的には、「原爆の恐ろしさを次世代へ継承・啓蒙できる」よう、一人でも多くの方に呼びかけ、拡散できますよう、微力ながら体力の続く限り、親江会を

通じて、お役に立てれば幸いと存じます。同時に、色んな課題(三世への働きかけ等)もあると思いますので、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。そして、二度と原爆による悲惨な人々を生まないよう、戦争のない平和な社会が続きますよう、切に願うばかりです。以上、今の心境とさせていただきます。



繋ぐことの大切さ

長崎被爆二世

山下 秀則



私は長崎被爆二世です。父は入市被爆、母は市内での直接被爆の両親の元に生まれました。

母は自分の体験をよく語ってくれましたが、父は無口な人であり自分の体験を語ることはありませんでした。でも、お酒が入ると、ぼつりぼつりと昔話のように当時の話を聞かせてくれました。その中で一番心に残った話を紹介します。

父は当時国鉄職員で、長崎が被爆したあと、仕事の関係で佐賀県の鳥栖市から長崎までの約100キロを歩いて帰る事になりました。長崎の被爆の現状を知るともできず、ただ歩き続けたそうです。夜の暗闇の中では先に進めず、神社や墓場で仮眠をとることもありました。

神社は「シン」と静まり返り、わ

ずかな物音に、敵が来たのではないかと疑心暗鬼になり眠れなかったこと、墓場はざわざわうるさく、まるで誰かが話をしていようややはり眠れなかったこと、見知らぬ人から水や食料をわけてもらい、涙が出るほどうれしかったことなど話してくれました。そのときの表情をよく覚えています。

母は市電の中で被爆したため、空襲警報が鳴ってもすぐに逃げる事ができず、その後、防空壕に避難しましたが、「今頃来る奴は中国のスパイだ」と入れてもらえませんでした。途方に暮れ、ひとり、家を目指して歩き続けました。

市電の中は、爆心地側の窓側に居た人は皆亡くなっていて、「自分分は体が小さくて、窓側に居た人

の陰になって守られた」と語っていました。

両親はその後、様々な大病を患いました。それが放射能の影響かは分かりませんが、病魔に屈することなく天寿を全うしました。

先日、この話を四世に当たる小学五年生の孫娘にしたところ、次に会ったとき、「じいじいの話を聞いた後、スマホで広島や長崎の事をめっちゃ調べてるよ」と、色々な画像を見せながら話してくれました。

そして漫画「はだしのゲン」を読んだり、映画「黒い雨」を見たいと言ったり、「広島や長崎に行ってみたいな」と、真剣に話し、今年、船堀タワーホールで行われる「原爆展」にも必ず行くと言ってくれました。

今までは、次の世代に広島、長

崎の出来事をいかに繋いでいけばいいか思い悩んでいましたが、孫娘の話を聞いて、「繋ぐことは地道に語り継ぐこと」だと改めて思いました。

若い世代に対し、広島、長崎の出来事は決して昔話ではなく、今も原爆症で苦しんでいる人がいることなど、現代でも起こりうることだと、警鐘を打って話し続ける事が大切です。その中で、親江会の方々や語り部の方々の活動に頭が下がる思いでいっぱいです。

戦後80年が経ち、被爆者の方の体験を聞く機会が少なくなる中、私もどこまでできるかは分かりませんが、親江会の一員として、次の世代へ活動の継続がいかに大切であるかを伝えて行こうと思えます。そしてこの世から核兵

器がなくなることを目指して平和活動に尽力してまいります。被爆者の方々がいつまでもお元気で暮らせますよう、毎日祈念しながら…。





繰り返しては いけない過ち

広島被爆二世 関口 寿義

2025年7月現在、世界では2つの国際紛争が続いています。幾度か停戦交渉が行われようとしていますが、直接的な話し合いは実現していません。一度始まってしまった戦争を止めるのは、覇権国の大統領を仲介役としても、非常に困難だという現実をまざまざと見せつけられています。争いは、戦争になる前に止めないといけないのです。

日本を見てみると、太平洋戦争の終結から今年で80周年の節目を迎える年となり、以降、平和憲法と、国民の努力によって平和は保たれています。しかし、現実的に安心できる未来があるかと考えると、私自身、確信はもてていません。広島市の平和公園にある原爆死没者慰霊碑には、「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しま

せぬから」と刻まれています。80年前に被爆した母が眠る仏壇や墓に向かい、「過ちは繰り返しません」と唱えることができないでいます。その理由は、前述の戦争の他にも、近隣国の核やミサイル実験、資源を巡る国境問題など、隣国同士のいさかいが続いているからです。

2年前の戦争展で、壁に貼られた被爆の展示物を見ていた高齢の女性が私に話しかけてきました。「ロシアや中国が戦争を仕掛けてきたら、日本もまたこうなるかもしれないですね」

まったくそのとおりです。私以外にも同じ心配をしている人がいることを確信しました。

「もし、ミサイルが海ではなく陸に着弾したら、もし、隣国同士の

争いに巻き込まれたら、もし、独裁的な主導者が引き金を引いてしまったら……」

そう考えたとき、母が生前に残した被爆前の幼き日の手記が頭にかんできました。

「ある夜、もしアメリカ軍が攻めてきて、家族がバラバラになったらと思うと、怖くて寝付けなかつた」という一文です。

結局、本土決戦にはなりませんでしたが、原爆により、8人いた家族は母ひとりが残されてしまったことになりました。母が想像した悪夢は、現実となってしまったのです。今の世でも、起きてしまうかもしれない戦争を心配するということとは、戦時中と変わらぬのではと思えてしまいます。

1971年、佐藤栄作元総理によつて、「核を持たない、作らな

い、持ち込ませない」非核三原則が制定され、日本人初のノーベル平和賞が授与されました(1974年)。以来、日本はこの原則を堅持していますが、万が一、争いが核戦争に発展したらどうするのでしょうか? アメリカとの安全保障条約と核の傘に運命を任せるということでしょうか。調べてみるとこんなことがわかりました。

「日本政府のスタンスは、1971年以降どの政権も、「日本独自の核武装や、敵の自国国土侵略時に使用可能な戦術核の共有はしない」。そして、「非核三原則を守るか国民の命を守るかという厳しい状況になった時、この判断を時の政権がする。この議論自体は縛つてはいけない」

となつていているようです。つま

り、状況次第では、非核三原則を放棄することもありうるということ。そうなる前に、絶対に争いを収めなければいけません。

アメリカの主導者たちは、ヒロシマとナガサキによつて太平洋戦争を終わらせることができたと言いますが、それは暴言です。それにはアメリカが想定した以上の多くの犠牲者がいて、後障害が80年も続いている現状を予測できていません。そして日本は今、その傘の下に入っているという大きな矛盾を抱えています。

私は正直、日米同盟や安全保障はやむをえないと考えます。戦争を放棄した日本には大きな軍力がありません。にもかかわらず、周辺には平和を脅かそうとする可能性のある国々があるからという地政学的な現実があるからで

す。

ただし、唯一の戦争被爆国であり、国民や団体が、二度もノーベル平和賞を受賞しているにもかかわらず日本政府は、今年も核兵器禁止条約国会議に、オプザーバー参加すらしませんでした。

そのような姿勢は、平和を愛する国民には理解できず、世界の平和をリードする国にはとうていなれません。「核をもって戦う意思はない」、それを示すのが核兵器禁止条約国会議のテーブルだと考えます。

戦争になつてしまつたら、終わらせるためには多くの犠牲が必要です。その犠牲となるのは、戦争の主導者や、戦争で金儲けをしている愚者たちではなく、多くの罪なき国民です。ヒロシマを、ナガサキを、そしてウクライナやガ

ザの光景を、我が身に置き換えてみるべきです。勝つか負けるかではなく、戦争か平和か、です。



令和5年に83歳で亡くなった私の母は、5歳の時に長崎で被爆しました。

「山間の向こうでピカーっと光ってその後もすごい振動が来たんだよ、子供だったからあととはよく覚えていないけど」

と、当時の話はそれ以上母からは聞いたことはありません。両親と姉と私の4人家族で、原爆手帳を持つているのは母だけでした。父も長崎県人ですが佐世保市に住んでいたもので、少し離れているから被爆者とはならなかったんです。父からも戦時中の思い出を聞いたことはあつたのですが、原爆の話は聞いたことはありませんでした。

後4年の闘病生活の後、父は他界しました。

その後ちよつとして母の胆のう癌が見つかり、手術して完治。と、思っておりましたが、その後10年ほどして脊髄狭窄症の手術をした時に、胆管癌にかかっていることがわかったのです。高齢者は癌の進みが遅いと聞いていたので、まだまだ大丈夫だろうと思っていたのもつかの間、発見から1年もたたないうちに母も他界してしまいました。

これまで私は原爆について深く考えたことはありませんでした。しかし、縁あって親江会の山本会長とお会いして、いろいろとお話を伺っているうちに、すべて繋がっていることに気づかされました。

昭和20年の8月6日に広島、8

戦後、大人になった両親は同じ会社で勤め、そこで知り合い、夫婦となりました。姉が生まれ、それから3年後に私が生まれるとすぐ、東京の営業所へ転勤となり、4人家族で千葉の市川に住むようになつたんです。その頃に母が腎盂炎を患い、原爆手帳をもらつたみたいです。

手帳のことは我が家の極秘事項とされておりました。もし知られたら近所の人たちから白い目で見られるようになるから、と。なんでだろう、と子供の頃の私には理解ができませんでしたが、そんなものなのかな、と、妙に納得して手帳の事は大人になつても誰にも言ったことはありません

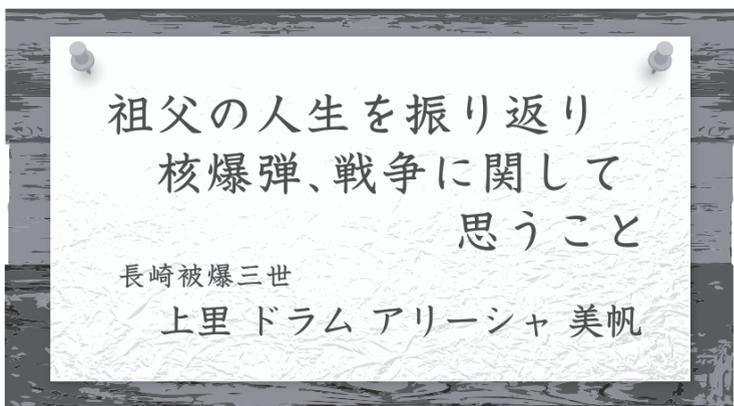
でした。

しかし被爆者手帳という言葉。学校で歴史を学ぶようになって、原爆の事を知り、そこで原爆に関して、他の人よりも近しいところにいるような気持ちはしてきました。その時に母から原爆の話を知りました。その時母には、「学校では絶対に言っちゃだめだからね」と言われておりました。言われたとおり誰にも言いませんでした。

私が噤家になつてちよつとした頃に父が倒れたという知らせがきました。脑梗塞でした。私は自分の親不孝のせいかな？と思えました。その入院で、すい臓癌を患っていることが分かり、その

月9日に長崎。その場で亡くなつた方たちの数の多さに、原爆というのは酷いものだと思っておりましたが、実はそれだけでは収まっていなかったんですね。その場で、またその後、被爆した人たちの体もむしばんでいき、その範囲の広さは計り知れない。被爆者ではなかったはずの父も被爆していたかもしれないと思えました。そんな恐ろしい、原爆。世界で唯一の被爆国である日本。その被爆者たちが同じ苦しみ、悲惨さ、恐ろしさを二度と繰り返して欲しくない、被害者でありながら色々な辛い目にも合ってきた被爆者自身たちが世界に訴えているというのに、日本の政府は核兵器禁止条約に批准すらしない。日本政府は煮え切らない態度をとっているのをよそに、ノーベル

財団は日本被団協にノーベル平和賞を授与し、世界の平和を思う気持ちと同じ方向を向いている。それなのに、唯一の被爆国である日本の政府は、苦しみながら訴えている自国の被爆者たちの訴えを聞こえないふりをしているように思えてならない。原爆と原爆は違うかもしれないけど、東海原発、福島原発と、何か間違いが起ると広範囲で被害が出てくるという点では、こちらも考えてみたら方がいいのではないかと思えます。今まで私はこの訴えに関して何もしてこなかった。でもこれからは思いを強く、原爆を無くさなくてはいけないということを訴えていこうと思っております。



私は上里勇吉の孫娘で、今年32歳になります。日本で生まれ、6歳でアメリカ・ワシントン州に移り住みました。高校卒業後は日本の大学に通い、24歳まで東京で働き、その後、アメリカに戻りました。人生の半分を日本で過ごし、半分をアメリカで過ごしたことになります。

私のおじいちゃんは私にとって最も特別な人です。常に守ってくれ、与えてくれ、愛を注いでくれる存在です。私は、おじいちゃんは人生を生き抜いていると感じます。

おじいちゃんは、恐ろしい原爆をはじめ、故郷・沖縄の破壊や侵略、植民地化など、戦争とアメリカによって苦しめられました。そんな経験がありながら、アメリカ人で元海兵隊員である私の父を、

どのように自分の一人娘(編集部注:アリーシャさんのお母様)の結婚相手として受け入れることができたのでしょうか。私だっただけから受け入れられるかどうかかわりません。

早稲田大学で国際関係を学んでいた頃、そんなおじいちゃんのおじいちゃん「人生」と「思い」が、私の人生や今の世界情勢、未来とどのようにつながっているのかを分析してみました。

すると、あることに気づきました。民族主義を維持するため、国によって歴史の教え方が異なり、または省略されているのです。私がアメリカで教えられた第二次世界大戦は、「日本人がアメリカ人を殺したので、アメリカは自国を守るために核爆弾を落とさなければならなかった」というもの

でした。

すると、「アリーシャの祖父母は真珠湾を攻撃した自爆テロ犯だったんだね」と、学友に言われ、それ以来、私は真珠湾攻撃の日に学校に行くのが嫌になりました。友だちのクスクス笑いの中に感じたのは、恥と悲しみでした。これは、私が日本人としてアメリカで成長する中で経験した多くの出来事の中のほんの一つです。

周囲に溶け込みたかった私は、日本語を話すのをやめました。ランドセルを使いたくなくなりました。日本のお弁当を学校に持って行きたくなくなりました。

その経験から学んだことは、平和を理解する人間を育てるには、偏見のない歴史教育が非常に重要である、ということでした。人類の「過ち」や「勝利」を明確に

するより、包括的な世界史を教えるべきです。学ぶべき教訓は「戦争は間違っている」ということです。

戦争は阻止しなくてはなりません。戦争のトラウマは世代を超えて受け継がれます。辛い記憶は、戦争を経験した世代の苦しみと負債であり、将来の世代のために学び、教えるべき教訓です。

おじいちゃんは、60年以上本音を隠してきました。沈黙の中でトラウマを抱えてきました。そのおじいちゃんが、自分の経験を語り始めたのは、私が2代になってからのことでした。人々に自分が被害者だと思われなくなかったからです。トラウマを再現したり、現実を認めなくなかったからです。そしてそれは、自分自身だけでなく、家族を守るためでもあり

ました。自分より他人を優先する人生を送り、おばあちゃんと巡り合って暖かい家族を築いた結果、美しい人生を貫くことができたのだと思います。

おじいちゃんは誰にも経験してほしくない逆境を乗り越えてきました。無惨な死や暴力、悲劇、パニック、破壊、負傷、食糧不安や飢饉、家族の喪失、避難、安全性の欠如、人種差別、強制同化、病気などの悲惨な出来事と歴史です。しかし、残念なことに、世界ではあまりにも多くの人々がまだこれらの現実と直面しているのが現実です。

おじいちゃんは94歳になって耳が遠くなり、会話にあまり参加できなくなってきましたが、宮古島の幼少時代や戦争について尋ねると、何時間にもわたって鮮

明で詳細に、まるで目の前で見て
いるかのように話して聞かせて
くれます。また、おじいちゃんが
経験したことを聞きたいと思っ
ている人がいれば、いつでも話し
てくれます。

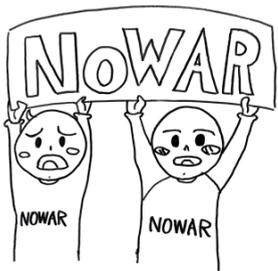
人々は、それぞれの苦難を分か
ち合えるよう努力しなければな
りません。そして勇気を出して話
そうとする人がいれば、聞いて、
信じて、理解してあげること
です。癒しや連帯、愛によって世界
は平和への道筋を見つけ、維持す
ることができるとです。

私のおじいちゃんは私にとつ
てサバイバーでありヒーローで
す。あえて言わせていただけば、
日本人とアメリカ人のルーツを
持つ私は、平和のシンボルであ
り、平和の証人です。おじいちゃ
んの強さと深い愛がなければ今

の私はありません。私は日本人で
あり、アメリカ人であることを誇
りに思っています。二つの文化を
深く知れることは、私の人生に
とって非常に意味深いことです。

私はアメリカと日本の両方に
住んでいましたが、本当の意味で
安心を感じたことはありません。
人が安心を感じるのには、その人の
周囲にいる人々のおかげだと気
づきました。私にとってはおじい
ちゃん笑顔です。

過去の痛みがどうであれ、どん
な見た目であれ、どんな言語を話
そうとも、人間の本质は愛です。
愛こそ真実です。



被爆三世として
受け取ったもの
つないでいくもの
長崎被爆三世 高比良 怜花

私が「自分は被爆三世なんだ」と強く意識するようになったのは、中学生の頃でした。小さい頃はいつも遊び相手になつてくれて、保育園の送り迎えや学校行事にも付き添ってくれていた祖父が、毎年夏に準備していた「戦争展」に、一緒に参加したときのことです。

それから私は、毎年祖父の手伝いもかねて戦争展に通うようになりました。高校生ときには、家族旅行で母のふるさとである長崎を訪れ、浦上天主堂も、この目で見ました。焼け落ちた聖堂の写真と、現在の風景が重なり、「ああ、祖父が言っていたのは、ここだったんだ」と実感した瞬間でした。

ある夏、私は思い切つて祖父の出前授業に同行することにしました。祖父は80代を過ぎてもおお、重いトランクにポスターとパソコンを詰めて、真夏の暑さの中、小学校を訪問していました。体育館で祖父が語ったのは、被爆直後の隣人の少女の話。爆風で砕けたガラスが体中に突き刺さった少女、そのガラスを母親がひとつひとつ抜い

ていくと、血が吹き出して止まらなかったという話でした。少女は亡くなり、祖父の声も震えていました。私自身、この話を生で聞いたのは初めてで、その場の空気のこと、祖父の語る力の強さに、胸が締めつけられるような思いがしました。子どもたちも祖父の世界にひきこまれ、授業後に質問に押しかけていたのも印象的でした。

授業が終わった後、祖父はまた、バスを乗り継ぎながら重たいトランクを引いて帰っていききました。その背中少しためらうように遅く、でも決意のこもつたものでした。かつて私と一緒に遊んでいた祖父の姿とは少し違い、「もう、私たちの世代が受け継いでいかなければ」と思つたのです。そして、三世は被爆者から直接お話を聞くことができるギリギリの世代でもあ

るので、これからの活動のキーマンになるかもしれない。私はその思いから、ダンスを通じて平和のメッセージを届けたいと考え、仲間とともに「ピースファクトリー」というチームを立ち上げました。直訳すれば「平和工場」。平和について共に考え、創造する場をつくりたいという思いを込めて名付けました。

「ダンスと平和って、どうつながるの?」と思われるかもしれませんが。けれどある日、地下のシエルターでバレエの練習をするウクライナの少女の写真を見たとき、胸を打たれました。「私たちは平和だからこそ踊れるんだ」と気づかされたのです。平和が当たり前にあることが、どれほど尊いかを実感しました。

継ぐだけでなく、平和の尊さを伝えていくことも、もう一つの「語り継ぎ」の形なのではないかと感じました。そんな思いで、毎年秋に行われている江戸川平和コンサートに出演し、戦争への怒りや平和への願いを込めた楽曲に合わせて、パフォーマンスを披露しました。今、被爆者の平均年齢は85歳を超え、体験を直接聞ける時間は確実に限られてきています。だからこそ、私たち三世世代が「語り継ぎ」と「行動」の両方を担う存在にならなければなりません。祖父をはじめ被爆者の方々が命を削って伝えてきたものを、私も自分らしいかたちで次の世代につないでいきたい、平和のバトンをつないでいきたいと心から思っています。

展示されていたのは、長崎の被爆直後の写真や、焼けただれた街並み、子どもたちの泣き顔でした。学校の授業で「原爆」については少し学んでいたものの、それが現実に来たのはこのときが初めてでした。私は東京生まれですが、母のルーツは長崎にあり、そこにこんなにも悲惨な出来事があったという事実を、その夏初めて受け止めました。

そんな私の中で、「平和」とは何なのかを考えるきっかけになったのは、大学で学んだ国際関係論や平和学の授業でした。祖父の語ってきた戦争体験、母が話してくれた平和活動への思い。そして、母がかつて平和学の第一人者であるヨハン・ガルトウング氏を取材したことにも、私は自然と引き寄せられるように関心を深めていきました。

こちらで
ホットコラム

菊太楼の江戸川人情

江戸川区南葛西在住の落語家、古今亭菊太楼です。

私たち噺家は、日本全国いろいろな所で仕事をさせて頂きます。先日、長崎県の佐世保に行かせて頂きました。実は私の出身地はその佐世保なんです。

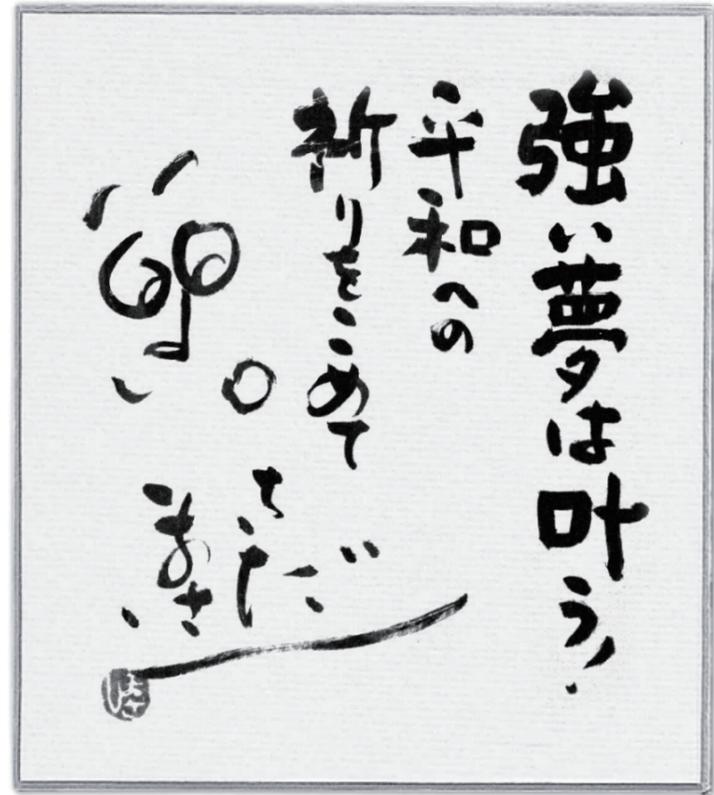
といっても生まれてすぐに父の転勤でこちらに引っ越して来たので、佐世保の記憶はありません。ただ父の出身地なので私の本籍地も佐世保でした。しかし子供のころから一度もその本籍地に行ったことはなく、私の父もその兄弟もみな亡くなってしまっていて、そこに親戚が住んでいるという話も聞いたことが無かったので、もうそこには何も無いと思っていました。

仕事の後、帰りまで時間があつたので、一緒に行った妻が「その本籍地に行ってみようよ」と言うんです。私は「もう何もないよ」と言ったんですが、「駄目もとで行ってみようよ」と言われ、「それじゃあ」ってんで行ってみました。

スマホで調べて坂道をぐるぐると登ってその住所に行ってみると、私の本名は西村というんですが、表札に西村と書いてあつたんです。残念ながら留守だったので、そのまま帰ってきましたが、妻の「駄目もと」という言葉のお陰でなんだか私のルーツを見つけたような気がして胸が熱くなりました。

同じ名前でもまだ親戚かどうかは分かりませんが、いつかまた訪ねてみたいと思っております。今回は私のつまらないルーツの巻でしたが、皆さんもご自身のルーツを「駄目もと」で訪ねてみてはいかがでしょうか。胸が熱くなるかも。

(大橋美枝子ニュース2025年3月号よりお借りしました)



長崎出身のさだまささんから
江戸川平和コンサートに対していただいた色紙

若い世代のメッセージ



原爆症について 調べたこと

瑞江第三中学校 小川 美空

1945年8月6日、広島に原爆が投下されました。そして、8月9日、長崎に二度目の原爆が投下されました。原爆で多くの人が亡くなり多くの建物が破壊されました。これだけでも、原爆がすごく恐ろしいということがわかります。私は原爆症後遺症が残ると聞いたことがあります。原爆の投下によって、その時は亡くなることなくても、徐々に症状が現れ、死亡に至ってしまう、とも聞きました。なので私は原爆症について調べました。

まず原爆症とは、原爆の熱線、爆風、放射線が人に与える障害のことです。原爆症は二種類に分けられ、急性障害と後障害があります。急性障害は原

白血病患者は子供に多く、今から話す、「サダコと折る」についても白血病患者です。

2歳の頃に広島で被爆した佐々木禎子さんは、10年後の12歳で白血病と診断され入院します。そこに、お見舞いとして贈られてきた千羽鶴をきっかけに、サダコさんは葉包紙などで2センチ程の大きさを折りづるを折っていきます。その数はなんと1300羽以上だそうです。「生きたい」と強く願うサダコさんですが、その願いも虚しく体調は次第に悪化。1955年10月25日に、私と同じ年の13歳で白血病で亡くなりました。サダコさんは父に「何を食べたい？」と聞かれ、お茶漬けを一口食べて、「美味しい」それが最期の言葉だったそうです。

生きたいと強く願っていたサダコさん、罪もないのに亡くなってしまった人はサダコさん以外にも何万人、いや何十万人もいます。

サダコさんが亡くなったことにショックを受けた同級生たちは、サダコさんをはじめ、原爆で犠牲になった全ての子供たちの霊を慰めるため、「原爆の子の像」が建てられました。

爆投下後、すぐに現れる病気のこと、後障害は原爆投下の4ヶ月より後に現れる病気のことを言います。

急性障害の主な症状は、熱線、火災による火傷、爆風による外傷・骨折、そして放射線による吐き気、だるさ、下痢、出血、意識障害、発熱、脱毛などがあります。この放射線による症状の原因は、大量の放射線が血液をつくる骨髄、胃や腸などの細胞を壊すからだと言われています。

次に後障害の主な症状は、火傷の跡が盛り上がるケロイド、目の水晶体が白く濁り、見えにくくなる原爆白内障、お母さんのお腹の中で原爆にあっただ子供の頭が小さくなる小頭症、血液のガンの白血病があります。

白血病とは、骨の内部で血液を造る時に細胞のコピミスが起こり、「白血球細胞」が増えてしまう病気です。そのため、息切れや感染症にかかりやすくなる、発熱しやすくなる、鼻血が出やすくなる、アザになりやすくなるなどの症状があります。

また、葉が正常な細胞を攻撃することがあり、抜け毛や爪の変色、変形、口内炎になることもあります。

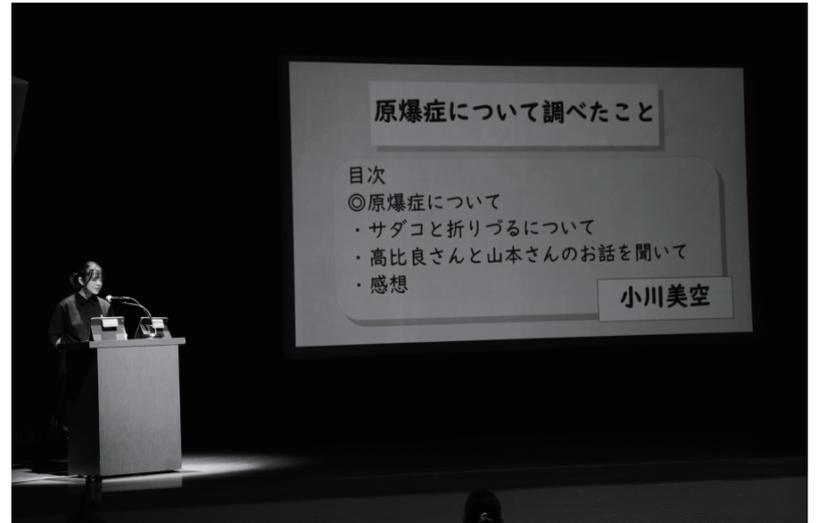
次に、親江会被爆者の高比良さんと山本さんのお話を聞いて私が思ったことです。高比良さん、山本さんのお二人には貴重なお話を聞かせていただきました。

原爆について経験したことの無い私たちにとっては、胸がゾッと信じられないような話ばかりでした。

まず私が驚いたことは、13歳の私たちよりも幼いころに経験しているということです。高比良さんは8歳、山本さんは7歳で。そして山本さんは、学校に登校する時に原爆が落とされたと聞きました。中学2年になってやっと自立してきたと思える自分は、もし、7歳の時、それに登校中ということはお母さんもない、そんな状況だったら私はどうなるのでしょうか。考えられません。

次に私が驚いたことは現実味のない表現です。例えば高比良さんがおっしゃっていた、「太陽がそばにあるんじゃないか」という言葉です。

太陽を見上げた時、まぶしくて思わず手をかざしてしまう、そんな時、ありますよね。その太陽が近くにあったら目を閉じていても眩(まぶた)が



ギーンとするような、頭がクラクラしてくるような、原爆のおぞましさが伺えました。

さらに驚いたことは、山本さんがおっしゃっていた、「水ぶくれがひどく、傷からハエが湧くようになっていた」ということです。

原爆症を調べたり、原爆での被害を調べると、亡くなった方がたくさんいることがわかるため、火傷や骨折と聞くと、生き残っただけでも十分じゃないか、なんて冷たいことを思っていました。

ですがそれは私が思っていたよりも、大規模な症状だということがわかりました。そして、水ぶくれや傷からハエが湧くなど私は初めて知ったため、私が調べた原爆症の症状はあくまで代表的なものというだけで、被爆者の人々には他にもさまざまな症状に悩まされてきたと知りました。

最後に全体を通しての感想です。火傷では皮膚が剥がれ、「殺してくれ」と嘆く人もいたそうです。先ほど言いましたが、火傷、骨折と聞くどうしても軽い症状だと捉えてしまいます。ですが、自分が想像するような症状の程度、ではなく、それよりもさらに上をいくものだったことがわかりました。

そして、原爆を受け、罪のない人や、原爆の被害を受けた人の赤ちゃんまで被害が及んでしまうことがわかり、改めて戦争はやってはいけないことだと思いました。

今、周りにいる友達、先生方、家族など、当たり前だと思っている存在が、原爆が落とされた瞬間に当たり前じゃない。失った存在になってしまうと、思うと原爆は恐ろしいものです。きっと、実際に原爆が落とされるその時も、貧しいながらも、周りに友達がいって、先生と会って、勉強をしていたと思います。

今も戦争や紛争をしている国があります。今、この日本では戦争が起きていません。「日本は起きていないから大丈夫」、それではいけません。世界という広い視野で戦争が一つも起こらないようになると、いいなと思います。そのためにはまず、知らせる、前に知ることが大切です。このような機会を大切に、興味を持ち、そして、周りに知らせる。そのことを一生忘れることなく、未来につなげていくことが大切だと思います。



戦争体験を引き継ぐ責任

葛西南高校 3年高橋瑞穂 2年篠塚清花

私たちは日本史の時間に近現代の歴史を学んでいます。日本はなぜ無謀な戦争に進み大きな犠牲を生んだのか、という大きな問いかけに向き合っています。

この戦争での犠牲者は、沖縄戦での24万人、東京大空襲での10万人、広島・長崎の原爆での24万人、満州での60万人、出兵した兵士140万人と、膨大な数字です。私たちはこのひとつひとつの出来事に、しっかりと向き合わなければなりません。

戦争が終わって73年目となります。戦争を経験した方々からお話を伺うことが年々、難しくなってきました。と聞きます。ノーベル文学賞を受賞されたカズオ・イシグロさんは長崎にゆかりのある方ですが、「語り継ぐことが我々の責任である」と強い決意でおっしゃっていました。

今、私たちに課せられた使命は、戦争を経験された方々からお話を伺い、戦争を確実に語り継ぐこと

であると考えます。そのような時代に差しかかったのだと実感しました。戦争を経験された皆さんが大切にされてきた平和への思い、平和な世の中を、次の世代にしっかりと引き継ぎます。

原爆ドームを残した大きな決断

7月11日は広島にとって1つの節目の日であることを先日学びました。1966年のこの日に、広島市の人々の思いで原爆ドームの永久保存が決まったことを知りました。永久に残すということは、大きな決断であったことと思います。原爆ドームを見上げれば、常につらい過去が目の前に迫る。つらい過去と常に向き合っていく「覚悟」を人々は決めたのです。

当時はまだ原爆の記憶が生々しい時代であったと思います。見ることも、存在していることそのものもつらい、と思った人々も多かったのではない

でしょうか。その中で、広島の人々の、過去の歴史をつなぐ、さまざまな思いを伝えるという、「強い覚悟」と「熱い思い」を人々が共有したこと。そして将来、未来の人々に、平和をつなぐ決断をしたことは尊く、私たちはその思いをしっかりと受け止めなければなりません。

辛く、苦しい過去は、何もしなければ自然に消えていくのみです。原爆ドームを永久保存するという決断は、辛く、苦しい過去を引き受け、強い意志をもって行動する力を持つと、私たちに教えてくれています。

語り部がつなぐ戦争の恐怖と平和の大切さ

一度でも戦争について勉強をしたならば、たとえ身近に戦争を体験した身内がいなくても、私たちが知った、学んだたった1つのことでも、それを次の世代につないでいくこと。それが私たちにできることであり、していかなければならないことだと感じています。そして、私たちは学ばなければなりません。

現在は、広島・長崎、沖縄、満州、各地の空襲、アジ



アでの戦争被害などに関係する人々によって、次の世代につなげる「語り部」が育成されています。日本に限らず世界的な行動に広がっています。

そして次の世代の語り部の方々が懸命に引き継ぐとなさっています。語り部の育成は時間にかかることであり、決して簡単なことではありませんが、多くの方々の誠実な思いが、つなぐことに向けられています。戦争を経験した方々の、「繋いでほしい」という思いをうけて、私たちもその一人として、役割を果たしたいと思っています。

サダコが望んでいた何気ない日常

戦争で犠牲者となられた一人ひとりの、夢や希望、ささやかな幸せや家族、思い出、あらゆる大切なものを奪って行った戦争。この戦争を再び引き起こさないためにも、私たちは使命を負っています。

先日、高比良さんと坂さんが雨の中、葛西南高校にお越しくださいました。その日は、広島で原爆が投下された際に犠牲となられた、ササキサダコさんの闘病生活の記録を学習する日でした。

でしょう。私たちのことのように考えてみると、私たちが今、何も疑うことなく、当たり前に通過している何気ない日常、毎日は、サダコさんをはじめ戦争で亡くなった方がやりたかったこと、できなかったこと、望んでいたものだと思います。

戦争を学び、伝えることの大切さ

戦争について学ぶ機会を得たことは、私たちにとってよかったと思っています。このような式典に参加することによって、戦争を体験した方のお話を伺うことができ、学び、知っていくことをうれしく思っています。ぜひ戦争を経験した方には、できる限り私たちに話をしてほしいと思います。私たちは聞いた話を忘れず、家族や友達と語り、周りの人や自分たちの子どもにしっかり伝えていきます。

2018年 第38回追悼式にて

私がサダコさんのお話を知ったのは、中学校での平和学習の時でした。たった12歳で亡くなったこと、しかも戦争が原因で亡くなったことに対して、当時私は平和な時代に生まれてよかったのかと思えません。先日再びサダコさんの話に触れ、考えを深めました。

戦争のような理不尽に多くの命が奪われることがなくなった今の日本には、多くの人々の、絶えることのない願いが伝わってきた、平和への思いがあること。そして思いが確実に受け継がれていることを実感しました。戦争で失った多くの人々の犠牲の上に、深い反省があり、不戦を誓った日本国憲法が日本人の平和への心を支えてきたのではないかと思います。

大切な人を失った人々が平和を祈り作ってきたこの世の中を、私たちの世代が無知を理由に台無しにしてはならないと思っています。

サダコさんは小学校の卒業式に出たかったでしょう。中学校に通いたかったでしょう。広い校庭で走りたかったでしょう。友達と何気ない会話をし、何気ない日常を普通に過ごし、楽しみたかった



原爆投下から79年たった今、世界でどのような取り組みが行われているのでしょうか？ それでは、まず世界にどれくらい核弾頭があるのか見てみましょう。

2024年現在の、世界の核弾頭の数は、12120発とされており、去年より200発減少しています。

実際に、2013年から22年までの過去10年の核弾頭数の推移を見ると、徐々に減ってきており、10年間でおよそ4580発減っています。

しかし、今でも使うことができる現役の核弾頭数を見ると、9ヶ国中7ヶ国が数を増やしていて、現役の核弾頭数は全体の8割ほどに上がっています。合計9583発で7年間で332発、1年に換算しても世界で47発分の核兵器が作られています。

次に、核兵器を廃絶する取り組みについて紹介します。



1つ目は、2023年に行われた広島G7サミットについてです。ここでは、各国の大統領や首相が、広島原爆資料館を訪れたり、原爆ドームの前で、献花と黙祷を捧げるなどして、平和について会談が行われました。

次に、核兵器禁止条約についてです。これは2017年に国際連合で決められた条約で、調印した国は、核兵器の開発、保有、使用を含むあらゆる活動を例外なく禁止されます。現在この条約には93ヶ国が署名しています。

しかし、唯一の被爆国である日本は核兵器禁止条約に参加していません、それはなぜなのでしょう？ 2023年には、傍聴のみで参加するオプザーバーでの参加をするかについて論議が行われましたが、見送る結果になっています。

日本が核兵器禁止条約に批准しないことに対して岸田首相は、

「核兵器のない世界という大きな目標に向けて重

要な条約だが、核兵器国は1国たりとも参加していない」

と話しています。つまり、核保有国以外が核廃絶の条約を作っても、大きな問題の解決にはならないという考えです。

ですが、日本が不参加である大きな理由があります。それは、アメリカの「核の傘」に依存しているためです。

そもそも「核の傘」とは、もし、他の国から核兵器の攻撃を受けたとき、代わりにアメリカが核兵器を使い攻撃するという状態のことです。しかし、日本が条約に調印してしまうと、アメリカの核の傘から離れる必要があり、他の国からの攻撃を受けやすくなってしまふことがあります。また、核兵器禁止条約の問題点は、岸田首相がコメントしたように、核保有国は条約に署名すると、守備や攻撃用の核兵器を手放す必要があるため、保有国にとってはデメリットになります。なので参加する可能性は、核兵器廃絶には向かわない可能性があります。

さらに、核保有国以外の国のみが署名している

状態が続くと、核保有国とそれ以外の国で対立が起こってしまう恐れがあります。

このように日本が条約に参加しない理由は、現状、核廃絶の実現が難しいことや、他の国との関係が主な原因と思われます。

個人的には日本は「唯一の被爆国」なので、条約に参加することで一気に注目が広がる可能性もあると思うので、参加するだけでも意味はあるのではないかと思います。

話は変わりますが、次に、去年瑞江三中で行なわれた、平和学習の取り組みについて紹介します。私たちはペットボトルのキャップを使って、平和をテーマにしたモザイクアートを2学年で制作しました。

制作手順は、まず全校生徒からボトルキャップを集め、元々の原画を手本にキャップを1つ1つ貼っていきます。

約8500個のキャップを使い、作ったものをつなぎ合わせて、完成した絵がこちらです。また、集められたキャップはワクチンに変換されます。

最後にまとめと感想です。第二次世界大戦が終

戦してから79年、この79年の間に、日本の被爆者の方々を中心に、核兵器廃絶への取り組みが、世界や当時を知らない私たちにも広がっていきました。

しかし、世界では当時を知らないが故に、威嚇や脅しのために、12120発分の核兵器が作られており、日本もそれらの国に頼ってしまっている状況です。

来年は原爆投下から80年の節目を迎えます。80年後を生きる私たちができることは、当時失われた20万人の尊い命が風化されないために、また、「次の世代」が同じ目に遭わないように、自分たちが安心して生きられる平和な社会を築くことや、戦争の悲惨を、次の世代に伝えていくことなのかなと思いました。

2024年 第44回追悼式にて



私たちが知ったこと

春江中学校三年 高橋 莉子

“原爆”私は中学生になって修学旅行への取り組みが始まるまでこのことを深く考えたことがありませんでした。広島・長崎に行ったことはなかったし、身近に被爆した人もいなかったため、全く無縁の生活でした。現在の日本は戦争のない平和な国です。しかし七二年前の日本がどんなにひどい状態だったか詳しく知り、今、死の恐怖が全くない中毎日元気に暮らせていることが、当たり前ではないんだなと思いました。戦争中生きていた方々は現在からは想像すらできない苦しい思いをされていたと知りました。

昨年の夏休みの宿題で、広島に関するレポートを書きました。私は広島東洋カーブについていろいろなることを調べ、原爆の壊滅的な被害から復興を目指してつく

気になり誰よりも辛かったはずなのにいつも笑顔でまわりを明るくしていたのを知りました。何も悪くない普通の女の子が核兵器によって命を失わなければならなかったことが、サダ子さんに会ったことがない私でもとても心が痛く、核兵器を許せないという怒りがこみ上げてきました。数日の事前学習で原爆の恐ろしさや被害の大きさを知り、これから向かう広島に何があり、何を学べるのか、緊張もある中ついに修学旅行をむかえました。

広島では平和公園に行きました。原爆ドームの見学の後、原爆の子の像の前で事前に全員で折った千羽鶴のパネルを献納しました。初めて見入る原爆ドームは、何か訴えているようでした。“リトルボーイ”の破壊力を目の当たりにして私たちは『これが核兵器か』と今までより深く原爆の本当の姿が分かったような気がしました。そして、この広島で何万、何十万人の人が苦しんだのだろうか。今も講話活動を続けられている方は、“あの日”を思い出してどんな思いをかかえているのだろうか。原爆投下からも七十年以上も経ったので、被爆された方はどんどん高齢化しているため、もしかし

られたチームだと知り、広島東洋カーブの存在が広島県民の心も支えたんだと思いました。自分たちの頑張りで広島を明るくしようとする、とても素晴らしいチームだと思います。

そして、その年の文化祭では『長袖の夏とヒロシマ』という劇と『ヒロシマのある国で』という曲の合唱をしました。一人一人が何らかの役割をもち、確実に全員が修学旅行で広島へ行く意味の重さを実感しました。

三年生になってからは、実際に被爆された方に来校していただき、ご講話を聞くことができる機会がありました。初めて実体験をふまえた話を聞き、原爆の後は何も残らないのではなく、人々の心に悲しみをはっきりと刻んだことを感じました。その日は私たち学級委員会で、佐々木サダ子さんの人生をスライドショーとともに学年の皆に発表しました。スライドショーも台本も初めに読んでみただけで辛い気持ちになりました。サダ子さんは原爆による放射能で白血病にかかり、わずか十二歳で亡くなりました。千羽鶴を折ると病気が治ると信じ折りました。サダ子さんは、自分が病

たら講話を続けることが厳しい方もいるかもしれない。命をかけて原爆の本当の恐ろしさを伝えてくださる方々の、心からの核兵器廃絶の願いが心に刺さりました。戦争を経験していない私たちに、一体何ができるのか。私は先ず自分たちの世代が見て、聞いて感じて、語り継いで、人々の心から原爆の記憶を無くさないことだと思えます。もう二度と戦争で苦しむ人が現れてほしくない。自分たちの平和は自分たちで守る。これから日本を担う私たちが、そうした強い意志を持って被爆者の皆さんの願いを受け継いでいきたいと思えます。

2017年 第37回追悼式にて



世界が平和で

あるために

平井西小学校5年 瀬野凜咲

私は小学1年生の時から平和の日の集会を聞いていて、戦争のことについて知りたいと思っていました。

ある日、広島平和記念資料館がリニューアルされたというニュースを見て広島県に連れて行ってもらい、そこで実際に見てきたもの、原子力発電のこと、世界の平和への動きについてまとめました。そして、『ぼくは満員電車で原爆を浴びた』の本を読みました。これからその感想を読みます。

★ 私には戦争の本を初めて読んだわけではない。けれど、これほどまでに読むのが苦しい本は読んだ

ことがなかった。それは、当時11歳の少年だった米澤鐵志さんが、8月6日以降、何があっても何を見たかを語っている本だ。

★ 学校で毎年、平和の日集會が行われる。話がひとつひとつ私の胸に刻まれていった。もっと知りたくて広

島へ行ってみたいと両親に頼んだら、夏休みに原爆ドーム、平和記念資料館に連れて行ってもらうことになった。そこで見たものは、ポロポロになった学生服、被爆した人々の写真、8時15分で止まった時計。遠い昔の話だと思って想像すらできなかった戦争が、いろんな目で見たものと重なって、少しずつ想像できるようになっていった。

★ 太平洋戦争は米澤さんが1年生の時に始まり、原爆に遭ったのが5年生。文章ではたった1行だけれど、あまりにも長い時間に驚いた。しかもその間、食べ物は足りなく、身の回りのものが消えていったと米澤さんが語っていた。



私はお腹が空いたら「少し待っていてね」という母の一言のあと、お腹いっぱい食べられる。当たり前のようにだけれど幸せなんだと気づかされた。

★ 学校へ持っていく弁当は、皆、日の丸弁当で、米澤さんのお母さんはごはんの間にチーズをそっと忍び込ませてくれることがあったそうだ。

★ 私は資料館で見た真っ黒に焦げた弁当箱を思い出した。米澤さんの弁当箱ではないけれど、きっとその弁当箱にもお母さんの愛情がたくさん詰められていたに違いない。それを焼き尽くしたのが8月6日に落とされた原子爆弾だ。

★ 米澤さんは、お母さんと満員電車で原爆を浴びた。人々が苦しんでいる姿を見た、見てしまった。目の前で人が燃えていく。皮膚が指の先から50センチも垂れ下がる。それも、1人2人ではなく、大勢の人、見渡す限りの人。そして家族が死んでいく。

★ 私は原爆ドームを前にして、「暑い」と言っただけではない気がした。でも耐えきれず、少し涼もうと川の方へ向かった。75年前、人でいっぱいになった川だ。ためらいながらも、人差し指を川へ入れてみ

想い ～区長室から～ 江戸川区町 齊藤 猛

先月、「原爆犠牲者追悼碑」が立つ滝野公園で、区内原爆被爆者の会『親江会』主催の追悼式が行われました。

今年はコロナ禍の中、献花だけでの実施で、若い世代による発表は動画サイトで公開されました。動画では平井西小5年の瀬野凜咲(せのりさ)さんが、被爆者、米澤鐵志(よねざわ・てつし)氏の体験記『ぼくは満員電車で原爆を浴びた』の感想文を発表しています。「広島で母親と乗っていた満員電車で被爆した米澤さんが見た、見てしまった地獄絵図。私は戦争の本を初めて読んだわけではない。けれど、これほどまでに読むのが苦しい本はなかった」。親に頼み、家族で夏休みに広島を訪れ、「そこで見たものは、ポロポロになった学生服、8時15分で止まった時計。原爆ドームを前にして『暑い』と言っ

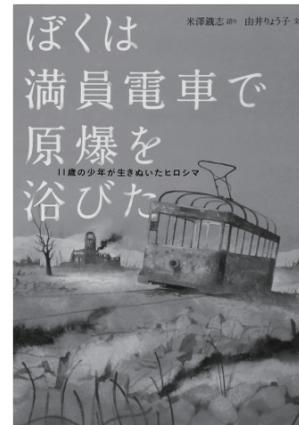
てはいけない気がした」と。瀬野さんは見て、感じ、学び、「私は戦争をしないと決めた後の日本に生まれ今ここにいる。平和な時間がある今だからこそ、戦争で傷ついた人々の姿、家族を失う悲しみ、その現実から目をそらさず、伝え続けていくことが平和への第一歩だと思う」と力強く訴えます。

戦後75年がたち、戦争を知る世代が高齢化する中、こうした若い世代の尊い想いは、世界を平和な社会へ導いてくれるものと信じています。

江戸川区広報『えどがわ』2020年8月10日号より

た。とても冷たくて透き通った川だった。今もアフリカや中東で戦争が起こり、人々が傷ついていることを考えると胸が痛くなる。広島で見てきたものを自由研究でまとめ、読み直した本や新しく読んだ本があった。ウガンダでは幸せに暮らしていた子供達が突然連れ去られ、子供兵となっていった。戦争は、た国と国が戦うだけではなく、多くの人々を傷つけ苦しめている。もう、「戦争」という言葉を簡単に使えなくなった。私は戦争をしないと決めた後の日本に生まれ、今ここにいる。平和な時間がある今だからこそ戦争で傷ついた人々の姿、家族を失う悲しみ、その現実から目をそらさず、伝え続けていくことが平和への第一歩だと思う。調べたり本を読んでみて、戦争を知らない私たちの世代に伝え続けていくことが大切なんだと思いました。私はこれから英語を勉強し、戦争のことを世界に伝えていきたいとおもいます。

2020年



参照『ぼくは満員電車で原爆を浴びた：11歳の少年が生きぬいたヒロシマ』(米澤鐵志、由井りょう子著 小学館)

先月、「原爆犠牲者追悼碑」が立つ滝野公園で、区内原爆被爆者の会「親江会」主催の追悼式が行われました。今年にはコロナ禍の中、献花だけでの実施で、若い世代による発表は動画サイトで公開されました。動画では平井西小5年の瀬野凜咲さんが、被爆者、米澤鐵志氏の体験記「ぼくは満員電車で原爆を浴びた」の感想文を発表しています。「広島で母親と乗っていた満員電車で被爆した米澤さんが見た、見てしまった地獄絵図。私は戦争の本を初めて読んだわけではない。

江戸川区長 齊藤 猛

区長室から

想い

けれど、これほどまでに読むのが苦しい本はなかった」。親に頼み、家族で夏休みに広島を訪れ、「そこで見たものは、ポロポロになった学生服、8時15分で止まった時計。原爆ドームを前にして『暑い』と言っ

けない気がした」と。

瀬野さんは見て、感じ、学び、「私は戦争をしないと決めた後の日本に生まれ今ここにいる。平和な時間がある今だからこそ、戦争で傷ついた人々の姿、家族を失う悲しみ、その現実から目をそらさず、伝え続けていくことが平和への第一歩だと思っ」と力強く訴えます。

戦後75年がたち、戦争を知る世代が高齢化する中、こうした若い世代の尊い想いは、世界を平和な社会へ導いてくれるものと信じています。

毎日とは当たり前ものではない

清新第二中学校 2年

渡邊 実央
渡邊 麻央

戦争が終わり、今年で70年が経ちます。実際に戦争を体験した方たちの高齢化が進み、教訓をどのように継承していくかが問題になっていきます。皆さんの中で戦争のことを考えながら生きていく人は果たしてどれくらいいるのでしょうか。残念ですが、あまり多くはないのではないのでしょうか。私も、ついこの間まではそうでした。私はそれを知って、「原爆についてなら少しは知っているのに」と思いました。

しかし、話を聞き始めると、私の知っていたと思っていたことは、その大きな被害の本当に一部だとわかりました。皆さんは知っていましたか。原爆が投下された爆心地付近

は、鉄やガラスも蒸発する程の高熱にさらされ、強烈な熱線により屋外にいた人は全身の皮膚が炭化し、内臓組織に至るまで高熱で水分が蒸発していったこと。35キロメートル離れた場所でも素肌に直接熱線を浴びた人は火傷を負ったこと。爆心地から20キロメートルの範囲にある建物は、爆風と衝撃波の影響で、ほとんど全てが吹き飛んだこと。どれも、今は想像すらできないことばかりです。私はどれも初めて聞いたものばかりでした。知っていると聞いていた自分を恥ずかしいと思うと同時に、「日本しか経験していない、こんなにも大切なことを、私たちは今まで知らずに生きてきたんだ」とも思いました。こんなにも重大なことなら、私達はもっと真剣に考えるべきだと思ったのです。

私たちは、もしかすると心の中ではこう思っていたのかも知れません。「今の平和な世の中に戦争なんて起こったりしないし、起こりそうなら他の国の誰かが止めてくれるはずだ」

確かに今は、とても平和な世の中です。でも、原爆が使用されるような戦争が起きそうになった時、それを止めるのは日本の役目ではないのでしょうか。世界

でたった一つの原子爆弾の被害国として、もう二度とこのようなことがあってはならないと、説くべきではないでしょうか。

しかし、それを実現するためには、私達がやらなければならぬことが沢山あります。そして、私には一番始めにやらなければならないことがあります。それは、「知ろうとすること」です。

私は今まで、少しの知識を得たからといって、沢山の知る機会があったにも関わらず、それを放棄してききました。そんなことばかりしていたので、私には世界に向けて伝えられることが、今はとても少ないのです。だから、これからは沢山のお話に耳を傾け、新聞や本を読むなどして、いつかどこかで戦争が起きそうな時、二度と起こしてはならない、何も武力で解決させることはないと言っているくらいに知識を増やしていきたいと思えます。

そして今、少しずつ知識を増やしていく中で、考えることがあります。それは、「戦争をしないと誓った国に生まれ、多くの人に助けられ、支えられながら育ち、何不自由ない生活を送ることができている。そして、辛い経験をされた多くの方々から多くのことを

教わり、自ら考える場とたくさん時間はある、とても恵まれた環境の中に生きている」ということです。そして、それは当たり前なことではありません。日々を過ごして行く中で、当たり前になってしまいが、忘れてはならないことだと思えます。常に戦争のことを考えながら生きていくのはとても難しいことだと思えますが、何不自由なく生きている毎日が当たり前ではないと意識することなら、私たちにもできることではないでしょうか。

私は、原爆や戦争のことをきっかけに、毎日が当たり前ではないと気付くことができました。これからも沢山のことを学び、いつか命の尊さ、原爆戦争の残酷さを後世に伝えていけるような人間になりたいと思えます。

2015年 追悼式にて

35回 江川区原爆犠牲者追悼式



江戸川区原爆犠牲者追悼式

江戸川区立松江第二中学校 樋口

柚奈

原爆は一瞬にして無差別に命を奪う最悪な兵器です。必ず廃絶すべきだと思います。

私は以前から原爆が広範囲に被害をもたらす、多くの犠牲者を出してしまうことは知っていました。しかし、実際にどのような被害があり、その時の広島や長崎の様子がどんなものなのかを知りませんでした。そこで、原爆の被害に遭った場所や人の写真を見ました。そこには想像を絶する光景が写されていました。それまでは犠牲者の数や被害の範囲では今一つピンとこない部分があったのですが、写真を見て原爆の威力の大きさを感じました。それらの写真はあまりに衝撃的で目を背けてしまいたくなるほどでした。一瞬にして跡形もなく街を壊し、多くの犠牲者を出したことは一目瞭然でした。被害はこのようない瞬のものだけではないとい

この文章が悲惨さを物語っています。それまで身近にいた人たちが突然命を奪われるということの恐ろしさを感じました。また、子供たちが体験談の最後に「あの恐ろしさは死んでも忘れません」や、「こんな恐ろしい目に二度とあいたくありません」などの思いが書いてあることが強く印象に残っています。核兵器開発が加速する今だからこそ、このような声に耳を傾けるべきだと思います。



先日、国連本部では核兵器禁止条約制定に向けて会議が行われました。そして、条約は賛成多数で採択されました。しかし、その会議には核兵器保有国や、核の傘の下にいる国はほとんど参加していませんでした。日本も核の傘の下にいるため、この会議には参加していません。核兵器廃絶の重要性を一番分かっているにもかかわらず、不参加だったことをとても残念に思います。条約推進国は「会議に被爆

うことも原爆の怖さだと思いました。一命をとりとめても、被爆者は外傷だけでなく内臓の機能低下や様々な病気などの原爆症に苦しめられています。原爆は何十年にもわたり、爪痕を残し人々を苦しめています。この現状を知り、原爆などの核兵器は絶対にあってはならないものだと感じました。

私は写真集とともに「ピカドン」という本を読みました。当時四歳から六歳だった子供たちが小学生になってから体験談を綴った本です。この本では当時は幼かった子でも、原爆投下が鮮明に記憶に残っていることが分かります。それほど悲惨で衝撃的で忘れられない出来事だったからでしょう。その本の中の一部を紹介します。

『泣きながら母をたずねる子供、「たすけてくれ!」とさけぶ声、向こうの方から火の手が上がって、見る見るうちに黒煙が県病院を包んだ。前の川には、あまりのあつさのため川に飛び込んだ人でいっぱいである。ばかりばかりと流れてくるたくさんの死体もあった。』

者を迎え、被爆者に対する自分たちの責任を常に心に留めていた」と述べています。私もこのように過去と向き合う姿勢は核兵器廃絶に向けて必要だと思えました。原爆の悲劇を繰り返さないために世界が団結し、核兵器がなくなることを強く望みます。また、日本は唯一の被爆国として、原爆を語り継ぎ、悲惨な出来事を繰り返さないように世界に訴えていくことが重要だと思います。

私たちの学校では毎年、原爆犠牲者を追悼する気持ちを込め、折り鶴を作っています。そして、その鶴を今追悼式で献納しています。私は去年もこの式に出席し、原爆投下時の体験談を聞いて初めて知ったことや学んだことがあります。そのため、若い世代に語り継ぐことの重要性が分かりました。このような活動はずっと続けていくべきだと思います。それが核兵器や戦争のない世界につながるからです。私は平和な世界にするために、これからも戦争や核兵器について学び続けます。そして、周りの人たちにそれを伝えていきたいと思っています。

2017年 第37回追悼式にて

江戸川区原爆犠牲者 追悼式にあたって

都立小岩高等学校 生徒会長 3年 細矢昇生

私たちは江戸川区の原爆犠牲者を追悼するため、ここに集まりました。原爆は一瞬にして多くの命を奪い、終戦後も放射能の害によって被爆者が犠牲になってきました。ここに私は心から原爆犠牲者を悼みます。

私は「にんげんをかえせ」というDVDを見ました。そこには、原爆の被害



にあった広島と長崎の映像がありました。街は跡形もなく真っ黒になっていました。その中には子供を抱えたまま丸焦げになってしまった親子がいて、その写真を見たときは心を打たれました。目を背けたくなるような傷跡を負った人々が映っていて、絵でしか見たことのないような傷が痛々しくリアルに映し出されていたのです。ですが、ここでしっかりと目に焼き付けなければ原爆の恐ろしさを知ることができないと思います、最後まで見ました。

今まで、お話や本でしか触れることがなかったので、原爆のことはあまり想像もできませんでした。このDVDを見て初めて実感することができたのです。原爆の恐ろしさ、戦争の残酷さを。

今年で被爆70年を迎えます。すでに多くの被爆者は亡くなり、残る被爆者もみなさん高齢になられています。直接には戦争を知らない私たちがこれからは次の世代へと伝えていかなければいけません。

原爆が投下されたのは、1945年の8月でした。6日に広島に、9日に長崎に。そして15日には

終戦を迎えています。もし、あと一週間早く戦争が終わっていたら長崎は…、もし、あと10日間早く戦争が終わっていたら広島が…、いえ、そもそも戦争を始めていなければ、すべての人が…。

そう思っても過去は変わりません。しかし、未来は変えられます。こうして今私たちは平和に毎日をご過ごしているではありませんか。この平和はたくさん犠牲者の上に成り立っています。そして辛い過去を話してください、二度と戦争をしてほしくないという強い願いを伝えてくれた方々のために、そして私たち、後世のためにも、この戦争や、いろんな思いを伝えていかななくてはいけないのです。二度と同じことを繰り返さないために、私たちに何ができるのかを考え行動に移していこうと思います。

2015年 第35回追悼式にて



広島修学旅行で

学んだこと

春江中学校三年 馬場 葵

私たち春江中学校の三年生は、5月の修学旅行で広島に行くことになりました。それに向けての事前学習として、江戸川区原爆被害者の会の方々に被爆体験講話をして頂いたり、原爆の子の像に献納する折り鶴を折ったりしました。

被爆体験講話では、原爆の子の像のモデルである佐々木禎子さんについてのお話を上演していただきました。私は、プロジェクトに映し出される写真に合わせてナレーションをしました。ナレーションをするにあたって事前にもらった原稿を何度も何度も繰り返し読みました。最初に眼を通し

そして、5月14日、私たち広島に向けて出発しました。広島に行く新幹線の中は、修学旅行が始まったウキウキワクワクとした楽しい雰囲気が流れていました。しかし、広島に着き実際に原爆ドームを見たその瞬間、今までの雰囲気は一瞬にして無くなりました。むき出しになってしまった鉄骨や崩れたままの壁は、原爆が落ちた8月6日のあの日の悲痛さを伝えていました。原爆ドームの上に広がる青く晴れた空。それを見て―原爆が落ちた8月6日のあの日もこんなにきれいに晴れていて、この後原爆が落ちるなんて誰も予測していなくて。太陽の光に照らされて明るい広島町の町は、午前8時15分に強い光に包まれた後、火の海が広がって。広島の人々を恐怖の底につき落としました。―と思います、今まで事前学習で学んだ事実が心に強くつきささりました。原爆が発した時の強い光や爆風の音、逃げまどう人々の声が聞こえてくるようで、今までの人生では感じたことのない胸の痛みを感じました。

原爆ドームを見た後には、原爆の子の像の前に行き、折り鶴の献納をし黙祷をしました。原爆の子の

たときは、原爆の放射能による白血病の悲しい事実が生々しく伝わってきて、とても胸がくるしく締めつけられました。読む回数が増えるにつれて、主人公の佐々木禎子さんに感情移入して読むようになりしました。そうすると、白血病で苦しい思いをしながらも家族に心配をかけまいとする禎子さんの強さが伝わってきました。この事前に感じた感情をみんなにも伝えられるようなナレーションを心がけて読みました。

原爆の子に献納する折り鶴は、総合の時間を使得って学年全員で折りました。鶴を折るのが苦手な人も、まわりの人に教えてもらいながら折っていました。折れる人だけが折るのではなく、全員で折るからこそ、一人ひとりが被爆者の方々への追悼の気持ちを持って広島へ行けたのだと思います。その後、学年全員で折った折り鶴は、学年代表の人たちの手で一枚のパネルになりました。そのパネルには、鶴で書かれた『祈・平和 江戸川春江』の文字。その文字は、平和を祈る私たちの思いが一つになり、平和への一歩を踏み出す力を持っているようでした。



像の内部には銅鐸を模した鐘がつけられており、私は黙祷の間その鐘を鳴らすことになりました。先生の『黙祷』という言葉聞いて鐘を鳴らすと、青い空に鐘の音が響きました。その響きと共に、私たちの平和への祈りが伝わっていくような感じがしました。1958年5月5日に像が建てられて以来、多くの人が平和を祈り鳴らしたあの鐘はとても重みがありました。

その次に平和記念資料館で被爆者の方の講話を聞き、原爆に関する展示を見ました。被爆者の方から聞くお話は、今まで聞いた話の中でも一番怖かったです。耳をふさぎたくなるような悲痛なお話でした。お話を聞いた後は展示を見に行きました。私は、過激な内容を聞いて過呼吸になってしまいました、展示は怖くて見る事ができませんでした。70年以上たった今聞いても、ここまで恐ろしくつらい出来事を実際に体験された人たちは、私たちが想像する何百倍も何千倍も怖くつらかったのだと思います。

私たちは、江戸川区の中ではめずらしく修学旅行で広島に行きました。事前準備をふまえて実際

に広島で実物を見ることでしか感じることでできない、原爆の恐ろしさ。今回、それを目で見て、耳で聴いて、感じる事ができました。被爆者の方々が少なくなってきた今、若い世代の私たちが語り継いでいかなければいけないと思います。その話はとてもつらく、悲しく、恐ろしいものです。しかし、戦争の記憶・原爆の記憶を、被爆者の方々の苦しみや平和への祈りを風化させないために。だから私は、この追悼式に参加し、平和への祈りをさせていただきます。

2017年 第37回追悼式にて



命を大切に

瑞江第三中学校

直井愛佳

皆さんは広島平和公園に行つたことがありますか？ 私は実際に行つてきました。

広島平和公園は、原爆死没者慰霊と世界恒久平和を願つて作られました。平和公園には、死没者慰霊碑、平和の灯、広島平和記念碑、原爆ドームがあります。私は母の故郷である福岡へ車で行く時に、広島平和記念公園に寄りました。

まず、当時の様子のまま残されている原爆ドームに驚きました。だけど、今は観光名所の一つだったり、原爆ドームの周りにはマンションなどが建ち並び、今風の街並みの中にある原爆ドームに違

和感や複雑な気持ちを持ちました。

まず、原爆資料館に行きました。資料館には、被爆した人々の写真や、被爆しボロボロになった洋服や持ち物が多く展示されていました。

その中でも一番見るのが辛かったものは、小さい子供の写真です。皮膚がただれたり、泣き顔の顔だったり、見れば見るほど苦しくなりました。

大事な人を亡くしたり、日本のために命を捧げたり、今では考えられないものばかりで、今ある何気ない日常も当たり前ではないんだと感じました。

関係ない人々を巻き込み、日常を奪った戦争は許せないし、絶対にやってはいけないと思ひました。

次に「原爆の子の像」を見ました。「原爆の子の像」には平和な未来への夢を託している意味があります。そこには、全国から引き寄せられたたくさんの千羽鶴が飾ってありました。千羽鶴がたくさん飾られている理由は、「サダコと折り鶴」というお話が関係してきます。

禎子さんは2歳の時に被爆し、10年後の12歳の

時に白血病を発症しました。被爆したことが原因です。苦しい思いをしながらも、なお、前を向いて生きた禎子さんを尊敬したいと思いました。

次に祖父から聞いた話です。私の母方の曾祖父母は、昭和20年ごろ福岡の小倉という場所に住んでいました。8月6日に広島、8月9日に長崎に原爆が落とされましたが、本当は9日は長崎ではなく小倉に落とす予定だったらしいです。だけど、天候不良で変更されたとのことでした。

もし、8月9日に長崎ではなく小倉に原爆が落とされていたら、曾祖父母は被爆して亡くなっていただろうと祖父が話していました。そうなる私はこの世に生まれていなかったということになります。私はこの話を聞いた時はとてもショックを受けました。戦争は自分に関係ないと思ひたけど、とても自分に身近なものであったと知りました。

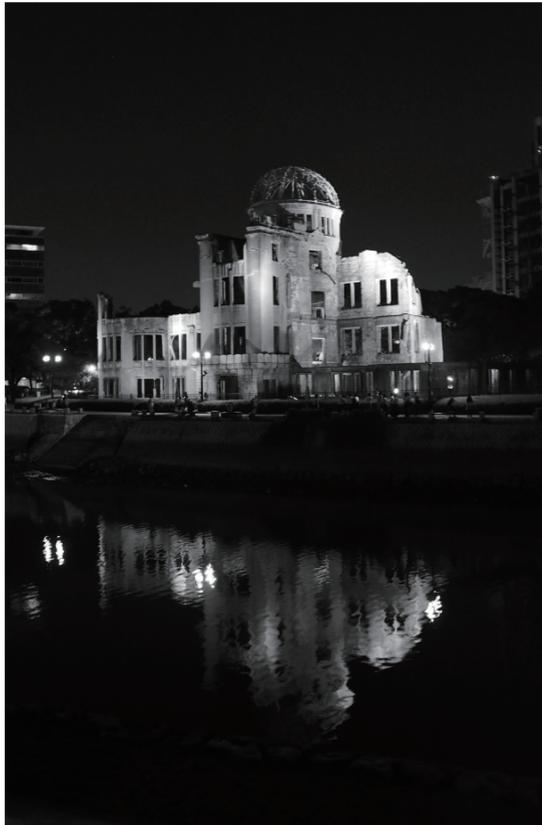
今回、私は「命を大切に」というテーマで調べましたが、戦争の恐ろしさ、平和のありがたさ、尊さを改めて感じました。また、被害にあった人々の無念さも感じられました。



不謹慎な言い方になるけれど、たまたま今私が生きています。同じようにたまたま命を失った人々も大勢います。だからこそ私は、その人の無念さを忘れずに生きていかなければならない、今ある命を大切にしなければなりません。だから、戦争は絶対にダメなんだと強く思いました。

世界に目を向けると、今この瞬間もどこかで紛争や戦争など争いが起きています。紛争地帯で暮らす子供たちは、4億6800万人もいると言われ、5分に1人紛争によって亡くなっています。家族を失ったり、住む場所を追われたりしています。そんな子供たちを救うために、私たちができる事はまず、どんなことが世界で今起きているのかを知る事です。テレビやニュースで情報を得たり、家族や友達と話題にしたりすることが大切だと思います。

2024年 第44回追悼式にて



静かな元安川の水面に浮かぶ原爆ドーム
(徳能 一馬／撮影)

互いを脅かさな

世界へ

江戸川区立北小岩小学校
6年1組 片山悠那

私たちは6年生になり、社会科の授業で、憲法や歴史の勉強をしています。憲法の勉強が終わった後で、先生がみんなに、「憲法の3原則が一番大事だと思うことは何ですか？」という問題を出されました。

先生は、「民主権」という答えが一番多いかな。」と書いていたそうです。

ところが、うちのクラスの人のほとんどが「平和主義」と答えていました。私もそうです。中には、今世界で起きている戦争のことを考えた人もいるようですが、私はとにかく「平和が一番」と考えたの

さです。

でも一方で先生は、「その絆の強さが、戦争につながっている。」とも話されていました。仲間を守るためには、他の集団を殺してしまうという恐ろしい人間の隠された本能があるというのです。

私達の学校では秋に音楽会があります。私達はそこで、「平和の鐘」という歌を歌います。その中の歌詞に、「脅かすことでしか、守ることができない」というフレーズがあります。

仲間を守るために、原爆を落としたり、原爆をたくさん持つことで、自分の国の強さを誇ったりという人間のおろかさには怒りを感じます。

今私達のクラスや、学校にはたくさんの日本以外の国にルーツを持つ友だちがいます。ルーツは違っても私達は本当の友だち同士です。世界の国々が違いを超えて、互いを脅かさずに、仲良く

2023年 第43回追悼式にて

です。

そんな中で、平和学習を体験しました。山本会長の話の中で、家が柱を残して全て破壊されたことには驚きましたが、原爆で全てのもものがなくなり、原爆投下後も食べるものがなくなっただけというのは、食べるものの大好きな私にはショックでした。

また、次に話された、高比良さんのお話も印象的でした。私たちは、お話を伺ったあと、互いの思いをタブレットの中の Teams というアプリで伝え合いました。その中にこんな友だちの文章がありました。

「悲しい話でしたが、2人目の高比良さんの話の終わりの方では、悲しみだけでなく、怒りの感情も伝わってきました。僕たちにはまだどうにもできませんが、どうかできると分かっていたら、それをすぐに実行して、原爆、戦争をとめていきたいです。」

私も本当にそうだと思います。やはり歴史の学習で、肉体的に弱い人間が、地球上で一番栄えたのは「絆」が強かったからだと習いました。自分を犠牲にしても、家族や仲間を守る人間の素晴らし



こころで
ホットコラム

菊太楼の江戸川人情

江戸川区南葛西在住の噺家、古今亭菊太楼です。

今年の二月に八十六歳になった私の義理の母も江戸川区に住んでるんですが、この母が大変に元気なんです。その元気の秘訣はきっと、近所の同年代の友達との散歩と、江戸川区の健康麻雀だと思っんです。

散歩は糖尿病になったということがきっかけなんです。毎日一万歩を目標に歩いているんです。最近ではお医者さんに「食の制限も薬も大丈夫でしょう」と言われたそうです。治っちゃったんです。歩くってことは本当に体にいいんですね。それと麻雀も、手先の運動をすることで脳に刺激を与え認知症の予防にもなることで知られています。同年代の方達とお菓子を食べながら卓を囲むことで会話も弾み、私の落語会の宣伝もしてくれているんです。そのおかげで母の友達も最近落語会にひんぱんに通って来てくれております。健康麻雀は、当人はもちろん、私にとってもいいことになっておりますよ。皆さんも是非。

(大橋美枝子ニュース2024年5月号よりお借りしました)



鳩になつて第6集発刊に寄せて

日本被団協事務局長代行
(東友会業務執行理事)

濱住 治郎

「鳩になつて」第6集の発刊を心からお慶び申し上げます。

1982年に第1集が発刊されて、不定期に5集まで発刊され、今回はあたらしく聞き取りをした被爆体験を中心に子供たちの声も収録されたということです。また、第1集から6集までをデジタル化し電子書籍として残していくことも計画されていると聞きました。

今年是被爆80年の節目の年にあたります。被爆体験集の発刊と共に、体験のDVD化を進めておられ、8月には丸木美術館の「原爆の図」の原寸大(レプリカ)の展示も予定されており、被爆80年にふさわしい取り組みに心から敬意を表します。

★★★

昨年暮れに、ノルウェー・オスロで日本被団協がノーベル平和賞を授賞いたしました。

受賞理由は、核兵器のない世界を実現するためには、核兵器を二度と使つてはいけないということを、「証言」によって示してきた。核兵器の使用は道徳的に容認できないという強力な規範、「核のタブー」が形成されていったこと。そして核兵器が80年近く使われなかったという、勇気づけられる事実、それを認めたいと願っている。この「核のタブー」が揺らぎつつある今だからこそ、被爆者の声が必要だというものでした。

ノーベル委員会のフリードネス委員長は授賞スピーチで、「身体的な苦痛や辛い記憶にもかかわらず、自らの体験を生かして平和への希望に尽力することを選んだすべての被爆者の方々を称えたい。また、すでにお亡くなりになったすべての被爆者の方にも敬意を表します」と述べました。

これまで、地域で積み重ねてこられた多くのみなさま一人一人に捧げられた賞だと言えます。そしてまたこうも。

「被爆者は『核のタブー』を築きあげるのに、他に類を見ない貢献をした。『個人的な体験談が、歴史を人間的なものにする』。そこにいた人たち(原爆を体験した人)と、歴史の暴力にふれていない私たち(一般の



人々)との橋渡し、その距離を縮めてくれる。あなた方は決してあきらめませんでした。あなた方は抵抗しつづける力の象徴。あなた方は世界が必要としている光なのです」と。

江戸川区原爆被害者の会(親江会)のみなさんが、第1集から6集まで「被爆体験の手記」の発行を続けてこられた意味はここにあるように思います。

また、フリードネス委員長は「記憶」について、次のように述べています。

「個人的にも、共同体としても、トラウマや暴力の歴史をどのように記憶するかによつて、社会が前に進むか、あるいは過去にとらわれたままであるのか、それがどのような形で起きるかが決定されます。忘れないことは、わたしたちの義務でもあります。次の世代に体験談や記憶を語り継ぐことはわたしたちの責任なのです」と。

私たち被爆者は、1956年の日本被団協結成以来、私たちの体験した地獄を子や孫、世界の誰にも味わわせたくないと「ふたたび被爆者をつくるな、核兵器をなくせ」と今日まであきらめることなく国の内外で訴えてきました。「戦争の被害は国民が受忍(がまん)しなければならぬ」との主張に抗つて、



「原爆被害は戦争を開始し遂行した国によつて償われなければならない」「そして、

「核兵器は極めて非人道的な兵器であり人類と共存させてはならない。すみやかに廃絶しなければならない」

という二つの運動を進めてきました。

2017年に国連で122か国の賛成で核兵器禁止条約が採択、2021年に発効したことにより、国際法上、核兵器はいかなる場合も違法とする悲願の条約ができました。核兵器禁止条約は、核被害者の援助や環境の回復についても言及しています。しかし、核抑止、核の傘に頼る日本政府は署名も批准もしていません。

私たちの二大要求はどちらも道半ばですが、わたしたち被爆者はあきらめません。核兵器禁止条約を育て広げていきましょう。これからも証言の場で核兵器の非人道性を語り継いで、戦争も核兵器もない世界を求めていきましょう。

2025年5月10日

ノーベル平和賞受賞

2024年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しました。被団協は親江会の上部組織であり、ノーベル平和賞は、親江会の平和活動が世界に認められたということでもあります。その授賞式における、被団協の代表委員・田中熙巳さんのスピーチ全文を紹介いたします。

国王ならびに王妃両陛下、皇太子・皇太子妃両殿下、ノルウェー・ノーベル委員会の皆さん、ご列席の皆さん、核兵器廃絶をめざしてたたかう世界の友人の皆さん、ただいま紹介いただきました日本被団協の代表委員のひとりであり、田中熙巳でございます。本日は受賞者「日本被団協」を代表してごあいさつをする機会を頂きありがとうございます。

私たちは1956年8月に「原水爆被害者団体協議会（日本被団協）」を結成しました。生きながらえた原爆被害者は歴史上未曾有の非人道的な被害をふたたび繰り返すことのないようにと、二つの

歳の時に爆心地から東に3キロ余り離れた自宅において被爆しました。1945年8月9日、爆撃機1機の爆音が突然聞こえるとまもなく、真っ白光で体が包まれました。その光に驚愕し2階から階下にかけておりました。

目と耳をふさいで伏せた直後に強烈な衝撃波が通り抜けて行きました。その後の記憶はなく、気がついた時には大きなガラス戸が私の体の上に覆いかぶさっていました。しかし、ガラスが一枚も割れていなかったこと、これは私は奇跡というほかありません。ほぼ無傷で助かりました。長崎原爆の惨状をつぶさに見たのは3日後、爆心地帯に住んでいたふたりの伯母の安否を尋ねるために訪れた時です。わたしと母は小高い山を迂回し、峠にたどり着き、眼下を見下ろして愕然といたしました。3キロ余り先の港まで、黒く焼き尽くされた廃墟が広がっていました。煉瓦造りの東洋一を誇った大きな教会・浦上天天堂は崩れ落ち、見るかげもありませんでした。麓に降りていく道筋の家はすべて焼け落ち、その周りに遺体が放置され、あるいは大げがや大やけどを負いながら、なお生きている人々

基本要求を掲げて運動を展開してまいりました。一つは、日本政府の「戦争の被害は国民が受忍しなければならぬ」との主張に抗い、原爆被害は戦争を開始し遂行した国によって償われなければならないという私たちの運動であります。

二つ目は、核兵器は極めて非人道的な殺りく兵器であり、人類とは共存させてはならない、すみやかに廃絶しなければならない、という運動であります。

この運動は「核のタブー」の形成に大きな役割を果たしたことは間違いありません。しかし、今日、依然として1万2000発の核弾頭が地球上に存在し、4000発近くの核弾頭が即座に発射可能に配備がされています。そのなかで、ウクライナ戦争における核超大国のロシアによる核の威嚇、また、パレスチナ自治区ガザ地区に対しイスラエルが執拗に攻撃を加える中で核兵器の使用を口にする閣僚が現れるなど、市民の犠牲に加えて「核のタブー」が壊されようとしていることに限りない悔しさと憤りを覚えます。

私は長崎原爆の被爆者のひとりであります。13

が、誰からの救援もなく放置されておりました。私はほとんど無感動になり、人間らしい心も閉ざし、ただひたすら目的地に向かうだけでありました。

ひとりの伯母は爆心地から400mの自宅の焼け跡に、大学生の孫とともに黒焦げの死体で転がっておりました。もうひとりの伯母の家は倒壊し、木材の山になっていました。祖父は全身大やけどで瀕死の状態でした。伯母は大やけどで私たちが到着する直前に亡くなり、私たちの手で野原で茶毘にふしました。

ほとんど無傷だった伯父は救援を求めてその場を離れていましたが、救援先で倒れ、高熱で1週間ほどで苦しみ亡くなったそうです。1発の原子爆弾は私の身内5人を無残な姿に変え一挙に命を奪いました。その時目にした人々の死にざまは、人間の死とはとても言えないありさまでした。誰からの手当ても受けることなく苦しんでいる人々が何十人何百人といました。たとえ戦争といえどもこんな殺し方、こんな傷つけ方をしてはいけないと、私はそのとき、強く感じたものであります。長崎原

爆は上空600メートルで爆発し、放出したエネルギーの50%は衝撃波として家屋を押しつぶし、35%は熱線として屋外の人々に大やけどを負わせ、倒壊した家屋のいたるところに火をつけました。多くの人が家屋に押しつぶされたまま焼き殺されていきました。残りの15%は中性子線やガンマ線などの放射線として人体を貫き内部から破壊し、死に至らせ、また原爆症の原因を作りました。

その年の末まで広島、長崎の死者の数は、広島が14万人前後、長崎が7万人前後とされています。原爆を被爆しけがを負い、放射線に被ばくし生存していた人々は40万人あまりといえます。

生き残った被爆者たちは被爆後7年間、占領軍に沈黙を強いられました。さらに日本政府からも見放されました。被爆後の10年間、孤独と、病苦と生活苦、偏見と差別に耐え続けざるをえませんでした。

1954年3月1日、ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験によつて、日本の漁船が「死の灰」を被ばく、大きな事件になりました。中でも第五福竜丸の乗組員23人が全員が被ばくし、急性放射能症を患いました。

1968年になり、「原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律」というのを制定させました。これは、数種類の手当てを給付するということが経済的な援助を行いました。しかしそれは社会保障制度でありまして、国家補償はかたくなに拒まれたのであります。1985年、日本被団協は「原爆被害者調査」を実施しました。この調査で、原爆被害は、命、身体、心、暮らしにわたるすべての被害を加えるというものであります。

命を奪われ、身体にも心にも傷を負い、病気があふることや偏見から働くこともままならない実態が明らかになりました。この調査結果は、原爆被害者の基本求を強く裏付けるものとなりました。自分たちが体験した悲惨な苦しみを二度と、世界中の誰にも味わわせてはならないとの思いを強くいたしました。1994年12月、この2つの法律を合体した「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」が制定されました。しかし、何十万人という死者に対する補償はまったくなく、日本政府は一貫して国家補償を拒み、放射線被害に限定した対策

発症し、捕獲したマグロはすべて投棄されることになりました。この事件が契機となつて、原水爆実験禁止、原水爆反対運動が日本に始まりました。世界でも始まりました。燎原の火のように日本中に広がったのです。3000万を超える署名が結実し、1955年8月「原水爆禁止世界大会」が広島で開かれ、翌年の1956年、第2回世界大会が長崎で開かれました。

この運動に励まされて、大会に参加した原爆被害者によつて1956年8月10日「日本原水爆被害者団体協議会」が結成されたのであります。結成宣言で「自らを救うとともに、私たちの体験を通して人類の危機を救おう」との決意を表明したのであります。「核兵器の廃絶と原爆被害に対する国の補償」を求めて運動に立ち上がったのであります。運動の結果、1957年に「原子爆弾被爆者の医療に関する法律」が制定されます。しかし、その内容は、「被爆者健康手帳」を交付し、無料で健康診断を実施するという簡単なものであります。さらにもうひとつ、厚生大臣が原爆症と認定した疾病にかかった場合のみ、その医療費を支給するという

のみを今日まで続けております。もう一度繰り返します、原爆で亡くなった死者に対する償いは、日本政府はまったくしていないという事実をお知りいただきたいというふうに思います。これらの法律は、長い間、国籍に関わらず海外在住の原爆被爆者に対し、適用されていませんでしたが、日本で被爆し、母国に帰った韓国の被爆者や、戦後アメリカ、ブラジル、メキシコ、カナダ、このほかに移住した多くの被爆者は、被爆者特有の病気を抱えながら原爆被害への無理解に苦しみ、それぞれの国で結成された原爆被害者の会と私たちは連帯し、ある時は共同し、裁判など活動を通して国に訴え、国内とほぼ同様の援護が行われるようになってまいりました。

私たちは、核兵器のすみやかな廃絶を求めて、自国政府や核兵器保有国ほか諸国に要請運動を強めてまいりました。1977年、国連NGOの主催で「被爆の実相と被爆者の実情」に関する国際シンポジウムが日本で開催されました。原爆が人間に与える被害の実相を明らかにしました。このころ、ヨーロッパで核戦争の危機が高まり、各国で数十

万人の大集会が開かれました。これらの集会での証言に日本被団協に対する依頼が続いたのであります。1978年と1982年にニューヨーク国連本部で開かれた国連軍縮特別総会には、日本被団協の代表がそれぞれ40人近く参加し、総会議場での演説のほか、証言活動を展開しました。核兵器不拡散条約の再検討会議とその準備委員会で、日本被団協代表は発言機会を確保し、あわせて再検討会議の期間中に、国連本部総会議場ロビーで原爆展を開き、大きな成果を上げました。

2012年、NPT再検討会議準備委員会でノルウェー政府が「核兵器の人的影響に関する会議」の開催を提案し、2013年から3回にわたる会議で原爆被害者の証言が重く受けとめられ、「核兵器禁止条約」交渉会議に発展いたしました。2016年4月、日本被団協が提案し、世界の原爆被害者が呼びかけた「核兵器の禁止・廃絶を求める国際署名」は大きく広がり、1370万を超える署名を国連に提出いたしました。その結果でもありますが、2017年7月7日に122か国の賛同をえて「核兵器禁止条約」が制定されたのであります。

協の活動記録などの保存に努めてきました、NPO法人の「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」の存在であります。

この会は結成されてから15年近く、粘り強く活動を進めて、被爆者たちの草の根の運動、証言や各地の被爆者団体の運動の記録などをアーカイブスとして保存、管理してまいりました。これらを外に向かつて活用する運動に大きく踏み出されることを期待いたします。私はこの会が行動を含んだ、実相の普及に全力を傾注する組織になってもらえるのではないかと期待しています。国内にとどまらず国際的な活動が大きく展開してくださることを強く願っています。世界中のみなさん、「核兵器禁止条約」のさらなる普遍化と核兵器廃絶の国際条約の締結を目指し、核兵器の非人道性を感性で受け止めることのできるような原爆体験の証言の場を各国で開いてください。とりわけ、核兵器国とそれらの同盟国の市民の中にしっかりと核兵器は人類と共存できない、共存させてはならないという信念が根付くこと、自国の政府の核政策を変えさせる力になることを私たちは願っております。人

す。これは私たちにとって大変大きな喜びでありました。

さて、核兵器の保有と使用を前提とする核抑止論ではなく、核兵器は一発たりとも持つてはいけないというのが原爆被害者の心からの願いであります。想像してみてください。直ちに発射できる核弾頭が4000発もあるということ。広島や長崎で起こったことの数百倍、数千倍の被害が直ちに現出することがあるということ。みなさんがいつ被害者になってもおかしくない、あるいは、加害者になるかもしれないという状況がございます。ですから、核兵器をなくしていくためにどうしたらいいか、世界中のみなさんと共に話し合い、求めていただきたいと思うのであります。原爆被害者の現在の平均年齢は85歳。10年先には直接の被爆体験者としての証言ができるのは数人になるかもしれせん。これからは、私たちがやってきた運動を、次の世代のみなさんが、工夫して築いていくことを期待しております。一つ大きな参考になるものがあります。それは、日本被団協と密接に協力して被団協運動の記録や被爆者の証言、各地の被団

類が核兵器で自滅することのないよう、そして、核兵器も戦争もない世界の間人社会を求めて共に頑張りましょう!! ありがとうございます。(著作権 © ノーベル財団、ストックホルム、2024年)



お元気な声でスピーチいただいた
田中熙巳さん(日本被団協より)

被爆80年 核兵器禁止条約に 参加する政府の実現を

丸 宗市

・核兵器禁止条約は世界の大きな流れ

2017年7月7日、核兵器禁止条約が国連で採択されました(122ヶ国賛成、反対・棄権各1)。そして2021年1月22日に国際法(署名批准それぞれ50ヶ国が発効の要件)として核兵器禁止条約が発効しました。それから4年、核保有国の妨害にも関わらず、核兵器禁止条約への署名は94ヶ国、批准は73ヶ国に広がっています(2024昨年9月に世界で4番目、イスラム圏で最大の人口を持つインドネシアの条約が参加)。すでに3回、締約国会議(締約国とオブザーバー参加国)が開催され、「核兵器の廃絶や、被爆・核実験被害者の救済―国際信託基金の設立」、「核抑止」論に対する統一した批判の検討などが進められています。

・日本被団協のノーベル平和賞受賞

2024年12月に日本被団協がノーベル平和賞

諸国が核兵器を取得する準備を進めています。現在進行中の戦争では、核兵器使用の脅迫が行われています。

唯一の戦争被爆国である日本政府はこの条約に参加しないばかりか、被団協が要請した第3回締約国会議(2025年3月3日〜7日開催)へのオブザーバー参加すら拒否しました。石破政権は、日米同盟強化などアメリカとともに戦争する道に突き進めようとしています。「核」対「核」、「軍事」対「軍事」では平和は望めません。トランプ政権のもと情勢の不透明さが増し、「核抑止」に依存する傾向も強まっています。

しかし、①「核抑止」論は、ヒロシマ、ナガサキの再現を前提にしているという点で人道的に認められないというだけでなく、②安全保障上からも抑止の限界(抑止は必ず崩れる―その時にどういう危険があるのか―核兵器は廃絶の道しかない)という意見の拡がりです。

・国民的な運動で核兵器禁止条約に

参加する日本の実現を

核兵器使用と核実験被害の実相に対する国際的

を受賞しました。ノーベル平和委員会は、「広島と長崎の原爆生存者による核兵器のない世界を達成する努力、また目撃証言を通して核兵器が二度と使われてはならないことを示してきたこと」「被爆証言は核の使用は道徳的に容認できない―悪の烙印―核のタブー」を作り出し、「過去80年近く一発の核兵器も戦争で使用されていない事実に貢献」を受賞決定の理由に挙げています。被爆者をはじめ日本と世界は、大きな喜びと確信に包まれました。「核兵器がもたらす壊滅的な人道的影響に対する世界的な認識が高まり続けていることを示すものであり、この困難な時期でも希望の光」(第3回締約国会議―中満泉国連事務次長の発言)

被団協の一員として、江戸川区内では親江会を中心に、原爆犠牲者追悼碑の建立と追悼式の開催、戦争展、平和コンサート・出前授業(サダコの4675日の作成と朗読、リトルボーイの展示等)、平和行進、6・9署名行動などを通して被爆の実相普及や世代継承に取り組んできました。

・核廃絶に逆行する流れと「核抑止」論の二重の誤り

核大国は、保有核兵器を現代化・改良し、新たな

な関心は大いに高まっています。ノーベル賞の受賞は大きな追い風です。核兵器禁止条約に日本の政府が参加しないことの異常さは際立っています。唯一の被爆国である日本の政府が核兵器禁止条約に参加すれば、世界の核兵器廃絶の取り組みは大きく変わります。被爆80年という節目の年、

- ① 政府に対して「核兵器禁止条約に参加を呼びかける署名」を集めましょう。
- ② 第45回原爆犠牲者追悼式を多くの区民の参加で成功させましょう。
- ③ 国民平和大行進を成功させ、区民に核兵器廃絶をアピールしていきましょう。
- ④ 原爆展(8月5日〜10日)戦争展(9月14日〜15日)を成功させましょう。
- ⑤ 第70回原水爆禁止世界大会を多くの区民の参加で成功させましょう。
- ⑥ 平和コンサート、出前授業など平和の取り組みを区内に広げましょう。

こうした取り組みを大いに広げ、区民世論を変え、都や国を変えていきましょう。

あの時、何が起きていたのか？

—東京電力福島第二原子力発電所の
大事故から14年—

小田 美智子

■はじめに

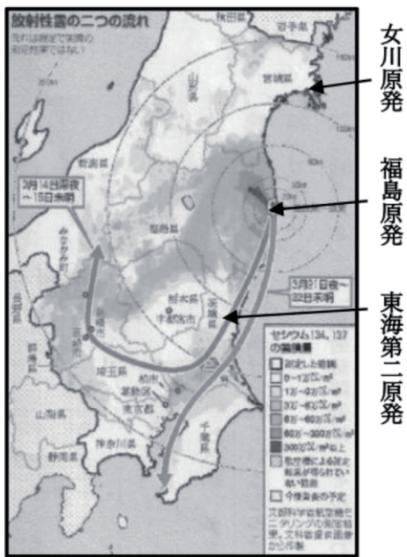
—大量の放射能が降ったフクイチ事故！

今から14年前、2011年3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震によって、東京電力福島第一原子力発電所（以下、フクイチ）が事故を起こし、大量の放射能が漏出し、日本だけでなく、地球の北半球にまで拡散してしまいました。あろうことかヒロシマ・ナガサキの国が、放射能被ばくの加害国となつてしまいました。

この地震によるフクイチの震度は7でした。地震に続いて起きた津波も巨大で、全体で2万2000人以上の方が亡くなり、25000人もの方が行方不明になっています。1ヶ月後に、大熊町で見つかった千の遺体もありました。

フクイチは地震により自動停止したものの、50

「放射性雲の二つの流れ」（朝日新聞 2011年10月24日より）



「放射性雲の二つの流れ」
朝日新聞（2011年10月24日）

■この時、何が起きていたのか？

地震が起きたとき、福島原発10基のうちフクイチの1、2、3号機は、稼働中でしたが直ちに自動的に停止し、4、5、6号機は、定期検査中で停止中とされていました。

しかし、防衛省が上空から撮影した4号機の写

分後に大津波に襲われ、すべての電源を失ってしまいました。それにより、4基の原発が連続してメルトダウンするという、世界でも初めての悲惨事が起きたのです。

そのフクイチ事故で、どれくらいの放射能が放出されたのか調べてみると、研究者によって大きく違うことがわかりました。最小は政府発表で、最大は山田耕作氏*1らで、この2例を比較します。

広島型原発のセシウム137の量で比べると、政府発表は168発分、山田耕作氏らは、

*2 大気中へ	597発分
汚染水中へ	3101発分
直接海中へ	461発分
放出総量との比	4158発分

と、その差は24倍でした。政府発表は大気中だけです。汚染水にこれほど大量の放射能が含まれていることに驚かされます。

国内でのフクイチ事故の大量の放射能の流れは図のように、3月15日(右の線)と3月21日(左の線)の2回あつたとされています。

真では、原子炉に核燃料が入っていたことがわかります。インターネット内では、「おかしい」という声があがりましたが、東電はまだにこのことを認めていません。

そして3月12日、地震の翌日に1号機が爆発、3月14日には3号機が、15日には建屋には変化がなのまま、2号機の格納容器や圧力容器が破損、4号機も爆発が起きたようで、ぼろぼろになりました。原発の爆発は多くの人々に衝撃を与えました。

そして、フクイチ事故は、4月10日、深刻さを表す国際基準に基づく評価で最高値の「レベル7」深刻な事故」と判断されました。

また3月21日、3号機の圧力容器と格納容器が壊れ、3月15日を超えるほどの放射能がまき散らされていたことが、6月25日に公表された『2011年3月20日、隠蔽された3号機格納容器内爆発』*3で明らかにされています。

東電はこの事故のことを認めていないようですが、降下した放射能の量が示しているといえます。

■なぜ、事故は防げなかったのか？

東電は事故の原因について、裁判などで「想定外の津波だった」と説明していますが、果たして本当に「想定外」だったのでしょうか？

『原発と大津波警告を葬った人々』*4には、警告を葬った人々は東電の他、政府の原子力安全保安院や資源エネルギー庁、さらには地震学会、電事連なども、まるで東電が「お上」であるかのように振舞い、津波の警告をつぶしていたことが書かれています。

フクイチ1号機で、1966年に出した設置許可申請書には、津波の高さを3.1メートルとしています。その後、貞観津波(869年)の堆積物が仙台平野で見つかったり、阪神・淡路大震災が起きたり、インドのマドラス原発が遠くの津波の影響を受けて被害を受けたりしました。

これらの出来事をきっかけに、東電は想定していた津波の高さを3.5メートル、4.8メートル、5.7メートルに、事故の3年前の2008年には15.7メートルに上げていました。

方を、極力その社会に役に立てたいという気持ちでこの会に参加してきたわけでありませうけれども、このような分科会の有様では、このままここに留まっても、私は社会に対する責任が果たせないと感じます」

「最後の段階になって、私はこの分科会の正体と言いますか本性と言いますか、それもよく分かりました。さらに、日本の原子力安全行政というものが、どういふものであるかと言ふことも改めてよく分かりました」

石橋委員が言った、「原子力安全行政の本性」とは、「原子力安全委員会事務局が、東電と1990年後半から、「原発への影響を限定的にするため」に念入りに意見のすり合わせを進めていた」ということです。

さらに、1992年に安全委が東電と関電に「作文」を指示し、「全電源喪失事故は考えなくてもいい」とした東電案が採用され、指針改定を見送った*5経緯があります。

つまり、東電は想定外の津波が起こりうることも、その時に全電源喪失することも予想していた

しかし、これらは内規で津波の高さを変えただけで、2000年には国内でフクイチが最も津波に余裕のないことを電気事業連合会が報告しています。

同書*4には、2006年の政府の原発耐震改訂委員会の最終日の会議中に、石橋克彦委員(神戸大学教授)が辞任のため退席した理由が、次のように説明されています。



1号機の爆発の瞬間(右議)と爆発後(左)
爆発：YouTube2011・3・12、爆発後：ブログ：原子力緊急事態宣言

ということになります。

しかし、いつ起きるか分からない津波対策に数百億の金は出せず、先延ばしにしていたとも考えられます。もし、全電源喪失事故が指針に取り入れられていたら、3・11フクイチ事故は起きていなかった可能性もあります。女川原発は津波を考え、フクイチよりも1.5倍高い敷地に建設し、東海第二原発は津波対策をした非常用ディーゼル発電機が生きていて無事でした。

■国にはフクイチ事故の責任がある！

フクイチで被災した人々が、原告となって国の政策を訴えた裁判が約30あります。それまでは原告勝訴が続いていたところ、2022年6月17日、生業(福島)・群馬・千葉・愛媛の4訴訟で、最高裁は驚くような判決を出しました。

「想定を超える規模の津波が来たので、たとえ国が事故前の予測に基づいて東京電力に対策を取らせていたとしても、事故の発生を防ぐことが出来なかった可能性が高い。だから国に責任はない」*6

それに対して、海渡雄一弁護士は、「まったく事実と反している。めちやくちやな判決」と怒りをあらわしています。同書*4には、この呆れた判決を出した最高裁と国、巨大大法律事務所(弁護士500人以上)と企業がまるで「回転ドア」(人材が官公庁と民間企業の間で流動的に出入りする仕組み)のような関係にあると書かれています。このような裁判では公正さが保たれない心配があります。

■安全な被ばく線量は、ゼロ！

文科省はフクイチ事故後の4月19日に、子どもたちの「暫定の被ばく線量」としてICRP(国際放射線防護委員会)勧告に基づいて、年に20ミリシーベルトとすることを通知しました。しかし、これは暫定値だったはずなのに、その後、基準値とされて現在まで変更されていません。

胎児にも子どもにも20ミリシーベルトを押し付けるのは人権侵害ではないかと、抗議の声を上げる人々がたくさんいました。国連人権委員会は2013年6月来日し、「1ミリシーベルト以上の被

ばく

さらには、20ミリシーベルトというのは、原発作業員の方々や放射線管理区域と同じ基準です。そのような場所では、飲み食いや排泄をすることはできません。つまり、人が暮らせない場所ということです。

南相馬市の有志808人は、「次に、どこかで原発事故が起つたら、この『20ミリシーベルト』が適用されてしまう。そうはさせたくない」と考えて提訴しました。しかし、6年間の闘いは2021年7月、東京地裁で却下。原告の思いはかたがたではありませんでした。

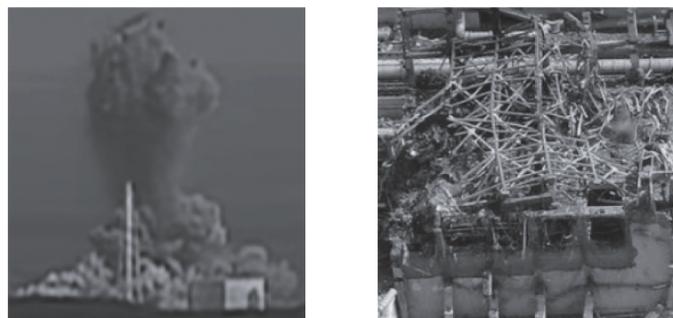
被ばくによる健康への影響は、事故の翌年から周産期死亡率が千葉、東京、埼玉で急上昇、福島県民の急性心筋梗塞が全国トップになるなど様々な病気が増加しています。*8

小児甲状腺がんはフクイチ事故前の100万人に1人程度から、現在(2024年11月)387人が発症し、100万人当たりになると2600人に相当する状況ですが政府は、「小児甲状腺がんはフクイチとは関係ない。超音波健診によって隠

ばくは許されない」として20ミリシーベルトの基準での帰還政策を批判しました。

しかし、原子力規制委員会は、「年に20ミリシーベルト以下は健康に影響がない」として政策を強引に進めました。

フクイチ事故の翌年、放射線影響研究所(日米共同研究機関)が出した原爆被爆者の寿命調査第14報では、「安全な被ばく線量はゼロ」である、とされました。このデータは、原爆に遭いながら、生き残った約9万人の寿命調査の結果です。原爆の生存者の尊いデー



3号機の爆発(右)と爆発後(左)爆発：
日テレ 2021・1・27、爆発後：プログ原子力緊急事態宣言

れていた自然がんを発見しただけ」「チェルノブイリに比べ、放出された放射能は7分の1と非常に少ない」としてフクイチとの関係を否定しています。

現在、21万人の人々が「被爆者援護法」で原爆被爆者だと認定されています。1999年に起きた東海村臨界事故では、627人が1ミリシーベルトの基準で被ばく者と認定され、賠償されています。

なぜ、フクイチ事故だけ、1ミリではなく20ミリシーベルトという扱いを受けているのでしょうか？ また、汚染土壌の基準値も2023年6月より、100ベクレルから一気に80倍の8000ベクレルに「創作」されました。その土壌を全国にばら撒こうという政策もありますが実現していません。

■すべての日本人がヒバクシャに!!

2016年4月27日発行の『政府の帰還政策の恐るべき危険性を警告する』*9には、国のフクイチ

子被災者対策が書かれています。

例えば、「福島」の20ミリシーベルト以上の避難地域に、10万人を帰還させると何が起こるか」の項では、「ICRPのリスクモデルでも1万8千人〜4万5千人のがん死者が出る危険がある」としています。

また国は、「福島原発事故の人的被害想定について」は、「健康被害は予想されない」として、「がんも遺伝的影響の増加も、不妊、胎児への影響も心血管疾患なども、今後増加することは予想されない」としています。しかし、前述したように、既に健康への影響は発生しているのです。

さらに恐ろしいのは、フクイチ事故による「人的被害想定概算モデル」です。日本に住む1億2730万人が平均で0.8ミリシーベルト被ばくし、フクイチ事故で1ミリシーベルト被ばくする被害者は東北、関東を含め5730万人。チェルノブイリでは、強制移住となる年5ミリシーベルトを越える場所に230万人が暮らしていたとされています。計算上のモデルにしてもリアルで恐ろしいです。

の運転期間を40年から60年に延長し、新しく建て替えることも視野に入れました。フクイチ事故がまるでなかったかのように原発を推進しています。

原発は、「安くて安全でクリーン」なエネルギーとして造られました。実は、核兵器保有を狙っているのではないかと、という声すらあります。もし、世界唯一の被爆国と名乗りながら、核兵器保有国になりたいとするのであれば、重大な二重規範です。

2024年10月、日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞しました。「核廃絶」は、世界の大きな意思の一つです。そろそろ私たち市民の主権とは何なのかを公に問いなおすときではないでしょうか。

■最後にいいお話

「大キリン」と呼ばれるコンクリートポンプ車をポンとくくださったのが龍潤生(Abalance)株式会社代表取締役CEO(さん)です。日本に留学して、多

■「安全で、安くて、クリーン」全部ウソだった！

『見捨てられた初期被曝』*7では、被ばく行政に對し鋭い指摘がされています。例えば、

「福島県は除染や被ばく防護の負担を軽減できる新基準を創作しました。原子力安全委員会はそれを追認するだけでなく、科学的にはほとんど意味のない後付けの説明を加えました。さらに、厚生労働省の事務連絡により、避難・退避指示地域を除く住民については、測定すら必要ないとされ、被ばく被害の実態を把握する機会は失われました」など。

国などが創作した

「新基準」は、被ばくする国民を守るためではなく、政府の負担を軽くするためではないかと思える数字です。

2015年8月、川内原発再稼働。2017年には、原発



4号機の事故後 放水するポンプ車
ブログ：原子力緊急事態宣言

くの日本人に親切にしても、
らったのだそう、で、「恩返し
や貢献できるのが自分の価値」ともおっしゃっています。龍さん、有難うございました。

龍潤生さん
(日テレNEWS
2024年3月7日より)



*1『放射線被曝の争点』
緑風出版 2018年)

*2引用：「福島事故による放射能放出量はチェルノブイリの2倍以上」(論文)より。

*3(論文 Spaceofsharist)著

*4(岩波新書 添田孝史著)

*5(日経新聞 2012年6月5日より)

*6『東京電力の変節』旬報社 後藤秀則著

*7(岩波科学ライブラリー study2007著)

*8(放射能から子どもを守る企業と市民のネットワーク)2019年11月26日より)

*9(渡辺悦司・市民と科学者の内部被曝問題研究会会員著)

富岡町応急仮設住宅 慰問・激励・取材訪問

各々の集会所で行われた。前半の1時間は奥田会長の挨拶の後、広島・長崎の原爆投下、持参している被爆アオギリの苗の家系図を、プロジェクトで画像を映しながら説明。後半の1時間は町民の方々の対話。

親江会 奥田豊治会長

高比良毅 事務局長
貫 泰夫 事務局員

取材日時

2012年10月20日(土) 午後2時より
福島県郡山市南1丁目 162戸 参加者15名

同年10月22日(日) 午前10時より
郡山市緑ヶ丘東7丁目 148戸 参加者11名

同日 午後2時30分より
郡山市富田町若宮前 240戸 参加者20名

◆対話内容まとめ

※参加町民の平均年齢 65〜70歳

※3会場でもっとも飛び交った言葉：精神的損害額(慰謝料)10万円

「結婚を理由に10万円が打ち切られた」避難指示を受けていない男性との結婚。結婚後に福島県外に転居は打ち切りの基準」

※先に帰還した川内村などは帰還と同時に10万円は打ち切られた。

※3区域設定：帰還困難・居住制限・避難指示解除準備

※ほとんどの人が帰りたくない。

※ほとんどの人が仮設でなく、本格建築の仮の町を

◆東日本大震災と福島第一原発と富岡町

2011年		
3・11	14:46	地震発生 富岡町震度6強 (富岡町 地震津波による死者 91名)
	15:37~42	1~5号機 全交流電源喪失
	16:36	1~2号機 非常用炉心冷却装置注水不能
	17:00頃	燃料露出始まる
	18:00頃	炉心損傷開始 水素発生 建屋内線量急上昇 入室禁止
3・12	5:44	菅総理から10キロ圏外への避難指示 (行先・避難先の指示なく、現地任せ) 富岡町民15,600人は着の身着のままで、 2、3日で帰れると思ひ、川内村川内中学校に 避難。校庭には数百台の車が並んだ。
3・12	18:00	菅総理から20キロ圏外へ避難指令 富岡町民は川内村民とともに三春町へ
3・12	15:36	1号機水素爆発
3・15	6:00	4号機爆発 3号機発煙 2号機爆発
3・15	7:00	4号機変形、破壊
3・15	8:30	2号機白煙
3・15	9:30	4号機火災
3・17		富岡町民は郡山、三春町、田村市、大玉村へ 多目的展示ホール『ビッグパレットふくしま』に 仮富岡町役場、仮川内村役場設置
4・21		菅総理「ビッグパレット」慰問
7・26		皇太子夫妻「ビッグパレット」、 「南一丁目仮設住宅」慰問
8・31		ビッグパレット避難所閉鎖 ピーク時には2500人収容された
2012年		
1・23		「おだがいさまセンター」ビッグパレットから 富田町若宮前32応急仮設住宅敷地内に移転

望んでいる。

※住民が東北人独特の、寡黙でおとなしく、辛抱強くて粘り強い性格。それは長所でもあり短所でもある。立ち上がらなければならぬが、なかなか立ち上がれない。

※一時帰宅は時間が短く、帰宅しても何もできない。

※土いじりがしたい。

※線量をごまかしている。除染は困難だ。

※富岡高校は福島北・猪苗代・いわき明星・三島長陵の4つに分散させられた。

※郡山は川内村より線量は高い。(10月23日 午後5時現在)

◆富岡町応急仮設住宅を慰問・激励・取材して

2011年3月11日午後2時46分、富岡町は震度6強の地震と、15メートルを超える大津波に見舞われました。

富岡町は福島第一原発と第二原発に挟まれた町で

す。町民は、傷ついた自宅または避難所で一夜を明かした翌12日早朝午前5時44分、当時の菅総理大臣より、1万5600人の町民全員で、10キロ圏外への避難命令が発動されたのです。「原発は絶対大丈夫」という安全神話が浸透していて、日頃、避難訓練はおろか、避難のシミュレーションさえ存在していませんでした。

遠藤町長以下、町民一体となり、姉妹都市の埼玉県杉戸町の助けを借りながら、川内村の川内中学に避難しました。家も何もかも投げ捨てての避難は、見事な統一行動だったと思います。1万5600人もの一括避難は、考えるだけで身の毛がよだつほど、怖くて悲しい行動です。町民の方々はあちこちの一時避難所を経由し、仮設住宅などで落ち着かれたのは、今の時期ではないでしょうか。

避難を共にし、郡山市「ビッグパレットふくしま」に仮設場を設けた川内村は、今年1月、帰村宣言をしました。

2012年10月21日現在、全村民2835人のうち、週4日以上自宅に帰っている人は1059人

(福島県災害対策本部と文科省発表・NHK報道)

郡山市(合同庁舎)	0.50 uSv/h	58 km
福島市	0.73	61
いわき市	0.10	43
二本松市	0.477	56
川内村	0.131	22
楡葉町	0.240	14
南相馬市	0.32	24
広野町	0.153	23
飯舘村	0.775	40
葛尾村	4.717	23
双葉町	9.750	7.1
大熊町	4.417	4.5
浪江町	2.830	10.5
富岡町東風荘	3.801	6.7

(37・4%)。全村民帰村は実現していないようです。国は放射能漏れの地域を、①帰還困難区域(年間被曝線量50ミリシーベルト超え)、②居住制限区域(同20ミリシーベルト超え)、③避難指示解除準備区域(同20ミリシーベルト以下)の3地域に再編する方針です。

このように除染やインフラ整備を行い、5年後の平成17年を帰還時期としています。

3か所の町民の方々にヒアリングしましたが、ほぼ全員が、現状では帰らないと言っていました。理由は、国や東電への不信感が強く、戦時中の我々と同じように、「大本営発表」でなく「真実の報道」を求めています。「放射線量で区域を線引き」することはできなくても、「人の心を線引き」することはできないと痛感しました。

原発事故は、国民や地元民に難しいパズルを提示しました。解こうにも、なかなか解けない難問です。一朝一夕に解決する問題ではありません。今も出続けている放射線を止めることが先決ですが、根元は止めることが出来ません。にも拘らず東電・国は一日

も早く帰そうとする。さらに新たな事故や地震が発生すれば、二次避難が発生する。東電・国の加害者にとっては、人命より銭(ぜに)が優先しているようです。

放射線は憎らしく、悩ましい存在です。浜通りに原発がなかったら、福島県は宮城県や岩手県などと同日、東日本大震災被災地の1県にすぎず、今は復興の植音が高らかに鳴り響いていることでしょう。放射線被害という意味では、我々長崎・広島の被爆者ともつながっています。

我々の「被爆」は戦時の体験で、殺傷することが目的の「被爆」でした。福島原発の「被曝」は、広島・長崎とは「ばく」の字が違います。あつてはならない平時の「曝撃」です。

常日頃、メンテナンステナンスや点検を万全なものにし、天災に備えるべきもので、今回の事故は政府・東電の体質からして、起こるべくして起こった事故といえるでしょう。

東電は債務超過に陥っていて、普通の企業であれば、倒産・上場廃止です。今は政府とタグマツチで、責

テナンステナンスに注力すべきです。

燃料棒は全国で10万本、福島だけで1万本あると予想され(非公開)、これら燃料棒から長崎に落とされたプルトニウム爆弾が4800個、福島だけで5000個出るといふ、気の遠くなるほど怖い数字です。

郡山市は「合唱の町」と呼ばれ、駅前には「楽都」のポスターが目につきました。

富岡住民の一人は、「東電や政府はきつと、『原発事故が浜通りで良かった。浜通りの住民はおとなしくて騒ぎたてないから…』と言っているだろう」そう皮肉っていました。

今回訪問して感じたことは、今も放射線が出続けている状況下で、放射線に対して住民が無意識・無頓着になる日が近いのではないかと思います。福島県は無論のこと、他府県も早く仮の町を造成し、落ち着ける生活権・生活圏を確立することが第一だと感じました。

任回避を分け合っています。しかし、どっちみち、ツケは国民(税金・電力使用料)に回ります。

東電は先の資本増強で、実質国有化となりました。今後は、国がもつと前面に出て来て然るべきではないでしょうか。

本来なら、「あんな凶器はやめてしまえ」と言いそうな雰囲気、石原都知事も、第一原発から電力を頂戴している身ゆえ、日頃の歯に衣着せぬ発言も歯切れが悪い。いずれにしても狭い国土、お互いにシェアしなければ、この国は成り立たちません。

昔から福島県の地域を表す、浜通り・中通り・会津という呼び名は、響きも耳触りも良いネーミングでした。JR東北本線や東北縦貫道が津波被害の少ない中通りにあったのは幸いでしたが、被害の多い浜通りや、JR常磐線の分断はいつまで続くのか未だ見当がつかない状態です。浜通りに住む人々は、「浜通りは夏は涼しくて快適だった」と懐かしみますが、今は中通りに生活の拠点を移しています。

政府は、除染、廃炉技術の研究開発に全精力を注ぐべき。と同時に、既存原発の再稼働など考えず、メン

◆実際の対話内容……避難家族の心の叫び

● 建築関係の方：地震のときは、足場に立てなかった。縦揺れは40秒も続き、横揺れが2〜3分続いて、瓦が落ちてきた。これは危ないということで川内村(富岡町から15km)に避難した。(郡山〜富岡町は直線距離で57km)

● 富岡の自分の家は、海から遠く瓦は割れなかった。海近くの人は大変なところも多かった。高台はよかった。その点いわき市は大変だ。原発は40年以上経っているのに、台から立て直すべきだった。土台からやり直せば乗り越えたはず。自分は機械屋なので、言えることは、今はまだ放射能が出ていて治まっていけないので、除染しても一緒だ。(除染しても取り除いたことにならない)

● 国や町長は、5年後に除染をすと言っているが、立ち入り禁止を解除しているのか？ 帰っても水もない、作物も作れないじゃ避難しているほうが利口だ。

● 若い人は外に出て仕事をしている。立入禁止区域

内ではないので、若い人は帰らない。

● 除染で戻ったら10万円の支給は打ち切り。転居なら打ち切りなしというが、それでは帰らない。

● 支援してくれるのは、核分裂や放射能の影響がその区域にあるからで、甘い言葉で「除染」と誘ってくる。自分は、富岡町には帰れないし、帰らない。

● 原発による避難生活は、椅子の生活。(畳に)座れなくなつてしまった。仮設住宅でも南一丁目は二重サッシなのでいい方。しかし商店まで自転車ですぐ8分かかるし、バスは少ない。

● 放射能汚染は、面が汚染されている。除染は点なので、効果は上がるのか。無理ではないのか。

● 浪江の人々が避難した飯館方面は風下なので影響がでた。梅の花が咲く頃なので、南東風(みなみごち)とともに北上し、影響を受けてしまったのかも。北風のときは南に影響がくる。

● 除染をやると言うけど、線量の高いところは移動しないのか？ 線引きの時期が早いのではないか？ 情報がたびたび変わる。

てはいない。持っていたものが「0」になつたので納得できないのだ。

● 子どもが県外に行つてしまった。帰るべき故郷を持つて行かれた。虚しくなつてに過ぎない。除染、ゴミ処理を技術的に鋭意開発してほしい。

● 希望を持たせようと、議員、町長は「帰れるようにする」と言う。しかし、帰らないのだからそうはいかない。土地の権利があつても、移動しないと家が破損していて立ち入りはできない。

● 富岡町の人々は6000人いる。3ヶ月に1回帰れる。許可を受け、2時間だけ白い防護服を着て入る。家が雨風でどんどん壊れていく。行く時は希望を持つているが、いつもがっかりする。

● 楢葉、川内村は解除になつた。帰ると10万円がストップされる。居住権はないのでストップされる。(解除になると仮設、応急住宅の居住権がないので、居住できなくなるの意)また、運搬費が出ない。この10万円は精神的ショック込みの価格である。富岡町の場合、10万円は東電から示談の形式で出ている(国、県からの金ではない)。そしてそれは、被害者の

● 憲法上の居住権を奪われたのだ。予測されていた冷却水のポンプは、8年前に海の側から山側に1本必要と言われていたのに対策せず事故が起こった。人災と言える。

● 私どもは発電所によって※①憲法22条を突然剥奪された。被害者だけが苦勞している。居住権を選んだので、戻るまで生きる権利があるので見舞金は当然の権利だ。また、※②憲法29条に財産権は侵してはならないとある。財物補償の問題について誰も声を出さない。このことは皆に不満だ。市民運動の基本ではないか。安全は企業の理念はずだ。つまり人災である。今回の事故は原発の平和利用の最も大切な、安全の理念を怠つたものだ。福島の過剰反応だとする向きもあり、「安全だ、被害告知が過剰だ」と、主張が強まったり薄くなつたりしている。

● 法治国家なのに※③憲法11条、97条の基本的人権が全く無視されている。弁護士がみえて4人発言したが、この憲法発言を聞くことはなかった。

● この苦しみを、東京に送ろうとは思わない。皆が言う、「現地の人は潤っていただろう」と。でも継続し

立場で決めていない。原発事故で住む場所と職場を奪つておいて、自立できないということ、その10万円のお金をだんだん減らしていくというのだ。「誰がホームレスにしたのだ」と問いたい。一日一食おにぎり、そして1本の水。終戦後そっくりだ。

● 自己破産はしない。勤めている。働かない人は収入がないので補償からもらえない。職業選択の自由があるだろう。(完全雇用でもない)ので賃金も少なく、10万円はもらつて当然のはず)

● 直接被害でなく、土地、居住場所を追われている。補償の面でも自分のところの被害のつかみどころがない。

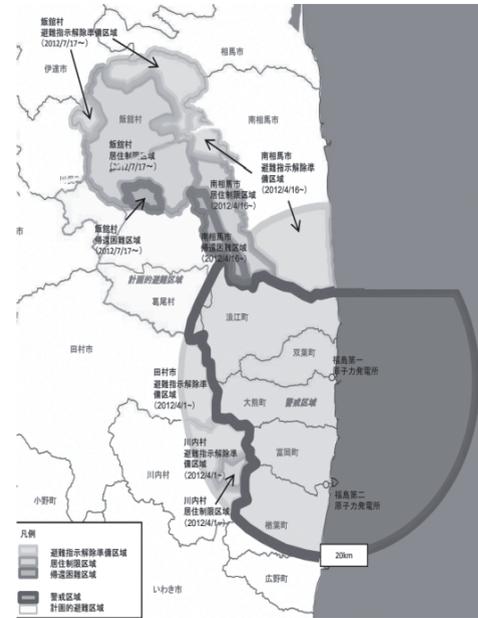
● 除染をするというが、家の周りなど部分的な除染や、ゴミの行き場もないでは先に進まない。

※①憲法22条：『第22条 何人も、公共の福祉に反しない限り、居住、移転及び職業選択の自由を有する。2、何人も、外国に移住し、又は国籍を離脱する自由を侵されない』

※②憲法29条：『第29条 財産権は、これを侵してはならない。2、財産権の内容は、公共の福祉に適合す

楢葉町等における区域見直し前後の避難指示区域と警戒区域の概念図

【楢葉町等の区域見直し前(現在)】



【楢葉町等の区域見直し後】



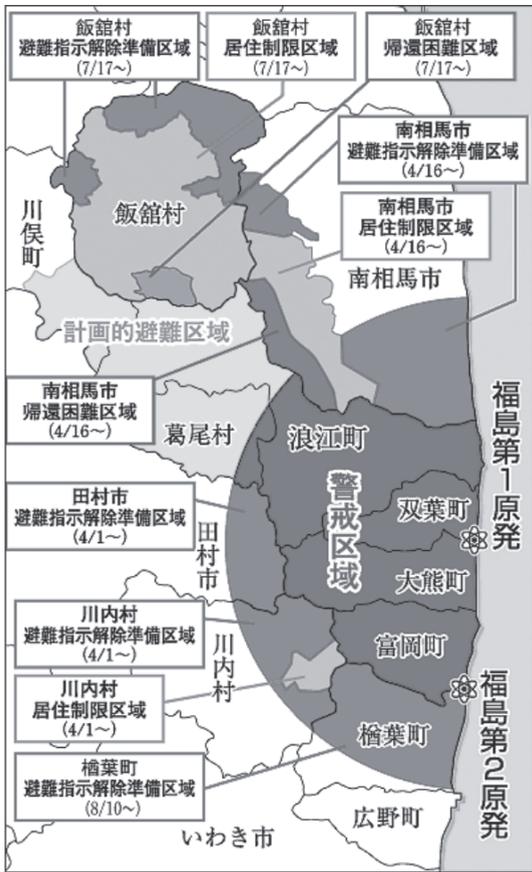
参考資料1 平成24年7月31日

(参考資料1は、当初の予定より狭くなった警戒区域。楢葉地区がとくに『解除準備区域』に完全に変更されてしまった。平成24年7月31日)

るやうに、法律でこれを定める。3、私有財産は、正当な補償の下に、これを公共のために用ひることができる』

※③・第11条『国民は、すべての基本的な権利の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的な権利は、侵すことのできない永久の権利として、現在及

び将来の国民に与へられる』第97条『この憲法が日本国民に保障する基本的な権利は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて、これらの権利は、過去幾多の試練に堪へ、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである』



国が決める三つの避難区域分類は大きな問題

●富岡町では、『いぐね』(屋敷林)風よけで三つに分けようとしている。①全く被害がない人、②帰りたい人、③帰りたいけど帰れない人である。町長と国で考えて働きかけている。ひとりでも帰してお金を払わないようにしようとしている。

●町長と国は三つに分類している。①帰れない②帰還困難区域(年間積算線量50mSvを超

える)

②どちらでもよい⇨居住制限区域(20〜50 mSv以下)

③帰れる⇨避難指示解除準備区域(20 mSv以下)

●賠償を3段階に仕分けしようとしている。私たちは反対している。大臣も当面一律賠償せよといっている。OKしない。

●我々は言いたい。福島の大熊、双葉に国会議事堂を作り、2、3年、何ともなければ帰りますよ、と。

●常盤自動車、三郷〜仙台南、来年開通させるといふ。しかし、富岡は、水に流されて帰れない。

富岡は帰れない。災害復興で、この郡山に住宅を建てるという話もある。しかし、郡山は放射能値が高い。避難先を排除しなければならぬとは何ということだ。

●昔から、ここは『相馬』で賑わっていた場所。源平などでも有名で海山にも近かった。そんな場所から生活権を奪っていった。

東電は想定不足だ。注意力が非常に足りない。人によつては、地震も原因ではないかといわれている。何

と、原発の配線関係は海側に向いているのだ。このことをずつと隠している。女川も当初は下げた位置に設計していたが、上に上げた。

●富岡町は第一原発からは10キロメートル、第二原発からは5キロメートルの位置にある。影響は大きい。

●驚いたことに、東電営業所関係の家族には、地震だから直ぐ逃げろと代表者が言った。水素爆発の前に飛行機で北や東京など遠方にすぐ避難したという。

一方、自分たちはパニックになり、ガソリンも金もないままに体育館に逃げた。そして、「川内村に行け」との指示で大渋滞に。

●双葉は埼玉に、大熊町は会津に避難した。会津から西は80キロメートルある。浪江町は飯館に向かつて避難したので、被爆者ということで健康手帳交付に積極的だ。

●群馬、岡山、埼玉、静岡のボランティアから、もつと自分たちの主張を通すよう運動すべきだと言われた。「行政がなんとかしてくれる」では、意見は一致し

ない。

●運動をして、「瓦礫は東京へ持っていけ」とばかり言うのではなく、日本全国に引受けさせることを主張すべき。現地では処理を集中すると、結局帰れないではないか。一生除染はできないことになる。

●年取った私たちは、帰りたいですよ。

●今の状態では、自然界に戻ることはできないのではないか。

●帰れば帰りたいが、低線量の被曝はどうなるか、チェルノブイリの例もある。(25年の間の子どものたちの被曝、帰れない状態が25年続いている現状)

―親江会から―

私たちは、国を相手に6年がかりで健康手帳と手当を勝ち取ってきた。皆さんも自治体、国を相手にして働きかけたらいかがでしょうか。

●帰れない。ライフラインのない浜通りは帰ることができない。

●帰りがたくない。結婚するであろう息子のために。(50代女性)

●帰れるなら、帰りたい。(70代女性)

●帰りたい。自分では決められない。(男性)

●帰れない。一人だ。(80代男性元公務員)

●帰りたい。河内村だが、家はダメになった。息子は埼玉に。いま貧血に悩んでいる。除染しても同じだと思う。したがって帰らない。(80代女性)

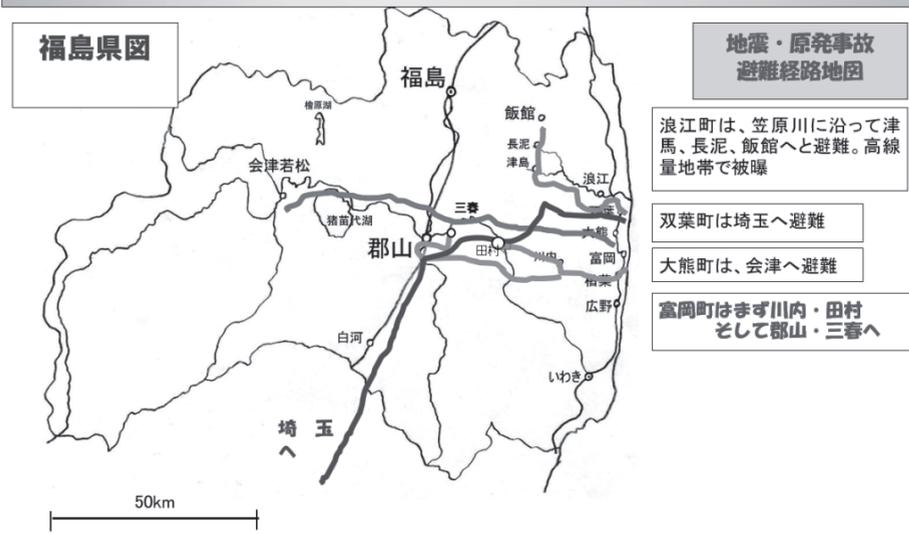
●帰りたい。家がちゃんとしているから。(70代女性)

●町長は、町にもどることができるのは5年後と言っているが、何もできない。被曝の検査をやっても分からないし、強制もしない。

●富岡生まれの人は、しゃかりきにならない。変わらない。諦めてしまうところがある。必死さが足りない。もつと自分の立場を主張すべきと思う。自分たちは帰らないと言うのに、国は帰らせようとしている。賠償を出来るだけ払わないようにし、除染すると言つて、町長も帰ることを前提としている。ほつておくとずるずると帰ることになってしまう。

●皆が「帰れない」、または、「帰らない」としつかりした考えを持つならいいが、ぼんやりとした気持ちで「帰れないだろう」と思っている人が大部分なの

原発の水素爆発事故から、皆などのように避難したか 2012.3.11~13~



で、そこが問題だ。

移住するには、移住のための賠償金交渉が要る。今は損害金を出すと云っているが、築年数の評価額で原価償却分を差し引いた金額補償では移り住めない。そんな状態ですら、団結している風でもない。

● 親江会の人は、「健康手帳の申請を」と勧めてくれるが、自分たち富岡町民は、いきなり「避難」ということで飛び出して、浪江町民のように、「被曝したに違いない」状態とは違う。「健康手帳」という形では、国、自治体とは交渉できないのではないか。

― 親江会 ― まず健康検査をすべきということ、手帳作成を願ってはどうか。浪江町の避難の方々は少し違うとしても。

● アグネスチャンが慰問に来て、「広島・長崎の人は、原爆を許すといっている」と聞いた。本当にそうだったのかぜひ聞きたい

― 親江会 ―

我々被爆当事者は、低線量被爆がずっと続き、苦しんでいる人々を多数見ていて、『許せない』の一言である。詳しく調べれば調べるほど「どうしてアメリカ

は非戦闘員を原爆の標的にしたのか」「どうして大統領が原爆投下を許したのか」の思いが強い。だから、「核廃絶」を呼びかけている。

● 3月ごろから去年いっぱい、不満や言いたいことを言い続けてきた。今年はまだ町や国、東電に嘯みつかなくなった。去年は仕事が多かったが、今年ほとんど無くならず、母も亡くした。収入は、3年間の賠償のみ。これから6年、帰らなかつたら全損だ。自分は去年、家を新築したばかりだったが壊れた。ただ、払込みは済んでいたのよかったです。「帰ってこい」と言われても、新しい住宅の再取得価格ではないので、賠償金は安すぎ。負担は全部自分にかかる。

また就職先や仕事がない。5年と言ってもその保証が全然ない。もう、他所に行って出直した方がいいのではないかとさえ思う。

江戸川平和コンサートの歩み

江戸川平和コンサート実行委員会

実行委員長 藤居阿紀子

去る2000年6月4日、被爆55周年で親江会結成35周年の節目の年、タワーホール船堀大ホールにて、親江会主催の平和祈念集会が開催されました。女優の吉永小百合さんによる原爆詩の朗読と、ルーテル小岩教会の故・沢正彦牧師のお嬢さんで、シンガーソングライターの沢知恵さんによるコンサートとなりました。

当日は、親江会の会員と多くのボランティアと一緒に、会場整備などの協力のもと、平和の祭典は大盛況のうちに終了しました。

記念すべき第1回目スタート

この集会を経て、当時の親江会会長・銀林美恵子さんと事務局長・西本宗一さんのお二人から、被爆体験を語り継ぎ、平和の尊さを後世に伝える「江戸

パンデミックにより多くの方が不安に陥り閉塞感を味わっていることを考えて、ヒロシマ・ナガサキ出身の有名人の出演協力を求めアプローチしました。

その結果、長崎の被爆者である俳優の若林豪さんが出演してくださることにになり、インタビュ形式で被爆体験を語ってくださいました。また、現在の山本宏親江会会長の弟さんであり、元広島カープ監督の山本浩二(被爆者二世)さんからはビデオメッセージが、長崎の被爆者である歌手のさだまさしさんからはメッセージ入りの色紙が届き、コンサートに大きな花を添えていただきました。

次世代につながるコンサート

2024年、第20回目の節目となるコンサートも印象深いものとなりました。第1部は、弦楽器による音楽と詩の朗読劇のコラボレーションでした。江戸川演奏家協会の奏者が奏する弦楽四重奏の中、朗読の会「音夢」の皆さんと区内中学生らの詩の朗読劇で、詩人の石川逸子さんの原爆詩ほか

川平和コンサート」の提案があり、それに協力する人々による実行委員会が形成されました。以後、2002年の「江戸川平和コンサート」を第1回目としてほぼ毎年、平和を願うコンサートを開催しています。

また、当初から江戸川区の後援をいただき、2016年の第12回からはタワーホール船堀小ホールに舞台を移しています。

第1回からの記録を見ていただければわかるように、毎回、多彩な方々の出演で素敵な平和コンサートが実現しており、いつも来場者で満杯の会場から送られる大きな拍手は主催者としての喜びです。

新型コロナウイルス感染拡大で

オンラインも取り入れる

2020年、新型コロナウイルスの感染拡大により、さまざまなイベントが中止となる中、親江会の被爆二世の方が新たに実行委員会に参加し、親江会のYouTube(ユーチューブ)を立ち上げ、インターネットでの同時配信が実現しました。

を朗読しました。

第2部は、親江会会員で長崎被爆二世の歌手・チキラー栄子さんの歌。そして、親江会事務局長・高比良毅さんのお孫さんで被爆三世の怜花さん率いるダンスグループのチアダンスで大いに盛り上がりました。

立場も世代も異なる幅広い出演者によるパフォーマンスは、来場者から高い評価をいただきました。今後にも繋がる力強さを実感できるコンサートになりました。

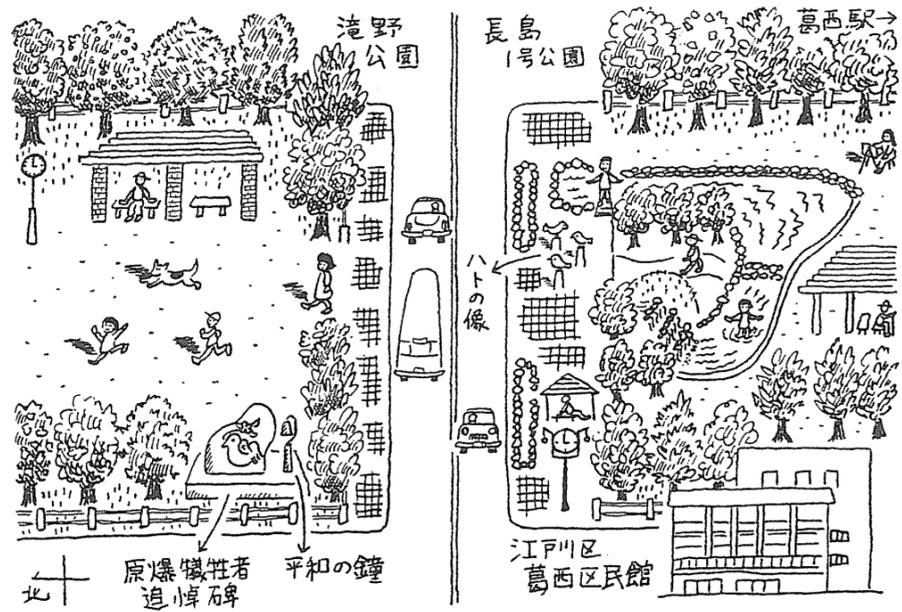
平和コンサートの発起人である銀林会長、西本さんの意思を引き継ぎ、実行委員メンバーとしても関わっていた前会長の奥田豊治さんが生前、「追悼式と平和コンサートだけは、永遠に引き継いでいきたい」とおっしゃっていたことを思い出し、二世、三世の方々とともに実行委員も次の世代へとつなげる「江戸川平和コンサート」にしていきます。

江戸川平和コンサートの歩み

回 年月日	内 容
被爆55周年特別企画 2000年6月4日	吉永小百合(朗読)・シンガーソングライター沢知恵(歌とピアノ演奏)
第1回 2002年7月27日	橘麗子(オペラ)・シンガーソングライター田中ルミ子(歌とピアノ演奏)・北小岩コーラス同好会(コーラス)・小林夏衣(ピアノ演奏)
第2回 2004年1月15日	檜よしえ(俳優座)・福原道子(篠笛)・橘麗子(オペラ)・田中ルミ子・本間ひとし(ボディアクト)・江戸川区音楽祭合唱団
第3回 2004年11月14日	江戸川区少年少女合唱団・石川逸子の詩の朗読劇(区民出演)・黒坂黒太郎(被爆樹木で制作した「コカリナ」演奏)と矢口周美(歌)
第4回 2005年8月30日	福原道子(篠笛)・橘麗子(オペラ)・被爆60年、親江会結成40周年記念被爆展開催
第5回 2005年11月12日	江戸川区少年少女合唱団・「NAGASAKI・1945・アンゼラスの鐘」上映
特別企画 2006年11月18日	「いのちを歌う平和を奏でる」コンサート(江戸川区仏教会と共催)チェルノブイリ被爆者ナターシャ・グジー(バンドウーラ演奏と歌)・江戸川区在住高橋尚子(チェンバロ演奏)
第6回 2007年11月18日	中村健佐(サクソ演奏)・音楽劇「禎子と千羽鶴」登坂道子&芳賀一之(ピアノ演奏)
第7回 2008年7月6日	江戸川区少年少女合唱団・古徳恵子&POZO(マリンバ演奏と歌)
第8回 2009年8月2日	江戸川区音楽祭合唱団・September(歌)
第9回 2010年7月25日	西平千代子他2名(琉球舞踊)・古徳恵子(マリンバ演奏と歌)
第10回 2011年7月31日	合唱団あしべ(コーラス)・区内の子どもたちによる「アオギリの歌」・中村里美、伊藤茂利(歌と語り、ピアノ)
第11回 2015年11月29日	被爆70年平和祈念コンサート 江戸川演奏家協会、石川逸子、とまとの会、子どもたち(詩の朗読劇と演奏)



回 年月日	内 容
第12回 2016年10月8日	江戸川演奏家協会(弦楽五重奏)・江戸川少年少女合唱団・「青い空は」「花は咲く」(会場のみなさんと合唱)
第13回 2018年2月18日	原田佳子と江戸川演奏家協会(朗読と演奏)・地域で活動するえどがわインドダンス(インド舞踊)・弦楽五重奏
第14回 2018年11月25日	井野口慧子・智内威雄(詩の朗読とピアノ演奏)・智内威雄(ピアノ演奏)
第15回 2019年12月1日	「合唱と朗読による いしぶみコンサート」蒔村美枝子(朗読)・広島県立広島観音高等学校OB合唱団東京支部(混声合唱のためのレクイエム「碑(いしぶみ)」)
第16回 2020年11月22日	朗読劇「父と暮らせば」(井上ひさし作)桂月企画・「被爆者に聞く」俳優 若林豪インタビュー※コロナ禍のため入場者の制限とオンラインによる配信
第17回 2021年11月28日	朗読劇「8.6」移動演劇桜隊・「平和に向けたジャズの調べ」ロングトーンズ(被爆2世参加)
第18回 2022年11月27日	朗読劇「8.9」移動演劇桜隊・「ウクライナの歌手による平和に向けた歌」緒方ミラ
第19回 2023年11月19日	丸木俊作「ひろしまのピカ」朗読／岡崎弥保・長崎市生まれシンガーソングライター松尾貴臣(歌)・広島市生まれピアニスト早田一駿(ピアノ演奏)
第20回 2024年11月24日	江戸川演奏家協会・朗読の会「音夢」&区内中学生(詩の朗読と演奏)・長崎被爆2世チキータ栄子(歌)、3世が参加するチアドル「ぴーすファクトリー」(チアダンス)



「江戸川原爆犠牲者追悼碑の会」一〇年の歩み

岡田弘隆

建立にこぎつけるまで

日本一の被爆者の会があつて

正直なところ、追悼碑ができあがつて二、三年目ころは、東京の各地や、その他、全国各地に、江戸川区に似たような原爆犠牲者の追悼碑ができていくものと考えていました。ところが、この一〇年目を迎えてみて、どうも初めの予想とはちがひ、どこにも似たようなものができてこない。

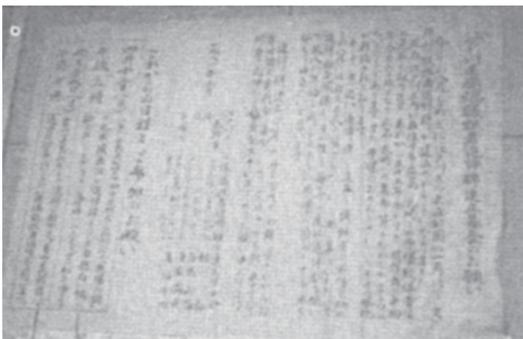
そこで、どうしてなのかと考えてみたわけです。

よそにできずに、江戸川区にだけできたのは、何故かと。

そうすると、なんと言つても、思い当たるのは、江戸川区の被爆者の会が、全国一を誇る温かな、強固な地域組織だったということが、先ず一番の理由であつたのです。その被爆者の会が、ほかならぬ親江会で、一〇年前は、相川弘さんが会長でした。

次に、人のご縁の不思議な結びつきに思い当たります。親江会の現在の会長の浄園満成先生は、元江戸川区中学校長会会長であられました。北葛西の安楽寺の伊藤説翁住職は、この浄園先生と同じ中学校に勤めておられたことがあり、また伊藤さんは被爆者の方々にお知り合いが多いご縁の持ち主でした。

そんなご縁によって、一九八〇年二月一六日、その安楽寺で最初の会合がもたれ、それから八回ほどの会合が重ねられました。



親江会からは、いつも相川会長が、梅沢武次事務局長代理、銀林美恵子副会長、西岡六三事務局次長、堤久吉さんなどが、また義父さんが熱心な被爆者運動家であつた杉原博子先生、それに真福寺住職の羽生雅則さん、もちろん伊藤さんとその他、数名の方々が相談しました。

一九八一年夏は、仏教式に言うところ、敗戦から三七回忌という年でした。

そこで、一九八一年夏をめどに、被爆犠牲者を追悼できる碑か、平和像かを建立して、思想、信条、政党政派を越えて、平和の誓いのできる追悼行事を行い、以後は、毎年、追悼行事を続けて、被爆と戦争体験を風化させないように、と話し合われました。

この話は、途中から、銀林さんのご縁で、「原爆の図」の作者として知られ丸木位里・俊画伯にご協力いただけることになり、一九八〇年八月には、埼玉県東松山市の丸木美術館に丸木画伯夫妻を訪ね、自然石に下絵を画くから、みんな彫つたらどうか、という話に発展していきました。

区長が公園提供、建立する会の発足

一九八〇年十二月一五日には、当初の会の名称であつた「江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会」の設立総会が開かれることとなりました。



江戸川区原爆犠牲者追悼碑建立募金のお願い

今年の八月をめどに、江戸川区の区立公園の一角に（予定）原爆犠牲者追悼碑が建立されることになりました。

現在江戸川区内に在住する広島・長崎での原爆被爆者は二〇九名もおります。あれから三五年余がすぎ被爆者の平均年齢も六〇歳となり広島・長崎への墓参等もなかなかままならないのととであります。また、原爆のおそろしさについてもその風化が指摘されております。

そこで身近に追悼碑を建立し、犠牲者の名簿を納め、この八月には広く区民の皆さんなどにご参集いただき追悼会を開催し、その後も毎年一度は追悼会を開いて、故人の冥福を祈るとともに原爆の恐ろしさも永く伝えてゆきたいと思っております。

追悼碑建立予算は五〇〇万円で、全額皆さんから寄せ頂く寄附金（募金）により完成させる計画ですので、何卒応分のご協力を下さいますようお願い申し上げます。

募金をご送金下さる場合は、左記宛にお願い致します。

記

江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会

代表幹事	(江戸川区原爆被害者の会会長)	相川弘
同	(江戸川仏教会会長)	西城正倫
同	(江戸川区中学校長会元会長)	浄園満成

様

(賛同者・順不同敬称略)

中里喜一	(江戸川区長)	高橋治己	(江戸川区労協議長)	
梅沢武次	(江戸川区原爆被害者の会副会長)	中村伸之助	(江戸川区職労委員長)	
銀林美恵子	(同)	副会長	井上正平	(江教組委員長)
西岡六三	(同)	副会長	木内俊夫	(弁護士)
澤正彦	(小岩教会牧師)	佐藤幸雄	(同)	
花島順一郎	(東京シオン教会牧師)	市川高義	(江戸川生協理事長)	
山田璋俊	(江戸川仏教会副会長)	今泉清	(「下町タイムス」発行人)	
清水恵隆	(同)	副会長	近藤徹	(江戸川高校教諭)
人見哲為	(江戸川法曹会会長)	深谷静雄	(私教連東地協議長)	
銀林浩	(明治大学教授)	外約九〇名		

(江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会・事務所)

〒132 江戸川区東小松川二丁目一七 泉福寺内
電話六五二一九四二八



追悼碑建立予定地

そこで、この発起人会の前に、これまでの会合の趣旨をお話してご協力いただくために、相川会長と伊藤安楽寺住職が中里喜一江戸川区長にお願いにいきました。すると、中里区長は全面的な協力を約束してくださったばかりでなく、区立公園を建立場所として検討しましょう、とまで話してくださったのでした。

それまで、建立場所については、最終的には区内のお寺もやむをえないと考えていたのです。しかし、被爆者にも、追悼する側にも、様々な宗教や信条があるので、特定の宗旨の寺ではないほうがよいがと、じつは頭を悩ましていたのです。その悩みが区長の公園提供の話で、一挙にすばらしい方向へと解決に向かったのです。

いま思いますと、事実として、この時の中里区長のひらめきの一言が、その後、立派な追悼式が、一〇回を重ねるまで続いてきた根源の一つになっているものと思われるます。

こうして、一二月一五日の設立総会も、大成功となりました。

設立総会では、将来に向けて、会の目的を次の三つと確認しました。

- ① 原爆犠牲者追悼碑の建立と将来にわたっての維持。
- ② 毎年夏の追悼式の開催。
- ③ 核兵器廃絶のため原爆被害の恐ろしさを永く伝えていくこと。

あけて一九八一年一月一四日、江戸川区の担当公園課長などとの話し合いで、区立「滝野公園」なら何坪でも使って結構ですよ、と勧められ、追悼碑は「滝野公園」建立と決まりました。

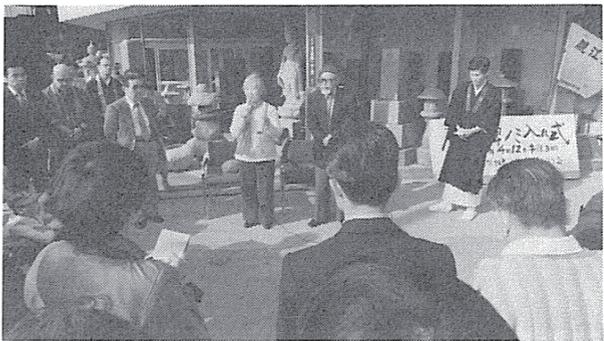
追悼碑の鳩になった母子の図とノミ入れ式

追悼碑は、自然石に、丸木位里・俊画伯が直接下絵を描いてくださることになりました。

一九八一年四月一二日午後三時、碑の建立を依頼した葛西の田中石材店の店先に据えられた四国産の縦、横ともに約二メートルの緑色の自然石のまえに、親江会と建立する会の関係者が六〇余名ほども集まるなか、筆先に墨をたっぷりと含ませた丸木俊さんが石の中央に母子の絵を画き、続いて丸木位里さんが母子を中にして大きく鳩の絵を画き、最後に、鳩に一輪の花をくわえさせました。画き終わると、息を殺して見守っていた人々から、いつせいに拍手が起りました。

それから、丸木位里・俊夫妻と、建立する会代表幹事の西城正倫江戸川仏教会長や区労協の高橋治巳議長、相川さん、銀林さんなどが、いきさつを説明して挨拶をしました。

挨拶しているうちに、墨が乾いてきました。そこで、当日の参加者がめいめいに鋼のノミとハンマーを握って、鳩と母子の絵のそれぞれ好きどころの石をひとノミ





ずつ彫って、ノミ入れ式を行いました。

この日から、四〇日間ほどかけて、多くの方々がこの石を彫りに通い、五月二四日に、彫りあげた鳩と母子の絵に色を塗りました。鳩は白、母子は朱色。これも丸木さんの指定による色でした。

塗り終えてみると、みごとに石から絵が浮きあがり、本当に母と子が鳩になって飛んでいるように見えるのです。

説明が遅くなりましたが、この「白い鳩の中に朱色の母子の図」の意味は、「広島・長崎で被爆して犠牲となった母と子が、鳩になって世界中に平和を訴えて飛んでいる姿」をあらわしたもののなのです。

募金と除幕式の準備

この間、四月二日には、中里区長から滝野公園建立につき、正式の決裁をいただき、四月六日には、区議会議長と各党派幹事長に追悼碑建立につき協力を要請し、協力の了承をえました。

こうして、区民と区内外の広範な方々の協力のもとに、四月の末には建立資金についての募金の勧募がスタートしました。

募金にあたっては、さらに追悼碑建立の意義を広く訴えて歩きました。

江戸川に原爆犠牲者追悼碑

7月26日(日)、除幕式。皆様のご参加を!

平和の願い
幅広い募金で
建立

追悼碑の建立は、平和の願いをこめて、幅広い募金で建立することによって、平和の願いが実現されることを願っています。

追悼碑の建立は、平和の願いをこめて、幅広い募金で建立することによって、平和の願いが実現されることを願っています。



日時	7月26日(日) 午後1時
場所	区立滝野公園(滝野橋) 追悼碑
内容	除幕式、献花、参列
参加費	無料
お問い合わせ先	区立滝野公園(滝野橋) 追悼碑
主催	区立滝野公園(滝野橋) 追悼碑
協賛	区立滝野公園(滝野橋) 追悼碑

特に区内の教育関係者の理解をうるために、江戸川区教育委員会の委員長と教育長に要請して建立への協力をお願いし、了承をえました。また、区立小学校と中学校の、それぞれの校長会と教頭会にお願ひし、当時現職の校長先生と教頭先生全員に署名と募金の協力をいただき、一三万八〇〇〇円のご協力をいただきました。その他、区立幼稚園・保育園を含めて、一般の先生方の募金も五〇万円を越えました。

建立以後の例年の追悼式に、区立の小学校・中学校の児童、生徒さんら多数が、学校ぐるみで千羽鶴を折って参加する姿がたえませんが、その出発点は、このような区内の教育関係者のこぞの協力があつたからでした。このような事實は、江戸川区の教育関係史のうえからも特筆される出来事だったと言えるでしょう。

募金に協力してくれた人の数は、全部で区内外の二〇〇〇人以上に及び、募金総額は、四四二万円余りに達しました。また、江戸川区社会福祉協議会からは一〇万円の助成金をいただきました。

こうして募金を進める一方、追悼碑の建立工事も梅雨のなかで進められました。追悼碑は、区立滝野公園の南西の隅の一角に、碑に向かうと広島・長崎の方角に思いをはせるように建てられています。



追悼碑の本体は四国産の青石ですが、台座や建立の言葉を記した誌石には、アフリカ産黒御影石が使われ、また台座には水がたたえられるようになっていきます。水を求めて亡くなられた原爆犠牲者の苦しみを、少しでも和らげてあげたいとの多くの被爆者の心情をくむ設計がなされたのでした。

追悼碑は、国の内外の総ての被爆犠牲者を追悼し、平和を訴えるために建立されたものですが、特に、区内被爆者に縁故のある被爆犠牲者の名簿が奉安できるように設計され、毎年、名簿に関係犠牲者の書き加えと、奉読が行えるようになっていきます。

追悼碑正面の、「原爆犠牲者追悼碑」の文字は、広島市の被爆者、親江会の相川会長が、また建立の言葉を記した誌石の文字は、長崎の被爆者、浄園先生（現親江会会長）が、それぞれ記念に揮ごうされました。

その除幕式を兼ねた第一回の追悼式は、一九八一年七月二六日（日）午後二時からと決まり、前例のない追悼式の準備が進められました。

追悼碑を除幕して第一回追悼式

感激の除幕式

一九八八年七月二六日は、快晴にめぐまれ、朝早くから会場設営の準備が進められました。設営には建立する会に集まるボランティアの方々多数とともに、区役所の公園

課から職員が出て、防災用の大型テント二張りをはじめ、マイク放送設備その他の設営も行われ、このような民間と区役所との追悼式設営の協力関係は、以後、今日まで変わらず続けられてきている前例となったものでした。

打ち上げ花火の音とともに、五〇〇人ほどの参加者の待つ滝野公園に、中里区長も到着され、午後二時ちょうど第一回の追悼式が始まりました。

相川会長の開会挨拶に続いて、追悼碑の除幕が、中里区長、被爆二世の堤英樹君と永田千春ちゃんの手で行われました。

それまで碑を包んでいた白布が引き落とされると、白い鳩に朱色の母と子が描かれた追悼碑が現われ、参加者の感激のざわめきのなかを、白鳩がいつせいに飛び立ちました。

除幕に続いて、経過報告が行われ、次に犠牲者名簿の奉読奉安、犠牲者への黙禱が行われました。

追悼式では、続いて各界からの挨拶を受けることになり、中里区長、区議会議員、伊東壮日本被団協代表委員、丸木位里・俊夫妻、西城仏教会会長、区労協高橋議長挨拶が行われました。

続いて、親江会の会員による被爆体験の発表が、広島・矢部キヨ子、長崎・中山鈴子の両氏から証言され、参加者に衝撃を与えました。



そのあと、千羽鶴の献納が行われました。千羽鶴は平和の象徴です。この千羽鶴を区立の小学校や中学校、公立・私立の保育園で、学校ぐるみやクラスぐるみなどで折って、先生引率で子供たちが参加します。また、その他、地域子供会や多くの団体、個人が千羽鶴を犠牲者にあげるために参加し、仮設の千羽鶴かけはたちまち満杯になりました。

千羽鶴のあとは、参加者全員による菊の花の献花です。追悼碑には背後から臨時の噴水がかけられ、仏教会による読経とキリスト教界によるお祈りのなかを、献花が長い列をつくって行われました。

献花のあとは桐笛の吹奏です。この桐笛というのは、丸木夫妻から記念に贈呈された笛で、なんでもその昔、東北の山村で、農民たちが一揆を起こす際にホラ貝の代用として使われたものだそうで、桐の若木をくりぬいて作られているものです。この桐笛は、犠牲者への追弔と追悼式へのより多くの方々の参加を願う意味をこめて、はじめに丸木俊さんから、続いて梅沢武次さんから、吹きならされました。親江会副会長の梅沢さんは、陸軍ラップ長として広島市宇品で被爆されながら、直後の救護にあたられたという体験のもちぬしで、三六年ぶりの葬送ラップでした。

最後は、参列者全員による「原爆許すまじ」の合唱です。

こうして、追悼式の内容としては、前例のないなかで創意をこめてこの第一回において行われた内容が、その後も登場人物を少しずつ変えて踏襲されてきております。

第一回での開会挨拶は、区内教育界の代表として、ご自身、長崎において被爆された浄園満成先生がされました。このご挨拶は、思えば、それからおよそ二年後に、浄園先生が相川会長亡きあとの親江会の会長になられるという、不思議なご縁のはじまりではなかったでしょうか。

なお、追悼式のあとで、例年、第二部として、懇親会や原爆関係の映画会や公演会などが開かれてきております。

建立する会から、「江戸川原爆犠牲者追悼碑の会」へ名称変更して

このように第一回の追悼式を終えて、建立する会は一九八二年一月二五日の幹事会で、名称を「江戸川原爆犠牲者追悼碑の会(略称・原爆追悼碑の会)」と変更しました。そのうえで、前にも記しましたように、①追悼碑の維持、②毎年の追悼式の開催、③核兵器廃絶のために原爆被害の恐ろしさを永く伝えてゆく、との三つの目的をかねて活動を続けていくことになりました。



江教組の先生たちの指揮と演奏による全員合唱

しだいに成長する追悼碑

「追悼碑が成長する」と言う日本語は、言葉としてはおかしなものですが、ことこの原爆犠牲者追悼碑にかぎっては、そうとも言うより方法がありません。普通よくある記念碑は、建立を終えてしまうと、どこかの片すみに忘れられてしまったり、またそれほどでなくても、建立された当時のままで一〇年後、二〇年後に存続しているというのが、よくある例ではないでしょうか。

ところがこの追悼碑は、まるで生き物のように、この九年間に、少しも休むことなく成長してきた不思議な追悼碑なのです。この不思議な成長の記録をここに記しておこうと思います。

「原爆瓦の碑」が加わる

まず、碑建立の翌年の一九八二年には、さつそく、「原爆瓦の碑」が加わりました。原爆瓦とは、あの日、瞬時に蒸発して影だけになってしまった人があったほどの、あの原爆の熱線で表面を焼かれて、ケロイド状にただれた瓦のことです。その瓦を、埋もれていた爆心近くの河の中から、原爆の生き証人として発掘する作業が、広島・長崎両市の子供や市民の手で、進められていました。その原爆瓦を、正式に広島・長崎両市長さんから寄贈してもらい、直接手に触れてみえるようにと作られた碑でした。

原爆瓦をはじめこんだ台座の石は、追悼碑本体に使われた四国産の青石の下の部分で、切断して石屋さんに残されていたものを使用しました。この原爆瓦の碑が加わることによって、追悼碑はミニ原爆資料館ともなったのでした。

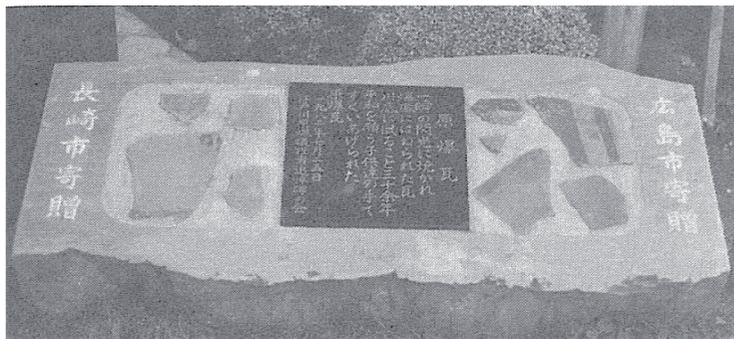
「平和の鐘」が造られる

翌年の一九八三年には、「平和の鐘」が追悼碑の右わきに造られました。追悼碑を訪れる方々に、犠牲者への追弔の意味を込めつつ、平和への願いを託して鳴らしていただくように造られ、また追悼式では、黙禱の間、毎年、打ち鳴らされてきました。この平和の鐘を造るために、区内外で広く募金を呼びかけましたところ、金七八万円余りが寄せられましたことを記しておきます。

広島・長崎両「市の木」の植樹

その後一九八五年には、広島市から「くすのき」と、長崎市からは「なんきんはぜ」の、両方の「市の木」が贈呈されて、追悼式のなかで植樹式が行われました。このように両方の市の木をいただくことになりましたのは、それ以前に、江戸川区から両方の市に、親江会の代表を通じて、「江戸川区の木」が贈られて、それぞれの平和公園に植えられて大きく育っているからでした。

原爆瓦と言ひ、この「市の木」と言ひ、江戸川区と被爆両市との関係は、こうして特別にご縁を深めてきたものと思われまます。





追悼碑の周囲に念願の「噴水」

追悼碑の周囲に噴水が欲しい。水を求めて亡くなられた原爆犠牲者を思うと、どうしても噴水が欲しい。この願いは一九八六年から出ていたのですが、一九八六年の六回追悼式を終えてから、中里区長さんにお願したところ、検討しますから計画原案を考えてみなさい、と言われたのです。それから原案と言っても、どうしたら良いやら困っていますと、不思議に、日本でも代表的な噴水メーカーにご縁ができ、一九八七年秋に、原案として三案を出してもらいました。

この三案を区にお話して、とうとう念願の噴水が、それも当初の願いよりは立派なものとして、一九八八年七月の追悼式にまにあうように完成したのでした。

しかし、残念なことは、噴水設置を強く念願された堤久吉さんが、この前年の七回追悼式直前に、浦安市で被爆体験の証言中に倒れ、間もなく帰らぬ人となられたことでした。堤さんは、親江会の事務局長として、区内被爆者の家庭訪問活動をはじめとして熱心に活動されてこられた方でした。碑の会では、堤さんの熱心な活動をしのんで、追悼文集を噴水設置にあわせて発刊したのでした。

なお、噴水の水は循環式で、一日に二回、二時間、追悼碑に水をかけるようセットされています。

追悼碑が生み出しているもの

被爆体験発表から証言集の発行へ

区内被爆者を代表して、毎年、広島・長崎の被爆者お二人に、追悼式の中心的行事として、被爆体験の発表をしていただいております。

この被爆体験の発表は、参加者にとって毎回大きな衝撃であり、そしてまた、核兵器の恐ろしさを生の体験によって知りうる貴重な機会になっているのです。

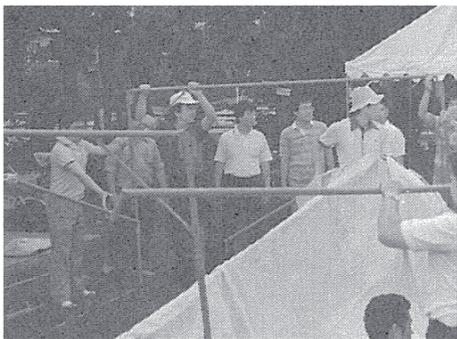
この貴重な証言を、ぜひ、追悼式参加者だけでなく、より多くの方々に知らせたいということから証言集が生まれました。追悼碑の会の目的の③は、核兵器廃絶のために原爆被害の恐ろしさを永く伝えていくこと、となっており、この会の目的を実現するためにも、被爆者の証言を本として出版していくことは、大切なことです。

そこで、一九八二年に、「鳩になつて江戸川被爆者の証言」が発刊され（現在、絶版）、一九八四年には、「鳩になつて江戸川被爆者の証言第2集」が発刊されました。第2集は残部があります。

一九八八年には、前記のように、親江会事務局長であった堤久吉さんの「追悼文集」を発刊しましたが、これも実質的に江戸川被爆者の証言集の意味あいをもつ出版でありました。この追悼文集も、現在、残部がござります。

そして、今年、いよいよ一〇回目の追悼式を迎えるにあたり、「鳩になつて・江戸川





暑い日差しやどしゃぶりの雨のなかを、汗を流し、重いテントやテーブル、イスなどの手配をしていただいております。

一〇回目を迎えて、今年も、江戸川区音楽協議会のご協力により、「江戸川平和コンサート」を、追悼式のと引き続いておこなえることとなりました。これに出演する江戸川フィルハーモニーオーケストラ、江戸川少年少女合唱団、女性コーラス・グループ四団体、また特別出演のオーボエ独奏の似鳥健彦さんなど、区内の音楽家の皆さんが、奉仕で出演をお引き受け下さいました。

このはじめての「江戸川平和コンサート」も、これを機会に将来も続いて開催され、内容も発展していくことを、心から願いたいと思います。

こうして、被爆者と追悼碑を中心にして、核兵器のなくなるまで、また被爆者援護法の制定までの思いで、広範な区内外の皆さんがボランティアとして奉仕していただいております。これからも引き続きご奉仕をお願いしたいものと願っております。



被爆者の証言第3集」を発行する運びとなっております。

毎回の出版に原稿を寄せてくださった被爆者をはじめ多数の方々、また困難な編集の仕事を奉仕でしていただきました編集長と編集委員の皆さんに、この機会に感謝を申し上げておきたいと思っております。

奉仕でなりたつ追悼碑の会

奉仕ということでは、なにもかにも追悼碑の会の諸活動は、いわゆるボランティアの活動によって支えられてきました。

追悼碑建立のときから、その追悼碑の清掃を日課としておられる高木留男さんには、本当に頭がさがります。高木さんは親江会の副会長として活動されながら、碑のわきの掃除道具入れ物置のカギを持って、毎日のように清掃を欠かしません。風邪などで熱を出したりしても、責任感から清掃に訪れる高木さんですが、願いの一つは、追悼碑を子供たちがよごさないこと、もう一つは、清掃を区が引き受けてくれることです。犠牲者の追悼碑がよれたままになって一日でもあることは、被爆者にとつては耐えられないことです。高齢の被爆者に代わって、区の手で碑の清掃が行われるようになることを願うものです。

ボランティアでは、その他、例年の追悼式の準備や資料集の作成と、当日の会場設営や諸々の係、また終わったあとの片付けと、江戸川区の公園課の支援のもとで、大

部分が奉仕として行われています。

その中心には、いつも親江会の会員の方々がおられますが、その他、毎回の追悼式では、区内の民間労働組合の方々、区職員組合の方々や小・中学校の先生方には、夏の暑い日差しやどしゃぶりの雨のなかを、汗を流し、重いテントやテーブル、イスなどの手配をしていただいております。

一〇回目を迎えて、今年も、江戸川区音楽協議会のご協力により、「江戸川平和コンサート」を、追悼式のと引き続いておこなえることとなりました。これに出演する江戸川フィルハーモニーオーケストラ、江戸川少年少女合唱団、女性コーラス・グループ四団体、また特別出演のオーボエ独奏の似鳥健彦さんなど、区内の音楽家の皆さんが、奉仕で出演をお引き受け下さいました。

このはじめての「江戸川平和コンサート」も、これを機会に将来も続いて開催され、内容も発展していくことを、心から願いたいと思います。

こうして、被爆者と追悼碑を中心にして、核兵器のなくなるまで、また被爆者援護法の制定までの思いで、広範な区内外の皆さんがボランティアとして奉仕していただいております。これからも引き続きご奉仕をお願いしたいものと願っております。



世田谷の被爆者たち



追悼碑を中心としてひろがる波紋

こうして、追悼碑の会の一〇年の歩みを、後半はとくに急いで、振りかえってみました。広島・長崎ならいざしらず、この江戸川区の地で一〇回もの原爆犠牲者追悼式が開催されてきたことは、まことに不思議なことではないでしょうか。

国の内外のすべての「原爆犠牲者への追悼」という、この追悼碑にかかわる皆さんの誠の心を通じて、平和な世界へ心の交流が深められてきたのではないと思います。

中里区長さんは、追悼式だけでなく、建立の年以來、毎年八月一五日の終戦記念日にも、区の幹部職員多数を引き連れてこの追悼碑を訪れ、平和への誓いを新たにしておられます。

また、区内で行われる平和行進などの様々な平和への取り組みにあたって、この追悼碑は出発地になったり目的地になったりして、区内外の方々に知られるところとなっております。

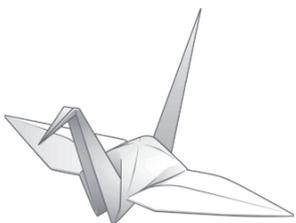
ときたま遠くから被爆者が訪ねてきたり、高校生が被爆体験を聞きに訪ねてきたりすることもあります。これまでに韓国の被爆者が訪ねてこられたこともありましたが、今年の一〇回の追悼式を機会に、韓国原爆被害者協会の辛泳洙(シン・ヨンスウ)会長が、来賓として参加され、被爆体験を証言されることとなりました。

これからも、この不思議な追悼碑と追悼式を、将来にむけて永く伝えてゆけますように、追悼碑の会は、三つの目的に添って活動を続けていくことでしょう。

どうか、皆さまには、追悼碑建立のいきさつとその後の経過をご理解いただき、ご健康に留意されつつ、一層のご支援を賜わりますよう、心からお願い申し上げます、一〇年の歩みの紹介を終わらせていただきます。

(江戸川原爆犠牲者追悼碑の会事務局長)

この項目は「鳩」になって第3集から抜粋、再掲載しました。



江戸川区原爆犠牲者追悼式の10年史

回 年月日	証言者	若い世代の発言	できごと	世界の動き
第31回 2011・7・17	野村洋子	第六葛西小学校 南葛西第二中学校 葛西南高校	鳩になって第5集発行 奥田会長	東日本大震災 福島原発事故
第32回 2012・7・22	園田太助 広崎 隆	第五葛西小学校 二之江中学校 紅葉川高校		第二次安倍政権誕生 米核兵器近代化計画推進発表
第33回 2013・7・21	三宅千里	第六葛西小学校 二之江中学校 紅葉川高校		北朝鮮、3回目の 核実験実施(2月)
第34回 2014・7・20	坂美也子 藤内義雄	第五葛西小学校 南葛西第二中学校 江戸川高校		ロシアのクリミア併合 ISが台頭、イラク・シリアで 活動拡大
第35回 2015・7・19	徳能一馬	西一之江小学校 清新第二中学校 小岩高校		パリ協定採択(気候変動対策) イラン核合意(JCP○A)締結
第36回 2016・7・17	関口寿義 平目紀久子	松江第二中学校 葛西南高校	オバマ大統領広島訪問 (5/29)	英、EU離脱(決定) オバマ政権核先制不使用 政策を検討(断念)
第37回 2017・7・17	山本 宏 山本和子	松江第二中学校 春江中学校 葛西南高校	核兵器禁止条約(TPNW)が 国連で採択(7月)ICAN ノーベル平和賞受賞(12月)	北朝鮮核実験・ICBM 搭載可能な水爆開発 米大統領トランプに
第38回 2018・7・15	山崎秀雄	葛西南高校		米朝首脳会談(シンガポール)
第39回 2019・7・21	山下秀則	葛西南高校	親江会山本宏会長に	香港大規模民主化デモ
第40回 2020・7・19	穴戸昌秀	平井西小学校	コロナ対策で外で献花のみ ビデオで証言発表(Youtube)	新型コロナウイルス世界的 パンデミック宣言(WHO)
第41回 2021・7・18	橋本春美	南葛西第3小学校	外で献花のみ	米大統領バイデンに 米軍アフガンから撤退
第42回 2022・7・17	上里勇吉	都立葛西南高校	外で式典	安倍首相銃撃事件 ロシア、ウクライナ侵攻
第43回 2023・7・16	銀林美恵子 (screen) アリーシャミホ	北小岩小学校	通常の式典に戻る	
第44回 2024・7・21	宮川武志 斎藤ヤス子	瑞江第3中学校 葛西南高校	被団協ノーベル 平和賞受賞	国連、核兵器禁止条約 支持国が70か国を突破
第45回 2025・7・20	貫泰夫 奥田豊治	瑞江第3中学校 葛西南高校	鳩になって第6集発行 原爆展開催	トランプ関税2.0 イスラエルと米国が イラン核施設爆撃



追悼碑除幕式で挨拶される
中里喜一区長(1981年7月26日)



除幕式には丸木位里・俊ご夫妻も参列くださいました

※画像、内容の無断利用はかたくお断りします



原爆行

土屋竹雨

怪光一綫下蒼旻 忽然地震天日昏
 一刹那間陵谷變 城市臺榭歸灰燼
 此日死者三十萬 生者被創悲且呻
 生死茫茫不可識 妻求其夫兒覓親
 阿鼻叫喚動天地 陌頭血流屍橫陳
 殉難殞命非戰士 被害總是無辜民
 廣陵慘禍未曾有 胡軍更襲崎陽津
 二都荒涼鷄犬盡 壞墻墜瓦不見人
 如是殘虐天所怒 驕暴更過狼虎秦
 君不聞啾啾鬼哭夜達旦 殘郭雨暗飛青燐

山本会長の詩吟を聴いて

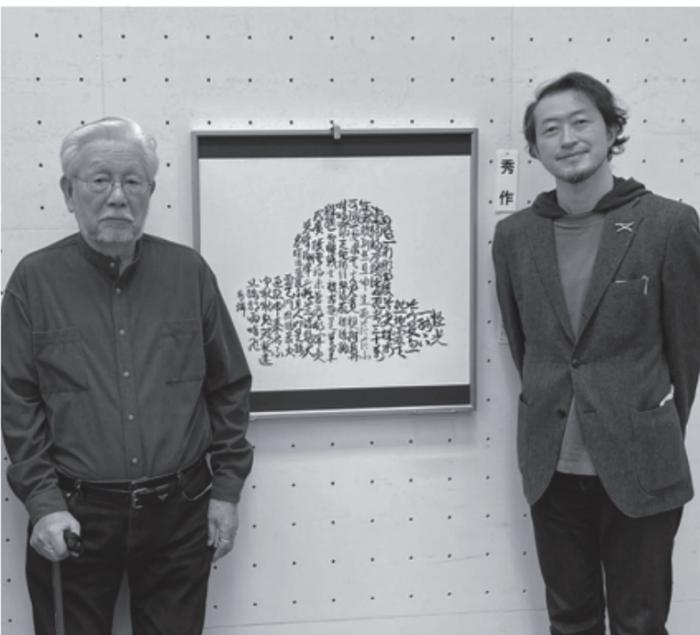
曾我 篤

2022年8月11日、私は流山のスターツおおたかの森ホールで開催中の「戦争の記憶と記録を語り継ぐ映画祭」に行きました(以前は2012年より「新藤兼人映画祭」として開催されていましたが、映画好きな私はほぼ毎年行っています)。その日は親江会の山本宏会長による被爆証言がありました。ですが、被爆者の体験談を直接耳にするのはこの日が初めてでした。

実は山本さんが被爆体験を語り始めたのは5年前、それまでは家族内でも一切話したことがありませんでした。それほどに壮絶な、トラウマになつてしまった体験を、まだ元気なうちに語り継がねばならないと決意したそうです。

お話の最後に会長は、土屋竹雨(1887〜1956)が原爆投下後の広島を詠んだ漢詩「原爆行」の詩吟を披露してくださいました。詩吟を聴くのも私にとっては初めての体験でしたが、ホー

ルの隅まで響き渡る、朗々とした会長の声に、私は激しく魂を揺さぶられてしまいました。この時、会長がトラウマとたたかいたながら声を振り絞って語った被爆体験を、核廃絶の切なる願いを、土屋竹



雨の漢詩を借りて、作品を作らねばと決意したのです。

そうして出来た作品が「原爆行」です。近くで見ると漢詩の書ですが、離れたところから眺めると原爆ドームの形が見えてくるという、私が編み出した『文画』の技法を用いた作品です。本作を、その年の12月に開催された「第50回記念国際書道連盟展」に出品したところ、幸運にも秀作賞を受賞しました。この喜びを山本会長にも伝えたくて、映画祭の主宰者である御手洗志帆さんに連絡先を教えてください、会長に受賞の報告を行いました。会長は私の報告をととても喜んでくださり、東京都美術館の展示会場まで来てくださいました。

そこから山本会長との交流が始まり、現在に至ります。親江会の活動に携わるようになってからは、戦争や原爆をより身近に感じるようになり、また核廃絶を、平和を目指して、これからも親江会のお手伝いをしていこうと思っています。

曾我篤 プロフィール

2012年、セールのカリグラフィペン購入をきっかけにカリグラフィの独学を始める。2016年より西村弥生氏に師事、伝統的ラテン文字カリグラフィ、文字装飾技法および紋章学を学びながら、並行して東洋の文字(梵字、チベット文字等)を独学する。2018年よりカリグラフィアとして活動、世界中の様々な文字を使用した創作活動を行う。

コロナ禍中の2020年前半、カリグラムの発展型としての「手書き文章による絵画的表現」を試行錯誤の末に習得、その世界に類のない表現技法で制作した作品を『文画』と命名(商標登録第6690406号)、

世界の偉人をモチーフにした文画の制作を精力的に行っている。1970年青森県西目屋村生まれ
東京都在住 親江会
参与会員



編集後記

- 被爆者の方は皆さん被爆のことを徹底的に話さないのですね。それだけ深いトラウマで、生きていくにはそのことに蓋をしていないとらないのだと思います。戦争の無い世界を目指してほしいです。岡田 隆法
- 今回たくさんの若者の原稿を読みました。親江会の平和学習が長い間若者たちに大切な働きかけをしている事を改めて知りました。今回一度まとめて、また引き継がなくてはとの思いを強くしました。小池 孝之
- 第1集と第2集の特徴を振り返ってみると、第1集(1982)の証言は13人中7人が「親江会だより」からの転載。第2集(1984)追悼式での証言者は二人。初めて被爆二世、小学生高校生の発言も。相川さん、臼井さん父子への追悼文。ここにその後の証言集充実の原型があると思われます。小林 功
- 被爆者の方々、二世、三世のお話に加えて中高生の発表や被爆者の話を聞いた高校生が描いた絵を拝見するという貴重な体験をすることができました。1～5集を読み返すことで多くのことを学ばせていただきました。新村
- 被爆から80年目に発行する『鳩になって』第6集、これが最後となります。原爆投下についても、80年前の長崎が最後でありますように。曾我 篤
- 被爆者21名、二世、三世6名、そして若き生徒たち11名の原稿を編集し終え、驚いたのは生徒たちの平和への意識の高さでした。涙こらえながらの編集でした。平和な日本、平和な世界を守り抜いていただきたい。関口
- 仕事を通じて山本会長と知り合い、その人柄に惚れ、わずかですがお手伝いをさせていただきました。部外者のわたくしを快く受け入れてくださった親江会の皆様に感謝申し上げます。夏の思い出ができました。ミカ

鳩になって

—江戸川・被爆者の証言 第6集
2025年9月14日発行

編集・発行／

江戸川原爆犠牲者追悼碑の会

会長 山本宏

編集委員／岡田隆法 小田美智子

小池孝之 小林功 佐藤鈴子

新村井攻子 関口寿義 曾我篤

高比良毅 松本美香 村田くみ

山本宏 (五十音順)

挿絵／新井陽 池田南

小林みどり 曾我篤

協力／広島平和記念資料館

長崎原爆資料館 丸木美術館

日本被団協 大橋美枝子ニュース

江戸川原爆語り部カフェ伊太利庵

発行所／東京都江戸川区

東小松川2-7-17

追悼碑の会事務局

印刷所／東京都中央区

日本橋人形町3-10-5

石川特殊特急製本株式会社

あとがき

被爆・戦後80年を迎えた今年も、ロシア・ウクライナ軍事侵攻、イスラエル・パレスチナ紛争など、世界各地で火種が絶えず、緊張状態が続いています。このような中、私たちは核兵器禁止条約の批准を求める10万筆署名活動と、自主企画の「原爆展」を実施してきました。

それは、私たちの子や孫、そのまた「百年後」の世代に被爆の証言と活動の記録を、しっかりと残すことが、生き残った私たち被爆者の責務と考えているからです。しかし、2025年6月現在、被爆一世の平均年齢は86・5歳。10年後には新たな証言を集めることは極めて困難になると予想されます。

そこで今回は、「二世の証言集大成」の意味を含め、本書を発行しました。この後の10年後等の発行は、二世、三世に託します。

未来へのバトンを確かに手渡すために。

(親江会事務局長 高比良毅)



聖歌を唄うカトリック
葛西教会信徒の皆さん



この「鳩になって」第6集および、第1集～5集、また、編集途上で発掘された親江会関連の過去の資料をデジタルアーカイブ化し、親江会ホームページ内に掲載しました。そちらもどうぞご覧ください。

<https://edogawa-shinkokai.com/>